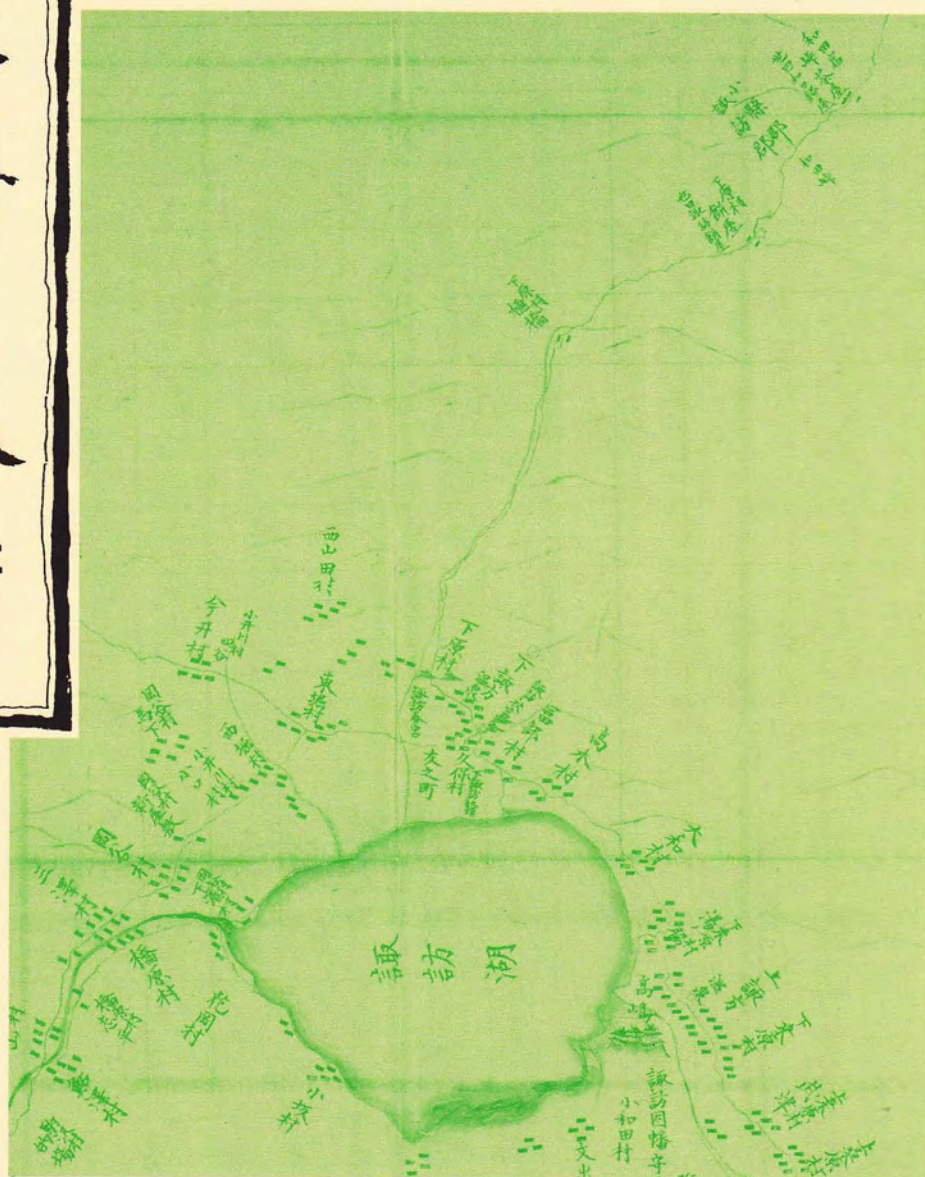


史料と伊能図

伊能忠敬

研究

二〇〇七年 第四八号



伊能忠敬研究会

現在より少し丸みのある諏訪湖が描かれている。この地域は第七次(九州第一次)測量の、主として往路に測量された。文化六年八月(一八〇九・一〇初旬)に江戸を発ち、中山道和田峠を越えて諏訪に入る。諏訪は中山道で唯一温泉のある宿場として賑わっていた。

峠越えして餅屋に一泊、下諏訪二泊、上諏訪・下諏訪各一泊の計五泊、坂部隊と二隊で手分けして測った。和田峠を越え、諏訪側の下原村餅屋には「世日諏訪餅屋」との注記がある(現在は東餅屋・西餅屋の名が残る。力餅の幟旗や峠越えの往還のたすまいが目に浮かぶようである。餅屋では六、七星観測、☆もしっかりついている。下諏訪、上諏訪でも天測。諏訪湖周辺に測線が多い。諏訪大社の春宮、秋宮、温泉など、注記も賑やかである。

東岸にある高島城のあたりから南岸沿いに、表紙図では多分、影のように見えている部分は黄色と灰緑色に彩色されている。日記には、湯の脇(下桑原村)から湖畔に下りたが岸に沿う道がないので、有賀村までは舟から測ったとある。河川による埋積の進む低湿な土地だったのだろう。

湖岸の高島城は「諏訪の浮城」という別称を肯かせるが、現在では埋め立てなどで湖岸が前進し、七、八百メートルの内陸になっている。諏訪湖の形に現在との違いがあるのは湖岸の変化のあらわれでもあるようだ。

復路は文化八年の四月中旬(一八一・六)、伊奈谷沿いに北上、鮎沢村で往路の印に繋ぎ、上諏訪、甲州街道経由で江戸を目指す。

(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

鈴木 純子

目次

48号

祝 伊能(一)夫妻紺綬褒章受章

伊能洋氏の紺綬褒章受章をお祝いして

伊能さんの受賞を祝う

積善の余光を拝して

特 報

浅草天文台の詳細図を発見!

忠敬研究会誌で紹介「群青の人」

話 題

「伊能大図謄写図」調査概報(二)

伊能大図総覧の地名と景観(二) 正月不知

未完の天文暦学者 伊能忠誨

バリ島の夜 南の星空を見た 平安の快僧浄蔵

初の女性学長 ハーバード大学から

完歩から観歩へ 体喜ぶ「木谷道宣さん」

研究ノート

「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(五)

濱宅宮内家所蔵資料から(その二)

間宮林蔵の病状・死因

伊能忠敬測量隊が観測した星(二)

「榎本武揚文書」解説余話

地域史料

久美浜に於ける伊能測量(二) 郷土久美浜誌

今井八九郎の「室蘭図」(二)

忠敬談話室だより

お便り特集

日々の話題 お知らせ 佐渡旅行、祝賀会・総会 編集部 七二

表紙図解説 鈴木純子

編集委員 前田幸子

産経新聞 一

金窪 敏知 二

植田 浩一 三

西川 治 四

荻原 哲夫 六

北陸中日新聞 一〇

鈴木 純子 一一

星 堃 由尚 一六

佐久間達夫 二一

上田 勝俊 二六

編 集 部 三〇

朝日 新聞 四一

宮内 敏 三一

宮内 敏 三四

杉浦 守邦 三六

佐久間達夫 五四

伊藤 栄子 六一

松田 昭二 四二

井口 利夫 四六

福田 弘行 六七

編集余話

編 集 部 七二

祝 伊能ご夫妻 紺綬褒章受章 偉大な光を後世へ伝承 目録作成に大いなる貢献 安藤由紀子さん

伊能洋さんに紺綬褒章

忠敬の資料寄贈 20年かけて目録

江戸時代に国内初の実測地図を作った伊能忠敬（1745～1818年）に関する資料を香取市に寄付した功績で、忠敬の子孫で洋画家の伊能洋さん（72）＝東京都世田谷区＝に紺綬褒章が8日に授与された。市役所での伝達式に出席した洋さんは「受章は大変光栄です」と静かに喜びを語った。

洋さんは昨年1月、世田谷の自宅に残されていた書簡や江戸幕府からの辞令など忠敬に関する資料918点を、香取市の施設「伊能忠敬記念館」に寄贈。公益のために財産を寄付した功績がたたえられ、国から紺綬褒章が贈られた。忠敬は18歳のとき、香

取郡佐原村（現香取市）で酒やしょうゆを醸造する伊能家の嫡養子に入り、商人として活躍。50歳で隠居後は江戸に出て地理学や西洋文学などを学び、寛政12（1800）年から全国の測量をはじめ、国内最初の実測地図「大日本沿海輿地全図」を作製した。

寄贈された資料は江戸時代、忠敬の周囲の人たちが伊能家や忠敬本人にあてた手紙などが中心で、記念館では「忠敬の人物像を知るための基礎的資料として価値が高い」として、研究に役立てている。

洋さんは忠敬から数えて7代目当主の弟で、現当主（8代目）の淳さんの叔父にあたる。6代目当主が佐原から東京に移り住んだ後、洋さんの母から忠敬に関する書簡などが妻の陽子さん（72）に受け継がれた。陽子さんは「個人で持

家宝を香取に伝え「感無量」

っているより、公の役に立ててほしかった」と、膨大な資料を整理し、20年かけて目録の作成にこぎつけ、寄付に至った。宇井成一市長から褒章を受け取った洋さんは「祖母から妻まで女3代で守り続けてきた家宝が



宇井市長（左）から紺綬褒章を伝達された伊能洋さん、陽子さん
＝香取市役所

伊能洋氏の紺綬褒章受章をお祝いして

金窪 敏知

このたび、伊能洋氏が紺綬褒章を受章されたことは真にお芽出度いことであり、心からお祝いを申し上げます。

紺綬褒章は、公益のため私財を寄付した方等に対し国家から与えられるものであって、伺うところでは、伊能氏が世田谷のご自宅に伝わる伊能忠敬に関する貴重な史・資料を、香取市の伊能忠敬記念館に寄贈されたことに対する栄典の由である。

伊能家に伝わる文書については、伊能忠敬研究会の発足以来すでに十有余年、多くの方々により研究が進められているが、先の平成十五年の伊能淳氏による記念館への寄付に続き、この程世田谷伊能家伝存の文書が寄贈され、更に広く研究者の便宜に供せられる運びとなったことは喜ばしい限りである。それと同時に、ここに到るまでに史・資料の解説、整理、目録の作成に費やされた労力は並々ならぬものであらうと推察され、その衝に当られた伊能陽子夫人ならびに安藤由紀子さんのご功績に深く敬意を表したい。

ところで陽子夫人は、「伊能忠敬研究第七号」に「ご縁がありまして」と題して、私ども夫妻についても触れておられるが、私も伊能家との不思議なご縁について述べてみたい。

今から三十年程前の昭和五十二年のこと、私の次女美帆子は私の母校でもある世田谷区立松沢小学校の六年生、クラスは違うが伊能さんのご長男亮さんが同学年であった。陽子夫人はPTAの副会長、私の妻美子は書記を務めた。伊能副会長はてきぱきと会務をこなされたそうである。伊能家とのご縁は、私よりも妻の方が遥かに早い。

程なく勤務先である国土地理院が目黒区東山から筑波研究学園都市に移転し、私どもも世田谷の家を留守にしたので、一とき両家の交際は途切れた。

ご縁が復活するきっかけとなったのが、実はフランスにあった伊能中図である。手帳のメモによると、平成二年九月五日のこと、国土地理院を退官して日本地図センターの常務となり、モロッコ王国の地図作成技術協力の出張から前日に帰国したばかりの私に、電話があった。日本で研修中のフランス女性で、自分の家に古い日本の地図があり、写真を持参しているのを見て欲しいというのである。渋谷の「犬の銅像」の前で会ったのが、イブ・ペイレ氏のお嬢さんのマリアンヌさんであった。

この後の詳しい事情は「伊能忠敬研究第七号」の討論会記事に譲るが、ペイレ氏が所蔵しておられる「伊能図」を、何とか確認したいと思いつながら果せなかった私を訪ねて来られたのが渡辺一郎氏であった。これもメモによると平成六年十月六日である。旺盛な探究心から渡辺氏がペイレ家を訪ねて「伊能図」を確認されたのが翌七年四月、そしてご努力が実って伊能図の里帰りが実現して、十月に佐原市で展示が行われた。

このような流れの中で伊能ブームが起り、私も何かのレセプションで妻から陽子夫人を、そして洋氏を紹介されたのであった。

実は伊能家とはもう一つご縁がある。次女美帆子は結婚して貴島姓となり三人の子供を儲け、世田谷の我が家を二世帯住宅に改造して住むようになった。子供たちは何れも松沢小学校に就学した。五年ほど前のこと、長女の紗代子が「画の勉強がしたい」と言うので、ご指導をお願いしたのが伊能洋先生のアトリエで開いておられる絵画教室である。直接教わっているのはご次男の琢先生であるが、時々は大先生（おおせんせい）にもご指導を頂いているらしい。中学生の彼女は学校から帰るやいなやアトリエに飛んで行く。今では我々よりも伊能家の内情に詳しいようである。

（かなくぼ としとも・元国土地理院長）

☆

☆

☆

伊能さんの受賞を祝う

植田 浩一

伊能洋さんが紺綬褒章を受けられたこと、知りませんでした。多分、私自身が胃潰瘍で入院中（二・一九～三・六）のことだと思ふ。

洋さんと話しをかわしたのは、富岡八幡で開かれた伊能忠敬研究会の総会の時だったと思う。研究会には創立当初から出席しているし、佐原で開かれたイブ・ペイレ氏を迎えての講演会にも聴衆の一人として参会しているが、当時は何も知らなくて

発言したこともないのに、私自身が犬男で目立ったからか、富岡八幡での総会の席で大きな声で呼びかけられ「ハッ」とした覚えがある。

その前後のことだったと思うが、東上野の源空寺の佐藤一斎撰文の忠敬墓碑銘には忠敬の諱は「子齊」とあるのに、両国の江戸博で開かれた時の忠敬図展の時の公式図録には「子斎」とあり、いずれが正しいか。また、墓碑銘の筆者名「関研」とあるのに、忠敬さんの孫の忠誨の日記「忠誨日記」(研究会の機関誌三八号に掲載された)には「右認候仁、岡啓次」とあり、いずれが正しいか問合せたところ、いずれも現物は佐原の記念館の方に寄託してあり直接には確認できない、とのお答えだった。茫洋とした鷹揚とした人で、その後、スケッチなどいただき、私も志している能力を持った芸術肌の好ましい人のように思えた。実務家肌の忠敬さんとは対蹠的なお人柄で、人の世はこれでいいのだと、この頃、思うようになった。

(うえだ こういち・朝日新聞社OB)

☆

☆

☆

積善の余光を拝して

西川 治

積善の家には必ず余慶あり、それは伊能忠敬先生のご子孫に止まらず、国民すべてがその余光に浴してきたと言ってもよいでしょう。その上、伊能洋ご夫妻におかれてはこの平成の御世に、世界地図史上の国家的偉業と関連する史実の研究を深め広めるためにも極めて貴重な資料『世田谷伊能家伝存伊能忠敬関係文書』を、その綿密大部な目録(二〇〇六年六月編集発行 安藤由紀子・伊能陽子)を添えて、伊能忠敬記念館に追加寄贈されました。このさらなる積善にこぞって深謝し、栄えある御受章を心からお祝い申しあげます。

これまでも明治・大正・昭和・平成の各時代に伊能忠敬先生の遺功表、銅像などの除幕式典には、代々のご子孫が臨席され、顕彰と研究教育の推進運動にもさまざまな面で寄与されましたが、こうした長い素晴らしい伝統も比類ないものでありま

しよう。とりわけ、忠敬先生の生誕二五〇周年（一九九五年）ごろからの、伊能忠敬研究会員方による全国的な調査研究の展開と内容豊かな機関誌の蓄積、渡辺一郎氏と協力者方による各種伊能図の発見、画期的な大図全体の集成と見事な展示会及び庄巻『伊能大図総覧』（河出書房新社刊行）、伊能ウォークなど全国的記念行事の盛況は、伊能洋ご夫妻のお人柄による求心的役割とご尽力の賜でもあります。

こうした伊能家と国民との広範なつながりは、歴史的必然と考えてもよいのではないのでしょうか。なぜならば、忠敬翁の名声は久しく天下にあまねく、前後十七年間の全国にわたる全行程は実に三千七百五十三日にのぼり、その間に測量隊を目撃した人数は全人口の大半を超えたはずだからです。文字通り津々浦々をはじめ、主要街道を歩き入念に実測しながら通過した村と町の数約三万六千、全国の総数約六万数千の半分を超えるが、人口ならその比率はさらに高い。しかも、各地で測量に直接間接にかかわった人数は、たとえば、かの有名な絵巻物「浦島測量之図」や絵図「御手洗測量之図」から推測されるように、百人内外に及びます。おそらく全国ではのべ数十万人に達したことでしょう。すると、当時の我々先祖たちの誰かは、多分どこかで伊能忠敬一行に何らかのかたちで協力したり、少なくとも実測状況を見聞したことになりました。

全国のむらむらを数珠つなぎにして、藩をこえた日本人の自覚を共通の国土に結び付けた神武らしいの大業。御用の旗を掲げたとはいえ、百姓・町人出の伊能忠敬翁が直接間接に接した人々、道々出会った人数は水戸黄門さまもかなうまい。『測量日記』（佐久間達夫編著 大空社）や伊能大図と『伊能大図総覧解説』（執筆 星埜由尚）によって確認される測量隊の宿泊地ごとに、その二百周年を記念する石碑か標識を設置して積善の余慶が子々孫々にまで及ぶすがにしたいものです。

（にしかわ おさむ・東大名誉教授、人文地理学）



特報

浅草天文台の詳細図を発見！

荻原 哲夫

はじめに

伊能忠敬が隠居後、寛永七（一七八九）年江戸・深川黒江町に移り住み、通ったのが浅草天文台で、頒曆調所・測量所とも称した。そこへは忠敬が高橋至時のもとに五年間通い、当時最高の天文暦学の勉強を行い、至時の下で緯度一度の子午線弧長を実測しようと研鑽に励んだ場所であり、日本地図作成の出発点となる場所として忘れられない場所である。その浅草天文台の絵図の写しを送られた私は、ひと目見るなり「あつ！」と絶句したまま、三十分以上も見つめ続けた。

浅草天文台詳細絵図の発見

この絵図の発見者は佐藤利男さんと、私と同じ東亜天文学会の会員で、前任の歴史課長です。一九七五牢頃から明治期に日本を訪れ日本及び日本人を研究した有名な火星研究天文学者バーシヴアル・ローウエルの事跡を調べられるなど、明治から昭和の近代日本天文学史に関する資料を丹念に調査、発掘されて、『星の手帖』や『天界』などに次々と発表されています。東京のさる邸宅にあった望遠鏡に関する話は、私が住んでいたS町での望遠鏡の発掘に関係して興味を引かれ、さらにその望遠鏡を入手され、個人天文台に据付けられたAさんにまつわる悲しい思いでとともに私には忘れることが出来きません。

それ以来、「佐藤さんの調査は凄い」と思い尊敬しています。

一九九三年に佐藤さんは、それまでに発表された三十数編を単行本にまとめられ、

『星慕群像―近代日本天文学史の周辺―』佐藤利男著 星の手帖社として出版されました。

「資料の探索方法は人が探さないようなところを探すこと。誰もが見るようなところには発見は無い」という言葉は私への強い教えになつていきます。インターネットで検索して見つけようなどと手抜き調べでは良い資料には出会えませんが、ということでしょう。私が伊能忠敬研究43号（2006年）に書いた「もうひとつの伊能図―忠誨星図―」の中で、伊能忠敬も見たのではないかと推定した高森観好の「星座之図」（文化十年八月製作）を閲覧したメンバーの中に佐藤さんも居られました。

さて、紹介する絵図は佐藤さんが、東京都公文書館の所蔵資料の中で発見したもの。佐藤さんによれば、都公文書館には『順立帳』という明治初年の公文書綴がある由。これは明治元年から四年までの大量の書類を、編年体でファイルしたもので、簿冊の数は156冊に及ぶ。全冊マイクロフィルム化されているが、案件別リストが、未整備だという。

忠敬先生や孫の忠誨ほか天文台の人物に関係する建物や設備について興味ある説明をしましょう。

まず①の築山の上の簡天儀・象限儀は略すわけには行きません。葛飾北斎の「鳥越の不二」の絵で有名ですが、簡天儀は渾天儀の簡易版であり、ふつう天体の位置と運行の概念を説明する目的の装置です。この天文台に据付けられたものは大型なので測量に使えたのかもしれませんが。天文台のシンボルでもあったのでしよう。

北斎は妙見信仰していたといわれ、形状が面いから描いたのでしょうが、北斗七星を測る装置と思ったのかも知れません。

それに対して隣の象限儀は忠敬も大野弥五郎規貞・弥三郎規行親子

に作らせた同様の機器を持つており、佐原の記念館に収蔵されています。恒星測量で緯度を測る基本的な測量機器で、忠誨の日記によれば文政九年七月二日に最後に使用したようです。

②は頒曆調所で天文方が作成して京都の土御門家で承認を受けた曆を曆問屋に頒布する役所です。

③が筆頭天文方の居宅で、この絵図のときは山路金之丞の住まいでした。「久間孝子覚え書き」には山路家の建物配置に関する覚え書きと手書きの「山路家官舎見取図」が添えられてあったのですが、今回の絵図が見つかり比べてみたところ、良く合っているのには驚くばかりでした。

忠敬の入門時から第四次測量までは勿論、高橋至時先生が住まい、以後、忠敬と孫・忠誨の死去まで高橋景保役所でした。忠敬が通って勉強をしていた頃、黄昏になりあわてて自宅での天体観測のため帰るので、竹光の脇差などを忘れて帰り皆に笑われ、至時先生から熱心の余りによるのだと「推歩先生」のあだ名を付けられたのもこの屋敷です。ただ景保が一度不始末で火事を出し、柴山伝左衛門が手伝い全焼には至らず済んだのです。

実はその柴山の息子は成長して、天文台取締・柴山伝之助として⑨の屋敷に住んでいたことはこの絵図で知りました。柴山の研究者である安永純子さんにお知らせして喜んでもらえました。

④・⑤・⑥の屋敷は天文方手付け下役の役宅です。シーボルト事件による高橋景保の失脚後は、筆頭天文方は山路弥左衛門諧孝があたることとなります。この絵図のときには諧孝の息子の山路金之丞（弘化二年四月十二日・天文方となる）で手付け三人を使っていたようです。高橋景保が製作した新訂万国全圖は諧孝に預けられ、改訂版を出すことで景保の名は消えます。金之丞も万延元年に改訂版を出しました。この詳細絵図は弘化三年、万延年間に描かれたと推定しています。

絵図の東南、天文台入り口近くの⑧には足立左内役所が描かれています。天文方足立家はシーボルト事件で天文方を廃された高橋家に代わって登用されました。忠敬の知っているのは足立左内信頭で、天文方登用は天保六年十一月十八日ですから屋敷はそれ以降の建築です。文政十年に伊能忠誨が亡くなり、約十年後に建てられ、天文方・足立左内と重太郎親子が役宅を持ってました。この絵図の描かれたときには重太郎の子の衆之助が足立左内信行として足立役所に住んでいました。手付け下役も何人が置いていたと思われます。

おわりに

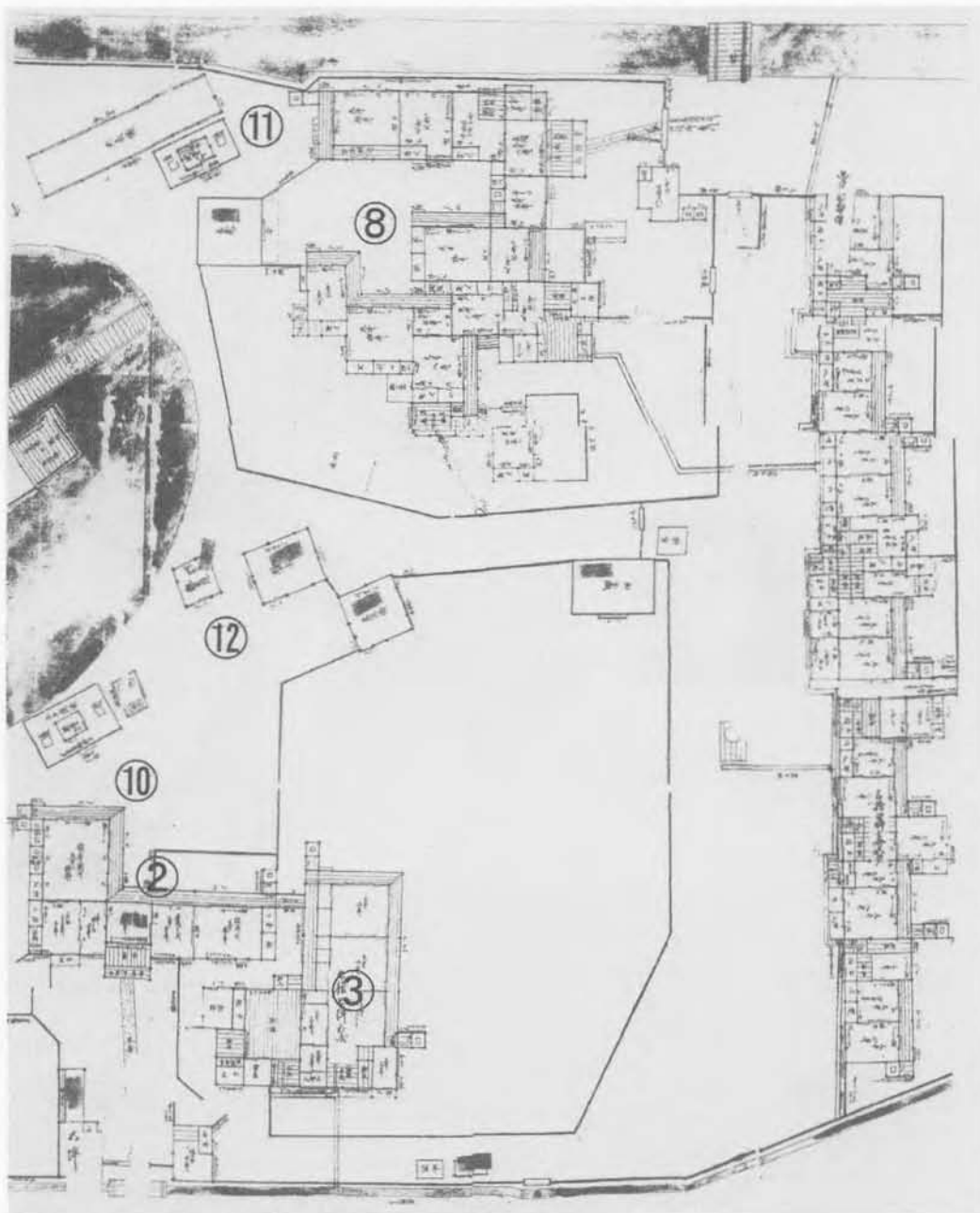
佐藤利男さんには浅草天文台絵図ほか資料を提供いただいたことを感謝いたします。NHKの大河ドラマに「伊能忠敬」が実現したときにはこの詳細絵図からCGで浅草天文台を再現させ、そこに至時・忠敬先生を登場させたいというのが私の夢です。伊能忠敬は全国を廻った偉人ですのでぜひとも大河ドラマにすべきです。（笑）

参考文献

- 佐藤利男「江戸浅草天文台の建物配置と諸設備 1・2」
『天界』 8・9月号 2006年
- 下沢剛・広瀬秀雄「久間孝子覚え書き―幕末期天文方の生活―」
『科学史研究』 103号 1972年
- 安永純子「伊能測量隊員柴山伝左衛門について 1・2」
『伊能忠敬研究』 45号46号 2006年
- 佐久間達夫校訂『伊能忠誨の日記』（私家版） 平成14年

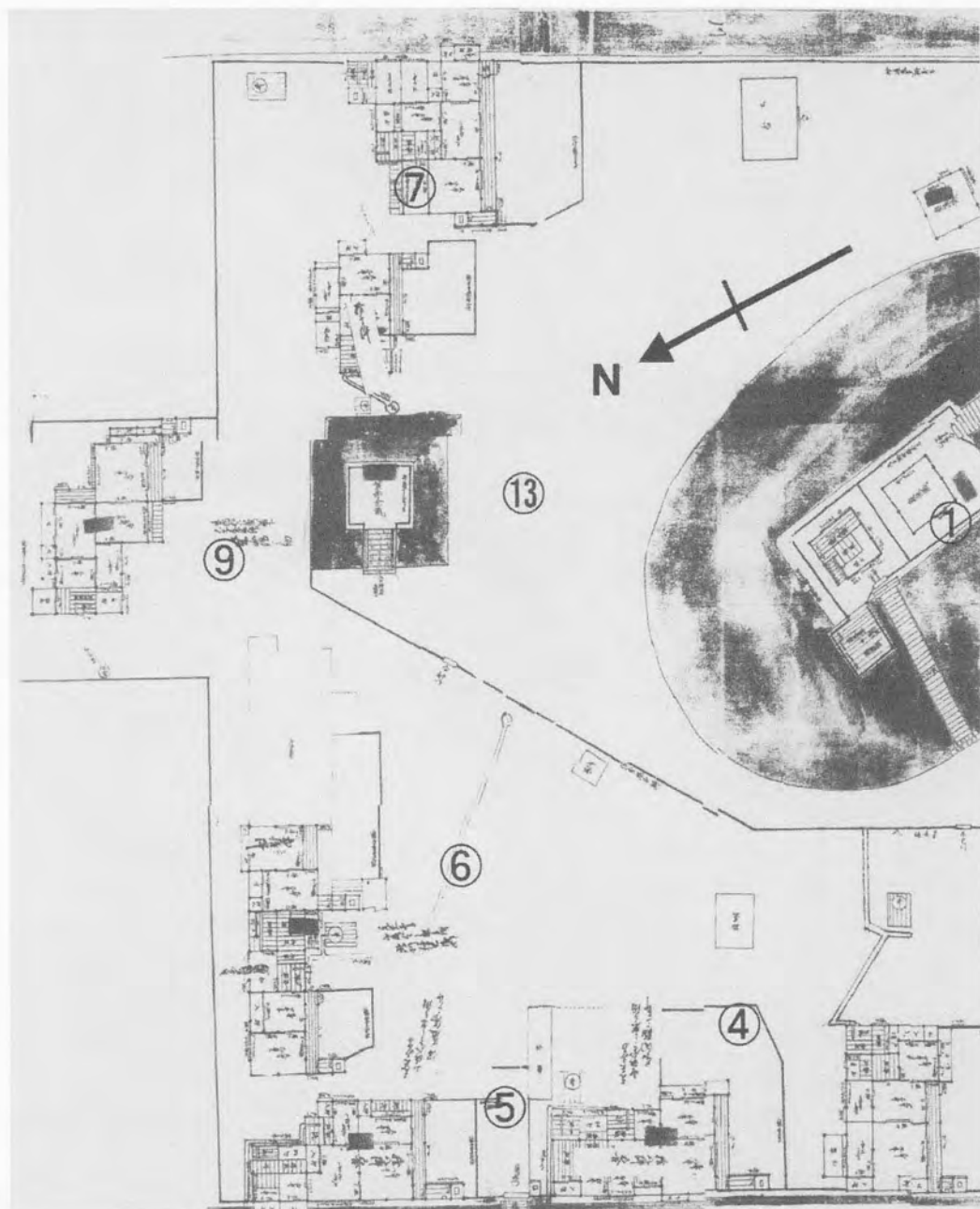
*注 当時は現在の天文台を司天台と称していました。

（おぎわらてつお・東亜天文学会歴史課長）



詳細図]

- | | |
|-----------------|-------------|
| ⑧ 天文方・足立左内役宅 | ⑪ 子午線儀2と圭表儀 |
| ⑨ 天文方取締・柴山伝之助役宅 | ⑫ 観星鏡 |
| ⑩ 子午線儀1 | ⑬ 黄赤全儀 |



〔江戸浅草天文台〕

- ① 簡天儀と象限儀
- ② 頒曆調所
- ③ 天文方山路家居宅

- ④⑤⑥ 天文方手附役宅
- ⑦ 天文方吉田家役宅

文化 芸術

「二百余年前の伊能忠敬測量隊の能登半島踏査を描いた作家能美龍一郎氏の小説『群青の人』」第17回日本海文学大賞北陸賞受賞が、伊能忠敬研究会（東京都目黒区）の会誌第47号に取り上げられた。河崎倫代・同研究会石川支部長（金沢市）は「能登内浦へ向かった忠敬隊と手分けして断崖絶壁の続く外浦を測った弟子・平山郡蔵の、群青の日本海のように揺れ動いた心理が見事に描写されている」と紹介。能美氏の特別寄稿『「群青の人」の周辺』も掲載して全国の忠敬ファンから注目されている。

「群青の人」冒頭には「伊能忠敬の足跡は、大聖寺に上ったのは一八〇三（享和）三年八月十日（旧暦六月二十四日）。内浦・外浦に分かるまでは、現宝達水門には旧暦七月四日に達している」

「群青の人」冒頭には「伊能忠敬の足跡は、大聖寺に上ったのは一八〇三（享和）三年八月十日（旧暦六月二十四日）。内浦・外浦に分かるまでは、現宝達水門には旧暦七月四日に達している」

「二百余年前の伊能忠敬測量隊の能登半島踏査を描いた作家能美龍一郎氏の小説『群青の人』」第17回日本海文学大賞北陸賞受賞が、伊能忠敬研究会（東京都目黒区）の会誌第47号に取り上げられた。河崎倫代・同研究会石川支部長（金沢市）は「能登内浦へ向かった忠敬隊と手分けして断崖絶壁の続く外浦を測った弟子・平山郡蔵の、群青の日本海のように揺れ動いた心理が見事に描写されている」と紹介。能美氏の特別寄稿『「群青の人」の周辺』も掲載して全国の忠敬ファンから注目されている。

忠敬研究会誌で紹介



能美さんの「群青の人」を紹介した「伊能忠敬研究」第47号

能美さんの「群青の人」を紹介した「伊能忠敬研究」第47号

「群青の人」冒頭には「伊能忠敬の足跡は、大聖寺に上ったのは一八〇三（享和）三年八月十日（旧暦六月二十四日）。内浦・外浦に分かるまでは、現宝達水門には旧暦七月四日に達している」

「群青の人」冒頭には「伊能忠敬の足跡は、大聖寺に上ったのは一八〇三（享和）三年八月十日（旧暦六月二十四日）。内浦・外浦に分かるまでは、現宝達水門には旧暦七月四日に達している」



能登半島最先端、石川県珠洲市狼煙町に「伊能忠敬と灯台と民具の能登さいはて資料館」がある。若いころ「故郷の狼煙まで忠敬が来た（実際は能登町松波まで）のはすごい」と思ってきた河崎倫代・伊能忠敬研究会石川支部長が、閉鎖した民具資料館を活用し、手作り看板で再オープン。日本のさいはての地を踏査した伊能測量隊とそこで日本の海を守ってきた灯台がテーマの私設資料館。開館は4月11日の土、日曜日。入館料100円（高校生以下無料）

■忠敬研究会誌で紹介 二百余年前の伊能忠敬測量隊の能登半島踏査を描いた作家能美龍一郎氏（金沢市、本名・早瀬徹）の小説「群青の人」＝第17回日本海文学大賞北陸賞受賞＝が、伊能忠敬研究会（東京都目黒区）の会誌第47号に取り上げられた。河崎倫代・同研究会石川支部長（金沢市）は「能登内浦へ向かった忠敬隊と手分けして断崖絶壁の続く外浦を測った弟子・平山郡蔵の、群青の日本海のように揺れ動いた心理が見事に描写されている」と紹介。能美氏の特別寄稿『「群青の人」の周辺』も掲載して全国の忠敬ファンから注目されている。

■珠洲に「さいはて資料館」 能登半島最先端、石川県珠洲市狼煙町に「伊能忠敬と灯台と民具の能登さいはて資料館」（2006年10月21日開館）がある。若いころ「故郷の狼煙まで忠敬が来た（実際は能登町松波まで）のはすごい」と思ってきた河崎倫代・伊能忠敬研究会石川支部長が、閉鎖した民具資料館を活用し、手作り看板で再オープン。日本のさいはての地を踏査した伊能測量隊とそこで日本の海を守ってきた灯台がテーマの私設資料館。

■旭川の安川義巳さんの機転から 3月9日安川さんから事務所にFAXが着信。『「群青の人」は北陸中日新聞社に残部なし。予備の1冊を提供して頂けることに。その折衝過程で47号との交換になった由』、ここから上記の記事に発展。4月9日河崎さんから「新聞に載りました！」。

■能登半島地震の被害 河崎さんの情報では被害は軽微。ただ観光客が激減で4月上旬の入館者はゼロ。珠洲にお住まいの河崎さんのご両親はお元気。これから板壁の塗装に入るそうです。（F）

「伊能大図謄写図」調査概報(一)

鈴木 純子

一、海上保安庁で詳細調査が実現

二〇〇四年に行われたアメリカ伊能大図展で、アメリカ大図の七枚の欠図のうち、最後まで埋められず、空白部として残っていた四枚が、海洋情報部所蔵図の中から見つかったとして大きく報道されたことは、未だ記憶に新しいことと思う。

海洋情報部の伊能大図の存在は前から知られていたのに、なぜ今頃？と思われるかもしれないが、本年一月二日(月)から二四日(水)の三日間、海上保安庁海洋情報部において、同部所蔵の「伊能大図謄写図」(海洋情報部ではこの名称で整理されてきた)全一四七枚についての詳細調査をおこなった(写真1)。一四七枚は、伊能大図を原寸で模写したもの六枚、縮小模写したもの一四一枚よりなる。縮小図には伊能図本来の様式で描かれたものと、平面図式に改描したものの二種があり、これらのなかには伊能大図数枚分を集成した図も含まれている(今井・上林 一九九六ほか)。

調査には当研究会から渡辺一郎、星埜由尚、齊藤仁、伊能洋、坂本颯、秋畑武晃、鈴木純子の七名が参加したほか、井上均見(海洋情報部)、西田浩志(同)、今井健三(日本水路協会)、茂木敏男(河出書房新社)各氏の協力をいただいた。

調査にあたっては、昨年一二月に刊行された『伊能大図総覧』所収図と海洋情報部所蔵図を一点ごとに照合し、各図について図郭、内容などの改変状況その他をチェックして、それぞれの伊能図としての位



写真1 調査の様子 左から斎藤、星埜、渡辺、坂本、秋場、鈴木、今井の皆さん



最も忠実な伊能大図 海上保安庁に

江戸時代後期の測量家、伊能忠敬が作製した「大日本沿海輿地全図」の写しのうち、海上保安庁が所蔵する大図（縮尺3万6000分の1）の模写図3枚が、最も原本に近いとみられることが確認された。調査を行った同庁海洋情報部と「伊能忠敬研究会」（星埜由尚代表理事）が2日、発表した。

いわゆる伊能図の原本は皇居火災や関東大震災によって焼失しており、現存しているのは写しだけ。これまで、国立国会図書館が所蔵している43枚が、原本に最も忠実な模写として評価されてきた。今回、最高レベルと確認された模写図は、「佐伯」「大分」＝写真＝「宮崎」の3枚で、旧海軍水路部が明治10年（1877年）ごろに写したものの。

置づけを明らかにすることを主眼とし、あわせてデジタルカメラによる全ての地図の撮影を行った。『総覧』の刊行により、個別の大図の構成内容を具体的に把握できるようになったことにより、はじめて今回の調査が可能になったといえ、それが、なぜ今頃？という疑問に対する説明でもある。

調査結果についての、一四七図全ての個別データ表も含む詳細は、近く日本国際地図学会会誌『地図』に発表の予定（掲載巻号未定）である。いずれ掲載巻号をお知らせするので、あわせてご参照いただきたい。

なお、撮影した一四七図の全画像についても研究会ホームページに掲載の予定である。

二、報道、反響など

調査の結果については、二月二日の午後、海洋情報部において報道発表（写真2）を行なった。当日二時のNHKニュース、翌三日の読売（一面・カラー）、毎日（第二社会面）の各朝刊、また、共同通信社発信による各地方紙（中国新聞など）に写真入で大きく報道され（写真3）、朝日は遅れて二一日の掲載（夕刊）となった。いずれかの記事をご覧になった方も多いと思う。



写真2 右 報道発表（左から井上、星埜、鈴木の各氏）

写真3 上 読売新聞 2月3日 朝刊1面

新たに確認された
府内(大分)、佐伯な
どの優れた原寸模写
図の地元紙である
「大分合同新聞」は、
特に大きく「伊能大
図の模写 海保で発
見 大分、佐伯 精密
に再現」と報道して
いる。

海上保安庁が属す
る国土交通省内部で
も、反響は思いのほ
か大きく、二月一九
日には、冬柴鐵三国
土交通大臣が多忙の
なか、じきじきに海
洋情報部に出向かれての見学となったとのことである。(写真4)

ひきつづき、二月二三日の読売(朝刊)には、記者ノート「海保の
伊能図三枚 由来の謎」と題するフォロー記事、三月に入って四国新聞
社からは讃岐の図についての詳しい照会があるなど、なお反響が続い
ている。

三、海洋情報部の「伊能大図模写図」

これまでも紹介されているとおり、海上保安庁海洋情報部(旧水
路部)には、明治初期の旧海軍水路部による伊能大図の模写図一四七



写真4 181号大図に見入る冬柴国土交通相 2月19日海上保安庁

枚が所蔵されている。水路部が明治一〇年から一一年にかけて、内務
省地理局の保管していた伊能図(伊能家控図)を借用して作成した模
写図からの転写図とされるものである。水路部による最初の模写図は
関東大震災で焼失してしまったが、別に海岸測量の担当課(第二課)
が、この模写図から業務参考用に転写していた図が、焼失をまぬがれ
て残ったものだと伝えられている。

業務参考用に転写した図であるため、原寸の模写図六枚以外は、複
数の図を集成した図や、携行に便利のように縮小した図であるといわ
れており、リストも作成・発表されている(今井・上林、前掲)。しか
し、改変がどの程度行なわれているかについては、集成、縮小などの
改変を加える前の原図の状態がわからない限り困難であり、本格的な
調査にはこれまで着手できないままであった。

調査の記録は次号で報告したい。

(つづく)

なお、海洋情報部内の「海の相談室」においては、これらの図の原
寸カラーコピーによる閲覧が可能であり、カラーコピーの入手(有料)
も可能である。

連絡先 海上保安庁海洋情報部「海の相談室」

〒一〇四・〇〇四五 中央区築地五―三―一

電話 〇三・三五四一・四二九六(ダイヤルイン)

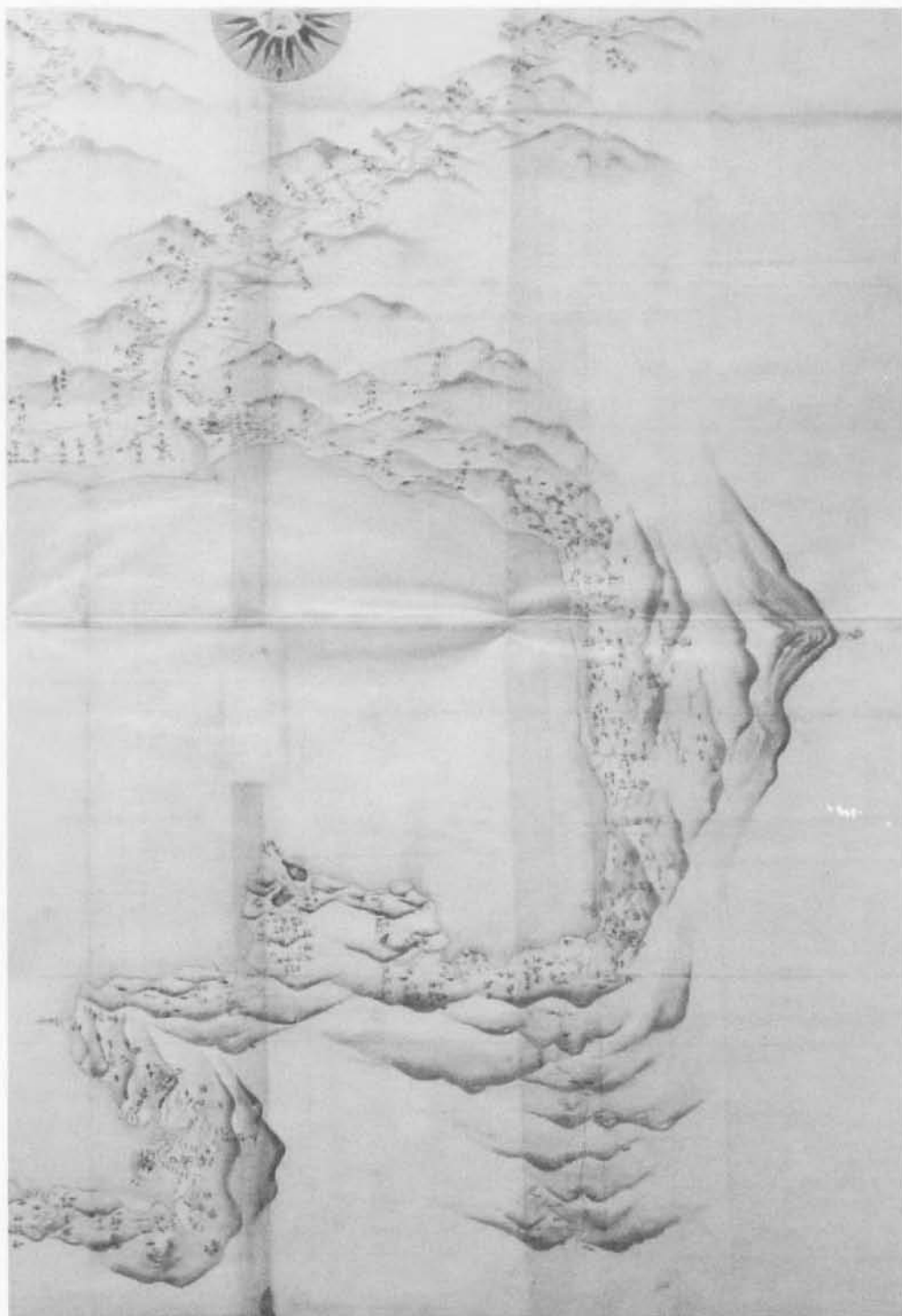
参考資料

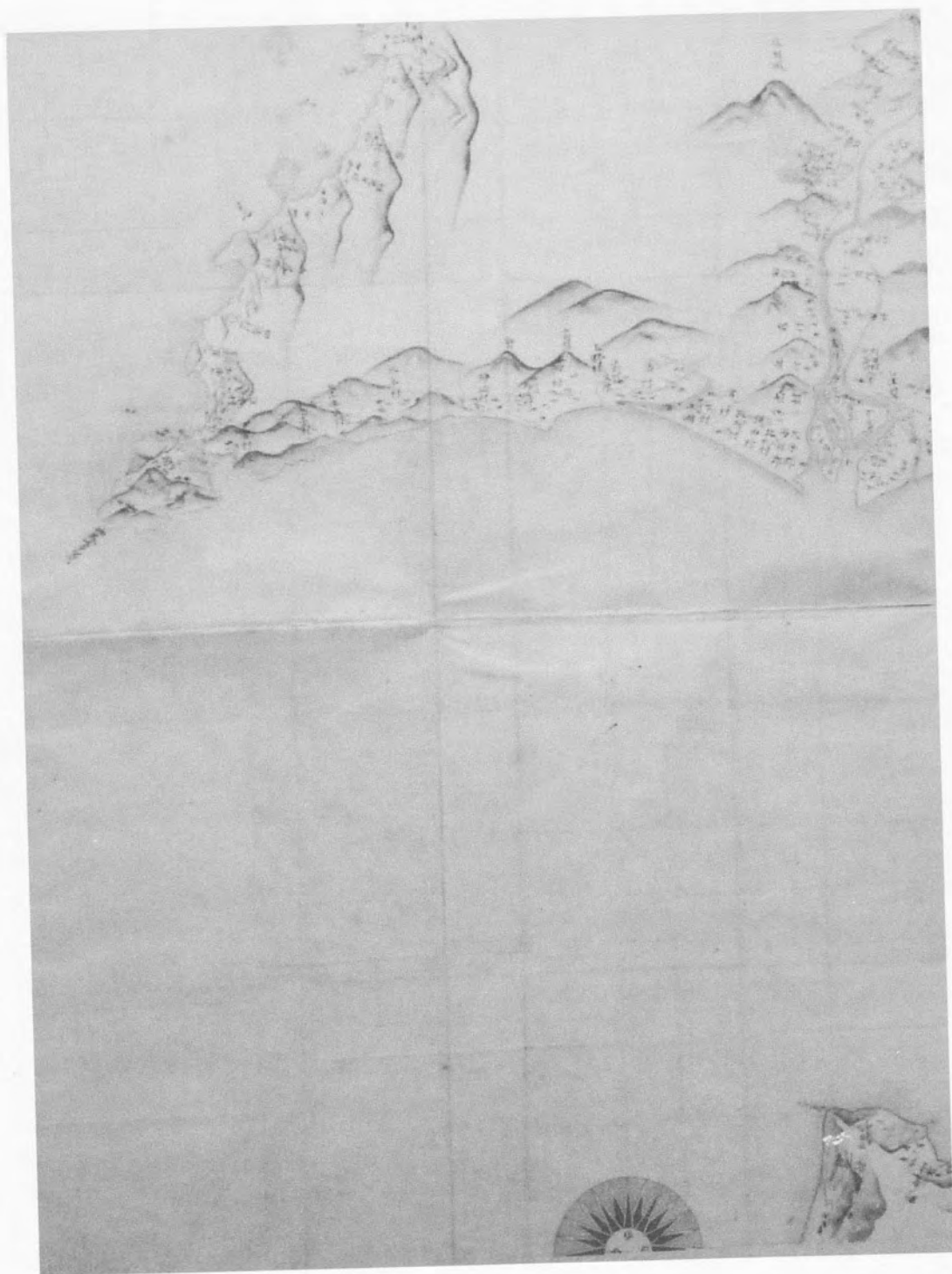
今井健三・上林孝史(一九九六)水路部所蔵の伊能図模写図について

地図三四巻2号 五四―五七頁

(すずき じゅんこ・日本国際地図学会評議員、地図学史、理事)

「伊能図式」(鳥瞰図式)の彩色図





伊能大図総覧の地名と景觀（二）

星 埜 由 尚

景觀表現と地名―その一―

伊能大図から景觀表現を読み取ろうとする場合、図の種類によりその情報量には大きな違いがある。「伊能大図総覧」に収載した図の中でも、国会大図や松浦大図は、丁寧に写され、「大日本沿海輿地全図」の姿を忠実に伝えているものではないかと思われ、その景觀表現には、さまざまな工夫が見られる。一方、アメリカ大図は、無彩色に近い図が多いため、景觀表現は乏しいのではないかと思われるが、アメリカ大図も図によるが、子細に見ていくとなかなか面白い表現が見られる。本稿では、それらの具体例をいくつか挙げてみたい。

北海道野付半島

北海道の東岸に北方領土を望む野付半島がある。標津町と別海町の境界付近に位置する海老のしっぽのような形をした巨大な砂州の複合した地形である。伊能忠敬は、ニシベツまで到達して引き返したわけだが、この野付半島は、間宮林蔵の測量データにより大図第五号に図化されている。野付半島に抱かれた内湾は、尾岱沼と呼ばれており、北海しまえびが獲れるところとして有名である。間宮林蔵は、野付半島の外海に面した側の海岸線を測量し、尾岱沼の側は、測線が描かれていないが、おそらく船から遠望して地形を確認して描いたのであろう。野付半島の先端の測線の終点から船で尾岱沼を渡ったのであろう。野付半島の先端にはフツケと書いた集落が見える、フツケはおそらくノツケの誤写であろう。ここには、○の宿駅記号が付されている。

半ば伝説化された言い伝えでは、野付半島の先端部には「キラク」と称された街があり、蔵や番屋など六十軒ばかりの建物が並び賑わっていたと言われている。事実、国後に渡るための「通行屋」という役所があり、墓地の遺跡なども残っており、二百人が埋葬されているほどの規模だそうである。このような集落は伊能測量の頃から存在していたようである。

筆者も詳細な知識を持っているわけではないが、宿駅記号が記されており、集落の黒抹（色は褐色）があることから見ても国後との関係で重要な場所であったのであろう。測線を子細に見ると、野付半島の外側を行く測線から短い測線が僅かにこの集落に向けて分岐しているのに気がつく。「通行屋」に向かう測線であらう。

伊能大図の野付半島と現代の地形図での野付半島と比較すると海老のしっぽの部分で伊能大図の方が巾が太く、背中の部分では、現在の方が巾が太い。その様なことから見ると、野付半島の先端部は江戸



第1図 大図5号 野付半島

第2図 大図22号 厚岸



第3図 第2図の拡大図



時代に比べるとやせてきているわけで、「キラク」の街は現在海中に没していると言いう伝えとは整合する。遺跡の発掘はまだ始まったばかりのようであるが、江戸時代の蝦夷の姿を探る上で重要な場所のひとつなのではなかろうか。

厚岸の国泰寺

釧路から根室に向かう途中に厚岸町がある。厚岸湾に面して、厚岸湖の出口の両側に市街地が広がっている。地形図を見ると厚岸湖の出口には、干潟が広く見られる。伊能大図第二号を見るとアツケシト（厚岸湖）は、その出口付近のみの湖岸線が描かれているが、全貌は明らかではなく、湖岸線の測量は行われていない。しかるに、アツケシトの中に緑の山景と焦げ茶の海蝕崖を描いた大きな島が描かれ

ている。現在の地形図を見ると、この位置には、干潟はあるが島はない。厚岸湖の対岸を島と見誤ったのか、いずれにしても謎である。また、伊能測量当時には、厚岸湖の干潟に弁天堂がたてられていたと言われており、現在は地形図にも見えているが、伊能大図にはその記載がない。

測量日記によると厚岸から厚岸湾対岸のセンハウスまで行きも帰りも海上三里を船で行ったと記されており、伊能忠敬自身は厚岸湾の海岸線の測量は行っていない。とすると、厚岸湾の海岸線の測線は間宮林蔵の測量データによるものである。厚岸湖の出口の測線は途切れている。現在は橋で繋がっている。

厚岸湖の出口の両岸に黒抹記号（色は黄土色）が見られ、比較的大きな集落が広がっていたことが分かる。その中に、国泰寺と書かれているのに気がつく。国泰寺は、文化元年（1804）に箱館奉行の願い出に基づき幕府が建立した蝦夷三官寺のひとつである。伊能測量は、寛政十二年（1800）に厚岸を通過しており、その時には未だ国泰寺



第4図 国土地理院2万5千分1地形図

厚岸付近

は建立されていなかったたので、国泰寺が記されていることは、間宮林蔵のデータに基づいて厚岸付近の図は作成されたと考えて間違いなからう。

室蘭

第5図は伊能大図二九号の図の西端の一部である。これを見ていただくと、現在の室蘭の市街の中心部とは異なった場所にモロランと書かれている。現在の地形図を見るとポロシレト台場勤番所跡と注記があるが、これは、幕末に蝦夷防備のために南部藩が幕府から命ぜられてモロランに築いた砲台の跡である、このあたりが伊能大図のモロランに当たるのであろう。現在は、室蘭本線「元室蘭トンネル」の名称に往時を偲ぶことができる。南部藩の陣屋跡は史跡として残っており、陣屋町の地名が現存する。

南部藩の陣屋は幕末のことであるが、測量日記にはモロラン会所に宿泊したことが記載されており、図を見ても集落の記号が描かれている。ホロモイ、ホンワヌーシの地名があり、それぞれ現在の幌萌、本輪西に当たる。海岸線は、屈曲し、測線は、海蝕崖を避けて山越えしている部分もある。現在は海岸の埋め立てが進んでいるが、山の縁を辿れば測線との対応を付けることができる。

伊能測量隊は、寛政十二年（1800）蝦夷測量の際、往路ではモロラン、帰路にはエトモに宿泊している。エトモには、2泊しており現在の室蘭市街地周辺を測量したのであろう。大図には、エントモと記されているが、これは、誤写の可能性がある。測量日記ではエトモと記されている。測線は、室蘭の市街地が位置する半島の内側の海岸線を測量し、いくつかの枝分かれ測線が出ているが、その外側は未測量となっており、僅かに半島を横断する測線が見られるのみである。



第6図 国土地理院2万5千分1地形図室蘭付近



第5図 大図29号 室蘭

った。

礼文華峠と有珠

礼文華峠は、伊能忠敬の蝦夷測量において最も難所であった。長万部からレブンゲ、アブタと逗留し測量、天測を行っている。礼文華峠

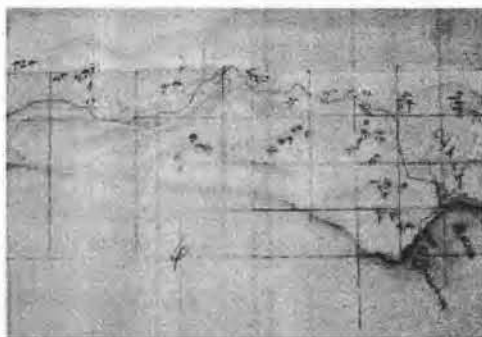
この半島の外側即ち南側の海岸はぼかして描かれているが、エトモ、セタワキ、ヲイナウシと言った地名があり、集落記号が表示されている。半島を横断する測線には、その脇に小さな池が描かれているが、現在は跡形もない。エトモの先には、現在「大黒島」と呼ぶ海蝕崖に囲まれたモシリカ島があるが、この小さな島も周囲を測量されている。伊能測量隊の一行は、帰路にはエトモから対岸のモロランまで船で渡

第7図 国土地理院2万5千分1

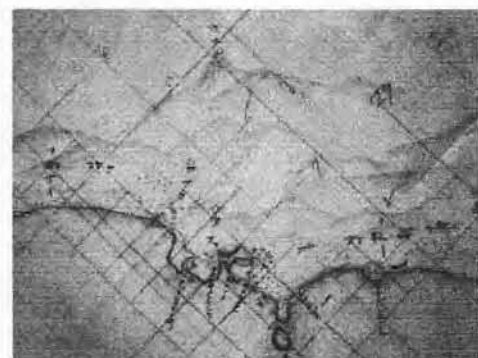


地形図 礼文華周辺

第8図 大図30号 礼文華周辺



第9図 大図30号 ウス周辺



第10図 国土地理院2万5千分1



地形図 有珠周辺

付近では、日本海と太平洋即ち噴火湾の分水嶺が著しく噴火湾側によっている。そのため、噴火湾に面している海岸は、極めて急峻な海蝕崖となっている。海蝕崖の直上部が分水界となっているのである。

伊能測量隊は、噴火湾の海岸線を行くことはできず、礼文華峠へ迂回してレブングに到着している。途中には、ライハと書かれた地名があり、河川の流路が細かく書かれている。この河川は、現在の来馬（らいば）川で黒松内を通り、日本海側の寿都湾に注ぐ川である。ライハは来馬に通ずると考えられるが、地形図にも来馬川以外に来馬という地名は見いだせない。

礼文華峠は寛政十一年（1799）に、様似山道、猿留山道（現在の黄金道路）とともに幕府によって開削された道だそうである。伊能測

量隊は、開削されたばかりの道を測量したことになる。地形図には礼文華峠を越える小径が表示されているが、伊能測量隊の通った道であるかも知れない。

レブングからアブタの間も難所があり、海岸線を迂回している。伊能測量隊は、往復ともにレブングとアブタに宿泊している。ウスには、蝦夷三官寺のひとつ善光寺が文化元年（1804）に建立されたが、伊能測量はその四年前であり、当然大図には記載されていない。

アブタとウス及びウスの対岸には、集落の記号が表示されており、アブタ、ウス周辺の有珠山麓の入り組んだ海岸線に沿って集落が分布し、蝦夷地においては比較的人口稠密な地域であったのであろう。アブタ、ウスともに宿駅記号が付けられていて、測量日記によればアブ

タ会所に宿泊したとされており、幕府の役所も存在していた。ウス対岸の集落背後に松の木様の樹木が描かれているのが印象的である。入り組んだ海岸線の岬や海岸の地名が詳しい。また、ウス山（有珠山）の表記があるが、火山の山容を捉え、山肌が茶色く塗られており、ア

ブタあたりから遠望してその特徴が目立ったのであろう。



第11図 大図177号 正月不知

「正月不知」は「しようがつしらず」でした！ 「47号21頁」参照

この原稿を書いている最中に嬉しいニュースがあった。「伊能大図総覧」編纂の過程で読み方が不明であった「正月不知」という地名（山口県下関市に存在）について「しようがつしらず」であると本会会員辻本元博氏から福田事務局長を通じて教えていただいた。辻本氏は、下関市立長府博物館に問い合わせられたそうで、その結果「吉見史誌」という地元で出された本の中に記載があるとのことであった。

私も早速下関市立長府博物館に問い合わせ、「吉見史誌」の当該ページのコピーを送っていただいた。ここにその記述をそのまま引用する。

「對馬暖流の影響を受け、この御崎一帯は特に温暖である。

とりわけ北風をふさいだ南面の斜面には、霜がおりずマーガレットの栽培に好適な土地柄となっている。冬水仙が早く咲き下関へ売りに出たら高い値でよく売れるので毎日毎日心算で売りに行ったところ、遂に正月に入っていたとの笑い話があつて、「正月不知（しらず）」の異名がある。この御崎に入つた伊能忠敬の測量日記の文化三年（一八〇六）五月十六日の条に：：正吉村より鴨島遠測、吉母村黒島一周、室津村の内正月不知迄 測量場所甚難所二付二番ノ初迄不行届引取云々とある（当時御崎は室津村であつた）のでかなり古くから正月不知の名があつたことがわかる」

（昭和60年下関市立吉見公民館発行「吉見史誌」717頁）

このように、暖かく、花売りで正月が気がついたときにはやってきたと言う誠に豊かでのんびりした風情の土地であることが分かり、大変嬉しく思った次第である。一度訪ねてみたいところである。

*掲載した伊能大図は第11図を除き、すべてアメリカ議会図書館所蔵である。
第11図は山口県文書館所蔵

（ほしの よしひさ・地図協会理事長、代表理事）

未完の天文暦学者 伊能忠誨

佐久間 達夫

伊能忠敬の孫・忠誨（二八〇六～一八二七）は、祖父忠敬の跡を継いで天文暦学の道に進もうと、江戸へ出て高橋景保について天文暦学の稽古や星図の作成などに励んだ。

しかし、文政五年八月に養育者であった伯母・妙薫（忠敬の長女・稲の出家名）の死去によって、やむなく江戸と郷里佐原との二重生活となった。そこで忠誨は、佐原宅の中庭に天文台を設置して、親族や奉公人の協力を得て月食などの観測をし、その資料を江戸の暦局に届けていたが、二十二歳という短い命でこの世を去ってしまった。

忠誨の江戸での生活の様子は、祖父忠敬記述の「忠敬先生日記」や忠誨自筆の「伊能忠誨日記」などに記されている。

一、忠敬、江戸府内の測量に忠誨を同道

忠敬は、孫忠誨を自分の後継者にしようと、文化十三年の第二回江戸府内測量に忠誨を同道させている。このとき、忠敬は七十二歳、忠誨は十一歳であった。（「文化十一年に幕府に提出した心願書」）

資料一 忠敬先生日記 五一

伊能忠敬記念館所蔵

文化一三年一〇月一日 曇 我等量地出勤。三治郎（忠誨）を連れる。

一〇月一三日 晴、我等量地出勤。三治郎召連れる。

一〇月一四日 晴曇、我等量地出勤。三治郎を連れ行く。

二、天文暦学書の稽古や星図作成に励む

忠誨は、文政元年五月上旬から佐藤坦（号一斎）や高橋景保につい

て、『暦象考成下編』（日躔、月離、日月食、推歩など）『儀象考成』『曆法新書統書』などを書き写し、その内容の習得に励むとともに、象限儀や圭表儀を使つての星の観察や節気の算出など天文暦学の知識・技能を身に付けていった。また、伯母死去後は、佐原宅で月食の観測や星図の作成などに励んだ。

資料二 伊能忠誨日記（主な内容記述）

伊能忠敬記念館所蔵

文政三年一月一九日 高橋侯入来たる。此間、佐原の手紙に小作米を出さぬ由、申越した故、伯母心痛し思う様は、予に祖父の跡を相続させんと。此意を先生に如何と申上げる。

一月二三日 予、佐藤（一斎）と浅草の足立左内へ行く。重太郎（足立）、予、星図の事は、先ず古の実測を調べ、後に実測に漏れし星は、ランデ推歩を用ゆと言う。故に此より高橋侯の御役所へなるたけ日々に来たれと云う。

二月 九日 文政元年戊寅年五月上旬より、予、暦学稽古し、今日迄に下編（暦象考成）の日躔に月離、月日食、土木火金水星、及び後編の日躔、月離、月日食、推歩を終わる。

文政四年一月二〇日 今夜より、予恒星を測量す。

七月二三日 儀象考成二十枚写す。

七月二四日 儀象考成、朝より昼頃迄に二十枚写す。また、二三枚写し、箱田に頼みし紙数五枚半、先に出来る。

九月一七日 幕府、伊能忠敬の功を追賞して、忠誨に五人扶持と江戸箔屋町に八五坪の町屋敷を与え、永々帯刀を許可する。

文政五年一月二日 忠誨、高橋作左衛門景保の手付手伝いを当分御免、帰村することになる。

一月 七日 江戸亀島町宅を出立し、同月九日佐原宅に着。

二月一五日 佐原宅で、親族や奉公人と月食測量。

望遠鏡 大川治兵衛 茂兵衛

垂揺球儀 又藏 忠吉

象限儀 伊能七左衛門 伊能平右衛門

觀星鏡線付 久保木源藏

地平圭儀 永沢治郎右衛門 久兵衛

文政六年六月一日 佐原宅で月食測量。

六月三日 月食の細測を御用状につけて駿河屋に渡す。

一〇月五日 江戸御用所へ出勤。南北両円図と方図の元図書き入れ

終わる。

二月一六日 佐原宅で月食測量。

二月一八日 加納屋治兵衛、彗星測稿を江戸へ持参。

文政七年二月一日 伊能七左衛門来たる。庭（伊能忠誨宅）測量。

二月二日 七左衛門来たる。庭測量。

二月三日 裏畑測量。

二月六日 居屋敷、庭地図成る。

二月八日 予、七左衛門へ行き、居屋敷測量。

六月一日 佐原宅で食測。

六月三日 食測書状を忠七に持参させ、江戸へ登らせる。

文政八年二月八日 星図、星形座線（星座線）出来る（江戸）

二月二二日 座線、宿線等皆出来る。但し、書き入ればかり残った

ので足立重太郎（信順）に頼む。

一月七日 佐野屋長作（佐原の伊能忠誨宅の隣家）来たる。天文

台へ自然に（自然薯？）四株生ず。今夜二株風味祝う。尤、

三本は大株也。

*注釈 文政十年二月一二日 忠誨死去、二十二歳。

三、垣星測要の作成

忠誨は、『儀象考成』に記されていた垣星名を書き写し、それに江戸で観測した恒星を記述して「恒星測要」という冊子をまとめた。「恒星測要」の跋文には、佐原の自宅の北極高度（緯度）は、三十五度五十三分十九秒と記している。これは、忠誨宅に程近い佐原文化会館前や佐原東部跨線橋脇で、国土地理院がGPS測量（人工衛星を利用した緯度経度の測定システム）した数値と「分」単位まで一致している。

資料三 儀象考成 忠誨手写 文政五年二月十五日成

・儀象考成 卷一 丑子亥三宮 伊能忠敬記念館所藏

積年八十一年 文政八乙酉年 冬至之数

赤道 星等

中山北増三

經	丑	〇五	〇七	五
緯	北	三〇	三二	二九

・儀象考成 卷二 戊酉申三宮

積年八十一年 文政八乙酉年 冬至之数

壁宿西増十八

經	戌	一一	三	六
緯	北	一七	一四	二一

・儀象考成 卷三 未午巳三宮

文政八乙酉年 冬至之数

参宿東増三十

經	未	二〇	五	六
緯	南	一一	〇七	二三

・儀象考成 卷四 辰卯寅三宮

積年八十一年 文政八乙酉年 冬至之数

謁者西増一

經	辰	一一	五七	六
緯	北	二五	一一	三

※卷毎に一星だけ記述

● 恒星測定の跋文

自乾隆九甲子年冬至^{申年仲冬也}至本邦
 文政八乙酉年冬至積年八十一半依
 儀象考成而求恒星赤道經緯度<sup>恒星四等
 以上不誤之
 度五三十分</sup>
 而其緯度以佐原北極高度<sup>測得五度五三分
 而求地高度<sup>南北高度又記北極近星
 之最高半及勾股^二之最高半后之高
 度以而便測量矣</sup></sup>

伊能忠誨識



○ 「恒星測量」の忠誨の跋文

自乾隆九甲子年冬至、即本邦延享元年冬至也。至本邦文政八乙酉年冬至、積年八十一半依儀象考成而求、恒星赤道經緯度（恒星四等上不殘之五六氣等光大記之）取其緯度、以佐原北極高度（測得三五度五三分十九秒）而求地高度（南北高度五度上記之）又記、北極近星之最高半及勾股一及二之最卑后之高度以而便測量矣

文政七年三月

伊能忠誨識



資料五 佐原の伊能忠誨宅付近の緯度

- ・伊能忠誨佐原自宅（香取市本橋元一九〇〇番地）北緯三五度五三分一九秒。文政七年忠誨象限儀・子午線儀等で測量。
- ・佐原文化会館前（香取市北口二二一番地）北緯三五度五三分三一秒、東經一四〇度二九分五四秒。国土地理院GPS測量。

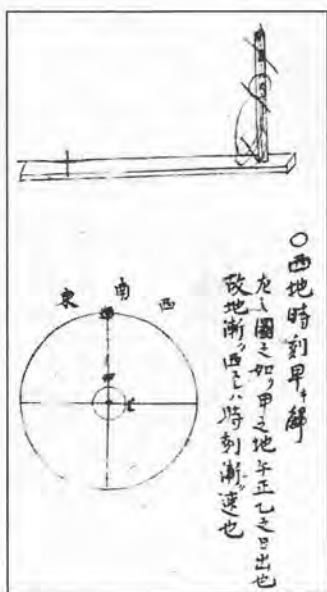
・香取市佐原東部跨線橋脇

（香取市佐原イ四〇四二
 一番地）北緯三五度五
 三分三三秒、東經一四〇
 度三〇分一二秒、国土地
 理院GPS測量、平成一
 七年八月測定。



四、佐原宅の屋敷を実測し、屋敷図作成

忠誨は、佐原宅に居住するようになってから二年後の文政七年二月に、親族の伊能七左衛門（佐原村横川岸）の協力を得て、屋敷と屋敷続きの畑の測量をし、それを図面に認めた。忠誨の作成した屋敷図（平成十八年二月、伊能家より佐原市に寄贈したもので、清書図は別に作成したのである）には、建物の名前が記していなかったため、既存の「伊能家の屋敷図」と対応させて建物を推測した。



伊能忠誨遺書 伊能忠誨記念館蔵
 掌冊（自文政四年十月九日
 至文政四年十二月三十日）より

妙薫が忠敬に勘当赦免後に建てて貰った隠居所（「伊能忠誨書状文
 化九年五月二五日 鹿兒島止宿認」）に、文政四年十月十一日（忠誨が
 幕府より永々帯刀を許され、初めて、佐原村へ帰ってきたとき）の夜、



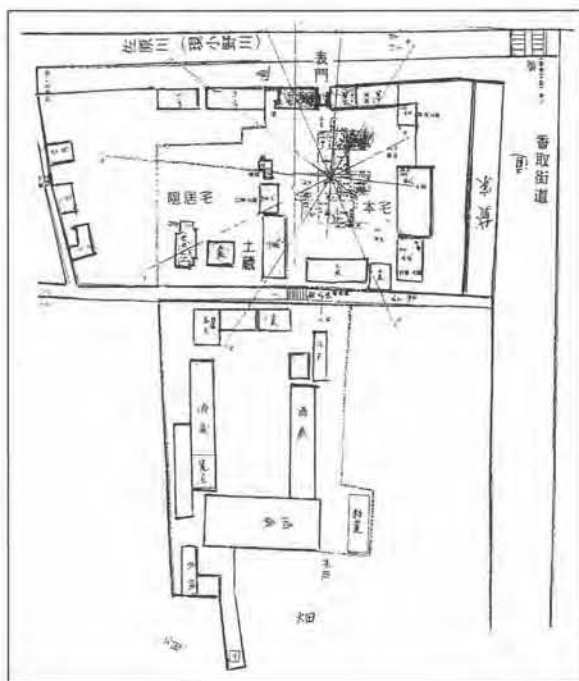
資料6 伊能忠敬家の屋敷図

●伊能忠誨作成図 伊能忠敬記念館蔵

忠敬の長女・妙薫と三女・琴（松田光遠の妻）、それに江戸宅の地主の隠居が止宿する（『伊能忠誨日記』）。しかし隠居所は、忠誨が作成した屋敷図には記されてなく、その北側に正方形の形をした建物の図が記されていた。これが、『伊能忠誨日記』の文政八年十一月七日の条に記述されている「天文台」と推測される。

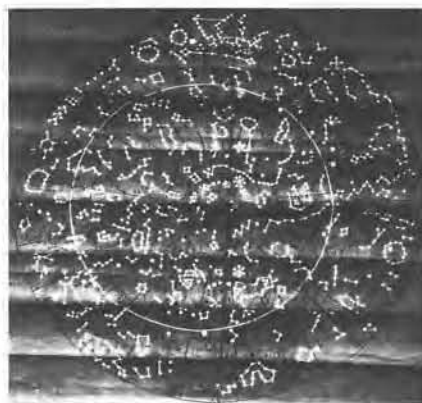
伊能忠誨は、祖父忠敬の功績と伯母妙薫の配慮によって、天文方や領主などの後ろ楯を得て、若年にもかかわらず天文暦学の道に進むことができた。足立重太郎（信順）や箱田左太夫（良助、榎本家を継ぐ）などと協力して天文暦学の稽古に励むことができた。

しかし、道半ばにして天国へ旅立ってしまった。文政七年三月六日に、祖父忠敬の父・貞恒の出生家である小堤村（現千葉県横芝光町小堤）の神保家九代当主信敬の葬儀に参列するため馬に乗り、槍持 喜八、挟箱 万兵衛、草履取 千代松、侍 政吉、それに久兵衛、近所総代など



●作成者不詳図 伊能忠敬作成？

を従い、多古街道を威風堂々と行列をくんで行った十九歳の忠誨の姿を想像し、忠誨が足立信順や箱田良助のように五十の声を聞くまで生きていたならば、さぞかし我が国の天文暦学史上に、その名を残したことであろう。（さくまたつお・伊能忠敬研究家）



星図（伊能三郎右衛門忠敬家親族
伊能楯雄氏所蔵）

バリ島の夜、南の星空を見た

上田 勝俊

★バリ島への旅立ち

前日の雨も止み山陰地方では珍しいほどの晴天に恵まれた2005年5月13日午後1時過ぎ馴染みの特急スーパーはくどで大阪に向かった。インドネシアのバリ島への旅立ち。団体ツアー扱いではあるが、朝食付きで全日程フリータイム。旅行の目的は長年研究している「蔵」(注)について、バリ島の「割れ門」に戸前模様のルーツを求める調査と観光である。

5月14日 自分一人で様々に手続きをして搭乗ゲートの48番に入ったのが午前10時前だった。関西空港を飛び立った機はもう雲海の上を飛行中だが、離陸して間もなく左手下に淡路島が大きく見えて、島の山々は濃い緑のビロードに覆われている様子が伺えた。今回のフライト、実は地元インドネシアのエア・パラダイスだったが何か急遽日本航空に変わり、あこがれのJAL空の旅を満喫している。いつも海外旅行は素晴らしいにつきる。今、水平飛行で高度3千5百フィート、1万5百^{リットル}。搭乗機はボーイング社のB 767・300(中型の航空機だ)座席は45のa、窓側、向かいにはCA(キャビンアテンダント)が二人座る座席でギャレーと称する準備室のすぐ横。ちょうど主翼の中央非常口に位置している。この席を選んだのは万が一、体に不調を来した場合に直ぐアテンダントさんに伝えることが出来るようにと、また、機内で動きやすい位置にあることなど考えた上でのことだったが、最高の座席が確保できたと、感謝々だ。二、三日前から私の体調はすこ

ぶる良好で、早めに寝ると3・4時には目が覚める毎日だけどやはり体力は落ちている。実は今年2月に血糖値が239も出ていたから大変困惑し心配していた。毎食前には薬を飲まなければいけないのだが、昼の機内食ではついつい飲み忘れてしまった。コーヒーを飲み一旦トイレへ、狭いながらもうまく空間を利用して設計がされていることが判る人間工学の賜だ。2杯目のコーヒーを飲み終えんとすでに5時10分前、未だ3時間もかかる長時間の飛行だ。

バリ島のデンバサル空港到着は8時14分の予定とアナウンスがあった。無事到着し、あちこちと島内を見学した内で特に印象深かった南国の星夜空を見上げた楽しい星の観測についてその紀行文を記す。

★南の国の星空に

夕陽が綺麗なことで有名なタナロット寺院を見学して車に戻り南国の田園風景を見ながら、もと来た道を市街地へ向かってひた走る。それからしばらく走った時に、車の中でガイドさんが、

「上田さん、夕食はビーチレストランにご案内しましょう。有名な魚料理のディナーズポットです。帰りはレストランの送迎でホテルまで送ってくれますから」と聞いたのは億えているのだが、それからふと日中の疲れでついウトウト。「上田さん着きましたよ……」

着いたところはジンバラン地域の海岸にある「イカンバカーノレ」と言う波打ち際にあるシーフードレストラン。まるで日本の海岸にある掘っ建て小屋に似た休憩所のような場所であった。車が店に着くなりサンプルカウンターで「自分の食べたい魚を選んで下さい」とのこと。見ると鯛に似た魚にロブスターと車エビに似たハサミの長い海老があったのでこれを料理してもらう事にした。

一番水際に近いテーブルが空いていてそこに案内され着席。帰国後

ガイド本を開けてみると波打ち際のテーブルは最高の席だと書かれてあった。寄せては返す波と180度見渡せるビーチで大きく息を吸い込んだ。向かって右側には空港の末端になり小さく見える旅客機が行き来している。左側には遠くに岬が望まれる素晴らしい海岸の景色だ。

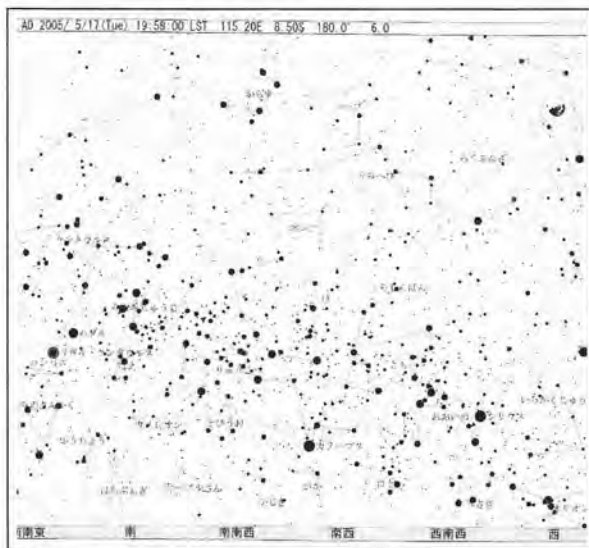
料理が来る頃には陽も落ちて全くの闇夜。外国で陽が落ちると全くの暗闇である。その点日本の夜は異常に灯りが多いと感ずる。カナダに旅行したときもそう感じた。外国では場所によって必要最小限の灯りしかつけられていないことが多いのである。

左手遠くに花火が打ち上げられていた。バリ島では比較的有名な高級ホテルだと聞いたが名前は判らなかつた。目の前には大空を覆い尽くすごとく、光を増す星々が有るのみで、視線の反対側には店の灯りが少し見えるだけだった。

お腹も減るに減っていたから料理に食いつく。しこたま海老を堪能してふと夜空を見上げると、そこには見知らぬ真つ暗な天空に星々がキラキラと光を輝かせている。荘厳な星々の姿は日本の国内には見られない近さで目に入り、まるで星の大軍に対峙する様な錯覚に陥った感じがした。私はとっさにこれを撮影したいと思ったが、残念なことにカメラを車に置いてきてしまい、撮影する時間も残されていないように思ったから、メモ用紙をお願いして比較的によく輝いて光っている星を書き写してみた。全く知らない星だから、つまりいいかげんにしか書けないのであるが、近くに居たボーイさんが不思議そうに私の作業を見に来て「何を書いているの?」と問いかけてくるから「スター、スター」と天空を指さす。持ってきた小型の懐中電灯を照らしながら書き込んでいくのだ。そうそう南十字星は何処に有るのかな、などと思ひながら判らずじまいのポインティングである。

しかしこれが大変良かった。帰国の後アストロパークのコンピュ

ターでこの時バリ島で見た夜空のシュミレーションをやっていたいたのである。



↑南十字星 ↑カノーブス 月↑
05-5-17 19:58 115.20E 8.50S
佐治村アストロパーク 天体シュミレーションから



南国の夜空に星々が輝く
バリ島ジンバランにて

★天体シュミレーションから

帰国して後、5月31日に鳥取市に移管された佐治村アストロパークへ赴きパソコンのソフトでバリ島を観測地点とした5月17日の天体シュミレーションをしてもらい結果を見ることとなった。

「ようこそいらっしゃいました、お久しぶりですね」とずんぐりした体格の相本実さんが私を迎えてくれた。

伊能ウオークの時、自分なりの『天文展』を鳥取市内の中国電力ふれあいホールで開催した時、駆けつけてくれて展示も手伝って下さったのが縁で、その時からおつき合っているアストロパークの学芸員さんである。案内されてコンピュータ室にはいり、早速私のメモを見ながら操作を始めて「あれ、全く逆さまに表示が出てくる……」。私には事情が判らない。たぶん南半球だからであろうと思った。

「多分この辺りの星を見られたのでは」

と聞かれたからそれらしき方向の星座図をモニターに見る。

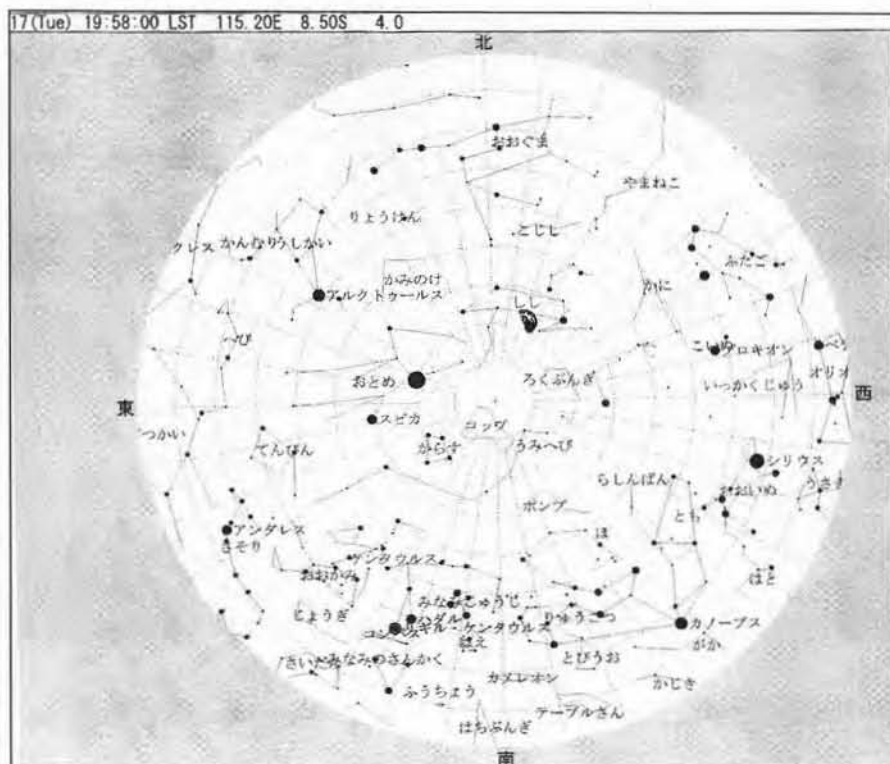
「あー、南十字星は……」と聞くと

「もつとこちらですよ。多分視界には入っていないんじゃないかあ……。それから南十字星と言っても一つの星では無く、十字を形を作る星座なんですよ」

とのこと私は少し残念とは思ったのだが

「よく輝いて見えていたのは木星で、もう一つの星はカノーブスです。月は見えましたか」

と聞かれたのでメモの右上端にmoonと表示したのを見せたら、「そうですね、天空約70度ぐらいには見えたはずですよ。この日の月は」とのこと。やはり書いておいたのがよかった。実際に半かけの月が私の頭上に静かな輝きを見せていたのだから。それからタナロト寺院の割れ門を撮影していたとき、月を見つけて割れ門の先端に見える月を



撮影したから間違いなかったことを判断できた。

「旅行される前に連絡頂ければ、と他の知人にも良く云うのですが、やはりなかなか旅行の準備が忙しいようで気づいて頂けなくて……。でも、こんな風に記録を採って頂いたら本当に参考になるし、その意味でも貴重な記録ですから大切にして下さい」と教えてくれた。

「これ、これが南十字星ですよ。ではプリントアウトしましょう」と言って印刷してくれた。

私はとても有り難く嬉しい思いであった。南十字星を思うとき「ピルマの竖琴」や大戦中に印刷された幾つかの書籍に歩哨兵の頭に輝く星をあしらった挿し絵などを彷彿する。

せっかく高額の旅費を払って行く海外旅行で、事前に南半球の星座について調べておけばもっとと有意義だったとは思ったが、アストロバーク天文台の相本さんに教えて戴いた星座のプリントは今でも大切な私の宝物となっている。この記事をご覧の皆様にもぜひ南半球の国々に旅行なさるとき少し時間をとって星座表をご覧になられますようお願いいたします。

★「伊能忠敬の見た星」展と

「平安の快僧浄蔵」

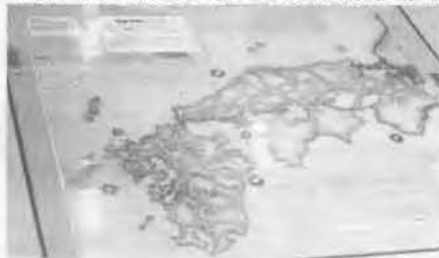
昨年佐治アストロパークでは9月9日～今年1月8日まで伊能忠敬公を特集した特別展示会が開催され私も伊能公と天文関連資料の提供で参加させていただいた。

特別展示

地球の大きさを測ろう

～伊能忠敬の見た星～

展示期間 2006年9月9日(土)～2007年1月8日(月・祝)



一階のロビー展示と会場風景 鳥取市さしアストロパーク提供

自分が仕事のテリトリーにしている智頭町の小学校などを訪れて展示会が開催されることを先生方にも宣伝したおかげだったか、意外に入場者もそこそこあったようで盛況だったことを相本さんから聞き及んでいる。

また今年に入り古書店から伊能忠敬公の肖像画(重文と同じ絵師が描いた)の掛け軸一幅を手に入れました。未だ写真が出来ていませんので次回にでも報告します。

注 一般に仕事の本務というのが有りますけど、私の研究で本務は「餓絵」です。左官職によって製作される漆喰彫刻のことですが、これを私は「蔵飾り」と呼称しております。蔵飾りは民家の土蔵(倉)の壁

ちょっと良い話:9月21日に漫画「平安の快僧浄蔵」を新生出版から全国出版しました。インターネットYAHOOトップ画面の検索で漢字にて「浄蔵」と入力していただければ浄蔵法師についてのコンテンツが表示されます。私が出版しました「平安の快僧浄蔵」についての関係項目をご覧いただければ簡単な説明がされていますのでぜひ一度ご覧ください。4月上旬現在1位と2位にランクされています。

[編集部:写真は上田勝俊さん。日本海新聞ニュースから]

先祖の活躍漫画に「平安の快僧 浄蔵」出版

傾いた京都・八坂の塔を風を吹かせて元に戻したワ一条の橋の上で、死んだ父を祈りでよみがえらせた一など、さまざまな逸話を持つ平安時代の僧を題材にした漫画本「平安の快僧 浄蔵」が、新生出版(東京)から出版された。企画監修したのは浄蔵の子孫で、鳥取市内の運送業、上田勝俊さん(61)。漫画は市内在住の漫画家、岩田廉太郎さんが描いた。千百年以上も昔に、厳しい修行で会得した“法力”の不思議さを、どの世代にも分かりやすく伝えている。

上田さんは一九八六年に大阪からUターン。その直後から仕事の合間を縫って、県立図書館に通い、先祖のルーツを探し始めた。苦労して系譜研究を続けるうちに、島根県の赤穴氏一南北朝時代に活躍した佐波氏一三善浄蔵貴所(みよしじょうぞうきしよ)へとたどり着いた。



面、主に妻壁と正面平入りの出入り口部分に装飾されている塗り籠扉や雁木部分に制作し装飾されておりその蔵飾りの調査研究を一番のテーマとしているわけです。バリ島へはこの土蔵の扉についてそのルーツを調査に参りました。「割れ門」チャンディールタンという建造物にその証を見に行つて、旅行中に見知らぬ南の国の星空に遭遇したのがこの紀行文です。

(うえだ かつとし・鏝絵研究家、五彩庵文庫主宰、鳥取市)

初の女性学長が誕生した

ハーバード大学から今年も会報の注文!

3月9日ハーバード大学図書館から継続注文が入りました。アメリカで最も古く最も豊かで最も自由な大学だそうです。

今年のポストンは松坂君の大リーグ挑戦で賑やかです。ポストンはアメリカ北東部マサチューセッツの州都。チャールズ川を隔てて隣接するケンブリッジにハーバードがあります。教育重視は信仰と知的教養を重んじたピューリタン以来の伝統。アメリカだけではなく世界でも最大規模のハーバード大学図書館は1638年の開設。

2月に初の女性学長ファウストンさんを選出。同大371年の歴史で女性 は初めて。南北朝争、南部史研究の歴史学者で、教職員合わせて2万5千人、年間予算30億ドルを差配するという。「私の選任が、ほんの一世代前には想像もつかなかった機会。門戸を開く象徴になれば」と。

会報が何処に送られ、どこで閲覧されるのか。興味が広がります。さらに、どなたがこの会報を読まれるのか。日本の美術品を多数所蔵する美術館がポストンに。『幻の伊能図』を発見。ハーバード大学では四月一日の話題ですが、でも、もしかして!夢は豊かに自由に(F)

「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(五)

宮内 敏

八 「田沼意次の干拓事業と宮内清右衛門」に平山季忠の関与

前述の平賀源内と伊能忠敬の接点を調べていく中で、筆者家にあった印旛沼・手賀沼・長沼干拓に関する文書及び過去帳と香取郡中村の平山家過去帳(佐久間達夫氏情報)から、宮内清右衛門が田沼意次の印旛沼干拓事業に関する情報を平山季忠から得ていたのではないかと連想させる事実を発見した。

平賀源内は田沼意次と関係深い医師千賀道隆を介して田沼意次と係わりを持ったと考えられるが、平山季忠(伊能忠敬の仮親)も医師や林鳳谷を介して田沼意次と接点があったと思われる。

筆者家過去帳によれば九世宮内清右衛門正安の再継妻は「名サキ、香取郡中村平山伊左衛門の女、トモ・エキの二女其所生なり。文化五年(一八〇八)辰六月十五日終年八十五、葬口郡荒野村妙福寺之地僧徒号妙行日達」とある。平山家過去帳には平山五軒党の一つ平山伊左衛門家の「求傭の二女 宮内清右衛門の室」とある。このことから再継妻のサキは中村の平山家から嫁したことが確認できた。没年と年齢から、生まれは一七二四年ごろと推測でき、正安の継妻ギンの没年は延享三年(一七四六)二月十四日とあるので、再継妻サキが宮内家に嫁したのは一七四六〜一七四七年と推測できる。(サキの子のエキの没年は文化五年(一八〇八)四月三日年六十才より逆算)

十世宮内清右衛門正壽(ギンの第一子)は一八五八年ごろ(第一子ウタの没年文化二年(一八〇五)六月十二日四十七歳より類推)匠瑳郡

長谷村宇野清右衛門の女ミツと結婚、三男二女を産むが明和七年(一七七〇)六月八日二十九歳で没している。

十世正壽の継妻ヤエは遠江国相良人田沼候医員坂輪玄瑞の次女とあり、文政五年(一八二二)九月十七日六十三歳で没している。継妻ヤエの第一子は天保五年(一八三四)四月五十六歳で没している。これらのことから、計算上、継妻ヤエは先妻ミツの没年である一七二二年以降一七七八年までに嫁したことになるが、平山季忠は安永四年(一七七五)二月二十七日に六十五歳で没しているので(蓮体院日蓮)、この縁組に平山季忠の関与があったと仮定すれば、一七七二年から一七七五までの間に宮内清右衛門正壽に嫁したと推定できる。

田沼意次が老中となったのは一七七二年(忠敬二十八歳)であり、一七七九年には老中首座の松平武元が現職のまま亡くなり、実権を握っていく時期に、十世宮内清右衛門正壽は田沼意次の御殿医坂輪玄瑞(自刃)の娘を娶ったことになる。

この縁組成立に平山季忠が関与していると推測できる理由は、第一に前述のように平山季忠は田沼意次や医者仲間と何らかの接点を持っていたと推測できること。第二に正壽の義母は平山五軒党の伊左衛門から嫁したサキ(妙行日達)であり、平山季忠を介して、田沼の干拓事業に関する情報を得ていたことが推測でき、干拓事業に興味を持った宮内清右衛門正壽が平山季忠に相談したとしても不思議ではない。

状況証拠から、この縁組成立に平山季忠の関与があったと見るのが自然であろう。そのように推測する時、平山季忠の江戸におけるネットワークの大きさ、その影響力に驚くのである。

筆者の妄想 田沼が老中となった頃、忠敬の年齢二十八歳、伊能家に婿入りして十年である。仮に忠敬の年齢を正壽と同じ、三十五歳とし

たらどうだろう。平山季忠（忠敬の仮親）の情報を得て、忠敬自身、干拓事業に参加していたかもしれない。そうだとすれば、忠敬の全国測量もなかったことになる。（正壽と忠敬の年齢差七歳）

医師の果たしたパイプ役としての役割

伊能忠敬はこの十五年後、仙台藩江戸詰医師桑原隆朝の娘を後妻とし、その四年後に隠居し江戸に出て、高橋至時の弟子になっている。

その後も桑原隆朝は伊能測量に当たって堀田撰津守正敦との間をとりもち、伊能忠敬をサポートしている。（注）

平賀源内・清右衛門正壽・伊能忠敬いずれの場合も、大望を実現させるために医師を紹介した。

この時代、医師の果たしたパイプ役としての役割は大きかったのではないだろうか。

注 若年寄堀田撰津守正敦は、伊達家六代藩主・伊達宗村の子で堀田家の養子となった。それゆえ仙台藩医桑原隆朝とは幼少の頃に面識があったと思われる。これらの関係から桑原が伊能測量の総元締めであった若年寄堀田撰津守と伊能忠敬・高橋至時の間をとりもち全国測量をサポートしたと考えられている。

干拓事業のその後

田沼・水野の失脚により工事は完成に至らずに中断された。その後、大正十四年になって利根川からの逆流を防ぐ安食水門が完成し水害の脅威が大幅に軽減された。その後も工事は計画実施されるが水害により工事は進展しなかった。戦後の昭和二十年になって食糧増産政策の下、印旛沼・手賀沼の緊急干拓の実施が決定され翌年着工された。そ

の後、多目的事業として、（水道用水・工業用水）干拓がおこなわれるようになった。事業は約千ヘクタールの干拓と、用排水施設の整備を実施し、昭和四十四年になって完了した。

清右衛門の干拓事業の痕跡

濱宅宮内家（筆者家）の文書によれば、「：十世清右衛門定賢（正壽）又祖業ヲ紹述シ村民ノ景仰措リ能ハザルモノアリ而シテ君ハ夙ニ大志アリテ力ヲ公益ニ致ス長沼手賀印旛、三沼ノ開拓ヲ志シ君ノ後室八重子自刃ノ父侍医坂輪玄瑞ヲ介シ老中田沼公ニ請ツテ先ツ長沼開墾ニ着手シ巨費ヲ投ズルモ事業容易ナラザルニ執政失脚ノ政変ニヨリ宿志遂ニ果サズシテ止ミタリ後、家ヲ嫡子定膺ニ譲リ別家シテ名ヲ清左衛門ト改メ濱宅ト称ス：」とある。

「巨資を投じたなら何か痕跡ぐらいいは残っているはず」と考えた私は、宮内と名のつく地名・バス停等インターネット検索を試み、昔の印旛沼等の周辺と思しきところを丹念に地図で調べた。その結果、印旛沼などの周辺に数箇所を発見した。

現地調査の結果、佐倉市に宮内町、バス停、内田飯塚宮内入会がある。千葉市上泉に宮内山（佐倉市の宮内町とは地続きで沼を見下ろしたであろう高台）。成田市、現北印旛沼の東、成田ニュータウン近くの麻賀多神社付近にも「宮内」がある。八千代市には宮内橋、橋を見下ろす高台に宮内バス停、宮内公会堂がある。富里市にも宮内、宮内入口がある。

干拓工事はずっと後になって完成に至っている。しかし、田沼時代に作られた所も後に生かされ使用された部分も多くあると聞く。当時の開拓の関係者の名が残っていたとしても不思議ではない。

現在、地名をもとに実地見聞した程度である。すべての部分について断定できる状況ではないが、関係があるのか無いのか今後調査してみたい。

伊能測量のバックボーンとしての「利根水運」(一)

利根の水運は江戸幕府成立以前から活発であった。それを示す一五〇〇年代の資料から考察してみたい。

その時代、下総の地は千葉氏が支配していた。高田村清右衛門は当時海上城主(千葉氏一族)であった胤富と縁戚関係にあった。その胤富は弘治三年(一五五七)甥である二十一代千葉介胤胤が暗殺されると、千葉宗家の家督を継ぎ二十二代千葉介胤富となった。

その後、永禄二年(一五五九)十二月十六日、高田村宮内清右衛門尉は千葉介胤富から「分国之中町役」(注①)を許され、翌年十二月十日には、海上胤秀(注②)から「房州上総下総三カ国村於味方中商売不可有相違」(注②)の特権を与えられている。

廻船は房総三カ国の太平洋沿岸を渡っていたものと思われ、そのことを示すものとして、樺海沿岸の鋤木城などから、中国青磁や陶器、中国銭などが発掘されているという(ネット情報より)。当時、既に下総・上総・安房を経済圏とした大きな水運があった。当然ながら当時の水運は「下総上総安房三国お構い……」に見られるように、江戸は意識されていない。

徳川家康が天正十八年(一五九〇)江戸入りすると、急速な人口増加(注③)が始まった。江戸の台所を賄う米や建築資材である木材木の需要増を東北地方に依存するようになり、利根の水運は江戸を目標した形で拡大していくことになった。

注①



諸役免許状の写

(筆者家所蔵)

千葉胤富判物

花押

連々神妙致馳廻候付而、

分国之中町役之事、

并殿役・村役の儀、所被

成御免許也

永禄二年 巳・未

(一五五九年)

十二月十六日

宮内清右衛門尉殿

注②

筆者家資料では海上胤秀としてきたが、滝川恒安昭氏はこの時期の力関係から海上氏ではなく正木時茂ではないかとしている。

正木時茂力判物の写

(筆者家所蔵)

房州・上総・下総三カ国

味方中、商売不可有

相違、若有横合者可成一

行者也 仍如件

永禄三年極月十日 花押

(一五六〇年)

宮内清右衛門どの



注③ 家康が江戸入りした天正十八年（一五九〇）当時は「そこもかしこも汐入の茅原」で「茅葺屋百軒ばかり」と伝えられているが、十九年後の慶長十四年（一六〇九）には人口十五万人になり、一七二一年には百万人を超える世界一の大都市になっていた。 つづく

（みやうち さとし・伊能家縁戚、濱宅宮内家17代当主）



濱宅宮内家所蔵資料から（その二）

宮内 敏さん提供

宮内清右衛門第十一世正諱の墓石拓本



一列に1世から12世までの墓石が並ぶ。

筆者家は手前12世から分家した。

宮内清右衛門第11世正諱の墓石が一番

大きな墓石である。

左記はこの墓石の拓本である。

墓石 銚子市高田町 延命山地蔵院

宮本鉉撰、宮本球書、窪木清淵（久保木）
填諱、哀子胤繁建とある。

十一世正諱は宮本鉉（篁村）、球（茶村）兄弟の伯父（父高重の兄）にあたり、父方の実家にあたる。宮内氏由来が書かれているが、晩年（三七年後）、茶村は「宮内氏起源考」を書いていいる。窪木清淵とあるが久保木清淵のこと。清淵の弟子であった榮（伊能忠敬の内縁・地図作成の協力者とされる）も「はじめ窪木清淵に……」と書いている。

茶村と清淵は年齢差があるものの、共に潮来延方郷校に招聘され、教育に尽力している。久保木清淵は伊能忠敬の漢学の師であるとともに親友であり、伊能図作成では協力者であった。

清右衛門十二世胤繁（哀子胤繁建）の配は茶村の姉である。伊能茂左衛門家節軒（当時佐原町の最有力者）も茶村に学んでいる。

正諱居士宮内君墓碣銘并序

嗚呼我伯父宮内君之沒也距今十七年矣嗣子胤繁與鉉兄弟皆未及冠其病革顧言於胤縣曰二侄鉉孫好學異常他日必有文行我死俟其成立而令銘焉則吾神魂將安於地下也胤縣奉命告鉉鉉泣而志之常懼進循無怠播履有缺以辱君之遺教勉未嘗廢問學也及長乃以爲知君者莫如家君家君居常所談是可以概其平生矣因欲起草則昔日提携撫愛之狀恍在心目感悼涕泣不能備辭而廢者數合茲登未鉉適以講經進官于上毛廐橋廐蟄以書促之且責以惰窳不果鉉於是乎踈然而起遂勒敘次所聞家君系以銘使弟璠書丹固陋之辭雖不足以盡君之爲人庶乎亦不負遺命矣君諱定實性宮内氏其先世位下總千葉氏達世之多艱家牒大隊不詳氏族所由十一世祖右京忠孝行天文間爲千葉介親胤部將屬茲後守海上持矛行千普別族東氏之子嗣宮内氏士秀行淡親道印道卿生刑部少輔某歸性黨性黨生孝允衛門某歸正達正達連千某氏亡與臣屬數十人遁海上郡高田村有奉孤再舉之志會病沒于清右衛門正徵知時不可爲乃離辟草萊以農爲務隱以終焉子孫遂仍稱稱清右衛門世爲郡豪正徵生正喜正喜生正智正智生高親諱定次號正真曾祖諱定俊瑞正意祖諱室好號正安考諱定實號正壽娶匣磯郡長谷村宇野氏生君君旅力絕倫善挽強弓數百步外而必命中資性曠簡以酒自豪然孝文親至未嘗失内外之禮晚年耽書雖寸香不虛度嘗有所感歎曰大丈夫苟得祿位則德可以庇生民然是有命存焉吾家累世好施祖先之意蓋在令鄰曲免溝壑之厄以之肉食鄙夫剝民膏脂以奉耳目之欲者相去豈啻星淵哉我何義當世青紫之滿是以救人患難猶如流俗趨勢利苟近大得倚賴文化十四年丁卯十月廿九日病終享年四十五從葬於村中地藏院堂内僧從退號曰正諱居士配上總室形村海保氏有男女子二人男即胤繁已長純行不墜家聲七通上總惟崎村布留町寬達君之母弟平右衛門君出嗣常陸潮來宮本氏是爲鉉兄弟之父總曰

正祖武而教子孫德以及人詔皇宴命何不退天可問傳諸後昆石斯刊

文政六年龍集癸未冬十月 臣宮本鉉撰 臣宮本球書 窪木清淵填諱 哀子胤繁建

間宮林蔵の病状・死因

杉浦 守邦

1

筆者は自己のライフワークの一環として伊能忠敬の病状、死因に関する考察を本研究誌第35号に「忠敬の持病と妙薫の卵」と題して投稿したが、その後関連ある人物として、嗣子の景敬と測量隊の副隊長とも言うべき坂部貞兵衛両名の死因を同じく研究誌第47号に「文化十年忠敬が遭遇した二つの別れ」と題する小文で紹介したところである。もう一人逸してはならない人物に間宮林蔵がいる。彼の病状と死因について、今回報告させてもらうことにした。

間宮林蔵の生涯と其の功業については、既に洞富雄氏の「間宮林蔵」(人物叢書・吉川弘文館)や赤羽栄一氏の「未踏世界の探険 間宮林蔵」(清水書院)によって詳細が明らかにされているが、両氏とも林蔵の晩年の病状、死因については多くを語ろうとはしない。他の面では微に入り細に入り詳細を極めて余すところがないと思われるのに、死に臨んでの記事はきわめて簡略で、冷淡である。たしかに林蔵の晩年に関する情報が極端に少ないのは事実であるが、両氏とも林蔵を尊崇敬愛される点では人後に落ちないと思われるのに、それであるからなお一層、林蔵の死に不名誉な病状が推測されるのを避けるためか、わざと伏しておられるのではないかと妄断される程の貧困さである。

伊能の大日本沿海輿地全図の作製に当って間宮林蔵の功績の大きいことは、だれもが認めるところであろう。

この地図に添えて上呈された「大日本沿海実測録」には「大凡六十

八州之駅路沿海、回周島嶼に至るまで、遺漏有る無し、更に間宮林蔵測る所を取り、地図を参補し、七たび裘葛を更めて始めて成る」というように、林蔵の功を讃えている。

伊能忠敬は自身で、又自ら測量隊を率いて全国の沿岸を実測して回ったが、蝦夷地だけは、松前から西別迄の東南岸の測量に限られ、ついに西北岸は足を踏み入れないで終わった。そこで沿海輿地全図の作製に当たり、蝦夷地の西北の海岸の地図は間宮林蔵の測量資料を以て補ったのである。

考えようによっては、伊能と間宮の合作であつたといつても言い過ぎではない。間宮の北海道西北部の地図が無かつたら全図としては完成しなかつたかもしれないからである。

しかし間宮林蔵も伊能忠敬から測量法を学び、それを忠実に使つて測定したものであるから、この全図を伊能図ということは別に不当なことではない。

それほど林蔵の大日本沿海輿地全図の作成に当たって、彼の功績が大きかつたことを忘れなければよいのである。

2

間宮林蔵は伊能忠敬の死後ちようど二十年目に没した。

彼は間宮海峡の発見など世界地理の方面に残した功業が大きいので、いろいろな伝記が残され小説も書かれた。北方方面の探険、紀行については詳細をきわめ、日常生活についても特異な性格、奇行が伝えられているが、晩年の生活、中でも健康状態、とりわけ彼の死病についてはまったく不明のまま放置されている。いろいろな推定をなすものがいるが、多くは憶測から出たもので、しつかりした根拠を示すものがない。

彼の書いた日記があるでなし、彼を訪問した人の訪問記録も多くは

探険話に終始して、日常生活についての見聞が極端に少ない。

彼の行動や日常生活についても謎の部分が多いため、秘密に包まれていて、白紙のまま残されている。

ただ間宮林蔵記念館作成の林蔵の年譜において、天保九年から天保十五年までほとんど病臥状態であつたらしいことが知れるが、病名は伝えられていない。自宅に閉じ籠もりのまま死去したらしいが、このことから脊髄或は下肢の疾患による歩行障害の存在が推測されるとしても、詳しいことはわからない。

彼の死因となつた病氣について信頼できる情報は、現在の所ほとんど無い。ただそれに迫る有力な手がかりとして次の三種があげられる。

第一は、国元に彼の異変を報せた「りき」の手紙の中に書かれた病状。(林蔵の実家所蔵)

第二は、林蔵の病氣引き籠もりを聞いて特効薬を贈るよう命じた水戸の齊昭の書状に書かれた林蔵の病状。(水戸藩史料に収録)

第三は、その薬を用いた林蔵自身の札状に見る病状。(森銑三著作集第五巻に収録)

以下これらをもとに林蔵の病状、死因を検討してみたい。

3

第一の「りき」の手紙からの死因推理

林蔵の臨終については、天保十五年二月十九日七ツ半(午後五時)頃、彼の身の回りの世語をしていた女性「りき」が林蔵の様子がおかしいことに気付いて、急を林蔵の実家に告げた手紙が残されている。呼んだ医者が、余病が出なかつたらよいがかなり重症だから看病が大切と言つていたとて、縁者の上京を求めた書状である。

次のようなものが実家に保管され、公表されている。

「急ぎ候間、仁義は真平御免下され候、然れば林蔵儀今日七ツ半時頃よりふと打ふし、持ち用ならず候に付き、色々手当ていたし候得共、宜敷方も相見へず誠に困入候間、何卒この文参り次第に、此の者同道にて御出下され度、偏に待ち入り奉り候。尤もいし(医師)事申し候には、余病出申さず候はば、火急の事も御座無く候得共、御大切儀に候間、御手当て第一と申す事に候はば、くれぐれ御談事申したき事ばかり山々御座候間、御出の程偏に偏に御まち申し上げまいらせ候。余は御出の上にて万々申し上げたく、先ずは右の段ばかり此の如くに御座候、あらあらかきとめまいらせ候。猶又くわしき事は此の者より御聞き取り下るべき候事。

二月十九日暮れ六ツ時認め

間宮内 利き

飯沼甚兵衛様

大急用

「ふと打ちふし」「宜敷方も相見へず」とあつて、そのまま七日後には死去したことから、人事不省のまま突然死ないし急死したことが想定される。

そのことから林蔵の死因を脳卒中死と想定する者が多い。

さらに彼の五尺二寸という短軀・小肥り・猪首・酒好きなどを結びつけて高血圧性の脳出血死とするものがある。瓜生卓造「間宮林蔵」(山と溪谷社)がそれで、「打ちふし」を突然の発作と考え、以後昏睡状態にあつたものとし脳溢血と想定している。しかしこの考えは行き過ぎではないかと思う。体型だけで高血圧を推定することは困難である。これまで病臥はしていてもなんとか持ちこたえてきたものが、この日急に重篤状態に陥つたことは、脳に異変が起つたことを表すも

のと見るのは無理もないが、それ以上は検討の余地がある。

4

第二の齊昭の書状と、其れに対する林蔵の礼状からの推理

水戸の徳川齊昭が、間宮林蔵を慰問するよう命じた書状とは次のものである。「水戸藩史料」別記卷六（p 285、286）に搭載されている。

天保九年十二月二十九日、齊昭が家臣の藤田東湖に書を送って、間宮林蔵を慰問すべきことを指示したものである。

「間宮事、今以て湿瘡平癒いたさず、引き籠もり居り候由、毎度山海精勤故と存じ候。有用の人材に候間、天下の為、早く全快いたさせたく候。此の薬は蚕類の奇法にて、如何なる湿毒にても用い候へば、残らず発し、二回程の内には大方全快いたし候故、内々虎之介より間宮へ贈り候様致すべく候。外に秘法の神仙丸、是もいろいろ効験これあり、遠国などへ持参には然るべしと存じ候故、同様取り扱い申すべき也。

十二月二十九日

藤田 彪へ

間宮出勤もいたし候はば、公辺御用向手すきの節、庭へなり共招き、年来の話承りたく候。兼々申し聞かせ候通り、むかしの患は西海にありて、今の患は北方急務と存じ候。もはや我らも来年は初老にも至り候へば、少しも早く志願を達し、霜雪中に粉骨を尽くし、神祖以来の大神を報いたく、日夜懸念いたし居り候事故、是非間宮全快後には逢い候て、北方の事情承りたく候へ共、差し支えこれあるべきや、ついでに承るべく候也」

文中、虎之介とあるのは藤田東湖（1806～1855）の通称であつて、本名は彪（たけし）といった。なお「蚕類の奇法」とは南蚕渡来

の特効薬（実物はオランダ製の水銀薬）と言つた意味であらう。

文意は、林蔵が湿瘡を病んで、治らないので引き籠っているのとこのだが、有用の人材だから天下のため早く全快させたいと思う。この薬は南蚕渡来の特効薬でどんな湿毒にも効果があつて、二回ほど使えば大方全快するというから、内々虎之介の方から間宮に贈ってくれ。間宮が全快したら呼び出して、北方の事情を聴きたいと思う。差し支えないか聞いてきてくれというものである。当時北方防備の重要性を感じた齊昭が水戸藩あげて北海道に移住し警備に付くことを目論んでいた。それには蝦夷地に詳しい領内の林蔵に知恵を借りたいと思ひ、林蔵に信頼を寄せていたのである。

この手紙の中で「湿毒」「湿瘡」という言葉に注目する必要がある。湿毒とは、当時一般に梅毒を指して言つた。湿瘡とは普通疥癬や膿痂疹などの皮膚病を言うが、この場合は梅毒性の皮膚疹を言つたものであらう。

これに対する林蔵の礼状

（齊昭からの下賜とは知らず、藤田あてになつてゐる）

森銑三著作集第五卷（p 112 中央公論社 昭和46年）に「宮崎文書」から写したとして載つてゐる。年は不詳であるが、赤羽栄一「未踏世界の探険 間宮林蔵」（p 192）では天保九年十二月、齊昭から藤田東湖を通じて、湿瘡見舞いの薬が贈られたときのもので、翌天保一〇年三月二十六日林蔵から東湖にあてた礼状であるという。

藤田虎之助様

間宮林蔵

奉謝の爲一書を呈し候。其れ已来は無音仕り、疎遠に罷成り候処、愈御安静拝寿奉り候。就いては旧臘は格別の訳を以て、御良薬御恵下され拜戴、早速仰せ聞かされ候通りの仕方を以て、相塗り候

処、余程相発し、暫らくの内難儀も致し候処、何変も之れ無く、早速の間に平癒仕り、先ず御蔭を以て全快と相見え候。去りながら永々邪瘡を相感じ候儀に付き、時には少々づつ小瘡は相発し候迄にて、格別の悩みは之れ無く、是れにて先は本復と相見え候。其の内罷り出御厚礼申し上げべく候。

先達て伊能勘解由測量地図御懇望の由仰せ聞かされ候処、承知畏れ奉り候。早速同人親族方も問合わせ候処承知候様子につき、同人親の者水守章作と申す方差し上げ候間、御遇い下され相談下さる様に仕り候。其の内小生儀も参上、委曲申し上げべく候。右之通り御意を得たく、此の如くに御座候。

已上 三月二十六日

この文面を見ると、貰った薬は、「相塗り候処」とあるところから見ると塗り薬であることがわかる。塗ったところ瘡(かさ)が「余程相発し」一層多く出て、暫らくの間難儀したといっている。それ以後はたいした変化もなく、すぐに消えていって、全快したように見える。しかし何分長い間、「邪瘡」すなわち悪性の病気に感染してきたものだから、ときどき「少々づつ小瘡は相発し」僅かではあるが小さい「かさ」が出て来ている。しかし別に悩むほどではない、先ずは「本復」治癒と見てよいと思う。その内お札に参上するつもりだ、というのである。

平癒とか本復とか言っているが、薬を貰った手前、悪いとは言えず、かなりよくなったような言い方をしているが、完全治癒まで行つたのではなく、少しづつ小瘡が出る状態だったらしい。

林蔵自身「邪瘡」という表現を使っているが、瘡は湿気と毒気によつて起こる病をいう。この場合は症状と経過から見て、先ず「梅毒」と判断して間違いないであろう。

梅毒には塗り薬として普通、水銀軟膏(33%の純水銀を含有する灰色の軟膏)が用いられる。塗り方は瘡に直接塗るのではなく、毎日場所を変えて、第一日左脚、第二日右脚、第三日左上腕、第四日右上腕、第五日胸腹の左側、第六日胸腹の右側というように塗って行つて、第七日は休薬し入浴する。これを繰り返して、三週間から六週間続ける。これによつて第二期の梅毒疹などは完全に消失するが、なかなか全治とはなりにくい。上記の治療法を半年か一年おきに繰り返して五、六年を経過して初めて全治する。

全治かどうかの判断は、現在ではワッセルマン反応というのがあつて、的確に判断できるが、昔は症状だけに頼つたので、表面的に症状が軽くなれば、未治癒のままに放置されやすく、数カ月あるいは数年潜伏して第三期の症状を発して来る例が多かつたものである。林蔵の場合も一時的な軽快はみられても小さな瘡や潰瘍は残つたものではなからうか。

要するに彼の場合も主病は梅毒で、徐々に第四期に進行していったものと見える。

5

筆者は林蔵の死因を、梅毒第四期の脳動脈炎破裂による脳出血死と推定する。

梅毒はその経過から見たとき、大きく分けて、第一期から第四期とする。第一期は感染後三週目、性器の潰瘍(下疳という)と鼠径部リンパ節の腫脹(便毒または横根という)が主兆候である。第二期は約三カ月後、梅毒疹といわれる発疹が主兆候である。赤い花弁状の発疹であることが多く、やまももの花に似ていることから楊梅瘡といわれた。第三期は感染後約三年、ゴム腫(結毒という)を特徴とする。皮膚とか骨にゴムのような固まりを作り、決壊して潰瘍となることが多い。第

四期は感染後約十年、この頃心臓血管系が犯され、脳・脊髄にも病変をきたし、梅毒性脳動脈炎・脊髄癆・進行性マヒ等を発症する。

有効な治療法の無かった江戸期の梅毒は、今のエイズと同じくらい非常な惨禍をもたらしたものである。死に直結するか、廃人に終わる例が多かった。梅毒が死の原因となるのは第四期まで進んだときであつて、梅毒性脳動脈炎を引き起こしたときは、部位として大動脈の上行部と脳動脈が犯されやすく、中でも脳動脈の場合は、動脈壁に病変が生じ血管が膨張して破裂をきたすことが多く、脳出血死の形をとつた。また脊髄癆の場合は、起居不能、寝たきり状態となり、羸瘦著しく衰弱死をする例が多かった。

林蔵の病氣は梅毒であるとなえるものに、吉村昭の小説「間宮林蔵」(講談社)がある。文中湿瘡の症状として赤い発疹をあげている。また林蔵の回想の中で感染時期を松前時代としている。

しかし前述のごとく、梅毒に見られる発疹(とくに赤い発疹)は、普通感染後三ヵ月、いわゆる第二期に現れるものであつて、吉村の赤い発疹が見られたのが天保八年と言つた物語の構成では、彼五十八歳の年齢でかつたことになるし、松前時代(三十歳代)のものというのと大きく矛盾する。むしろ第三期の骨梅毒(ゴム腫)が皮膚に破れて潰瘍を作つていたのを湿瘡と呼んだのではないかと思われる。ゴム腫は頭骨、頭皮にできやすく、頭に見にくい瘰癧を残すし、脛骨にできたものが皮膚に破れて瘻口を作り(附骨疽という)いつまでも膿を出し、歩行の障害を残すことが多い。

吉村の説は、齊昭の手紙にある湿瘡を赤い発疹(すなわち第二期のもの)と推定して物語を組み立てているが、年数的に無理がある。しかし吉村が梅毒説を裏付けるために「湿瘡」に対し第二期の症状をあげ

たのは不適切であつたとしても、第三・四期の症状をあげておれば間違ひであつたとは云えない。ここさえ訂正していれば、林蔵梅毒説は納得される所であろう。

なおここで脳出血説の検討を試みる。

おそらくこの説は「りき」の手紙から突然死のように見えることと、まさか梅毒のような性病で人が死ぬようなことは起こり得ないであろう、といった現代人の推測から出たものと考えられる。

確かに林蔵の死は突然に起こつたように見えるが、江戸時代の梅毒は現在の性病の梅毒とはまったく違うということを知らない者には不思議に思われよう。梅毒の第四期では、経過中一見このような突然の死亡はしばしば起こつたもので、不思議でも何でもない。原因は前述のごとく梅毒によつて生じた脳動脈炎の破綻からである。脳出血説をとるものは、おそらく林蔵の体格が短軀、肥満、酒好きであつたことから、高血圧を想定し、それを根拠に推定したものと思われる。高血圧性のものならば、多くの場合最初軽い発作(軽い四肢の麻痺・言語障害など)があつて、しばらくの後、ある程度回復を見た段階で、今度は大きな発作が襲ひ、昏睡状態の内に死去するという経過をたどる事が多い。すなわち再発を繰り返し、後ほど重症になるという特徴がある。脳出血説を唱えるならば、その前に手足の麻痺あるいは言語のもつれなどの軽い麻痺症状が存在したことを証明する必要があろう。何の前兆もなく突然死んだのだから脳出血だ、短軀で酒好きだから高血圧があつたに違ひないというのではあまりに乱暴である。納得が得られないであろう。

いま一回繰り返すならば、林蔵の死因は梅毒、齊昭のいう湿瘡との

判断に組みさざるを得ない。

ただ齊昭が聞いた湿瘡というのは、第二期に見られる梅毒疹（赤い発疹）ではなく、第三期の結毒であったのではないかと考える。それが皮膚に破れて潰瘍を作っているものを「湿瘡」と言ったのではないかと思う。

湿瘡は必ずしも梅毒疹のようなものだけを言うのではなく、一般には膿痂疹や疥癬等の皮膚病を言うことは前に述べた。湿瘡すなわち湿毒、したがって梅毒というように、短絡的に考えてしまうことはできない。齊昭の場合は、すべて家臣の報告によったものであるが、その報告に誤解が含まれていなかったとはいえない。家臣が林蔵の皮膚病を見て湿瘡と誤認して報告したのを、すぐ湿毒を連想して、湿毒ならばこの薬というように短絡的に進めてしまったことも考えられる。

結論として、林蔵の病気は梅毒であり、天保八年頃その第三期の症状として皮膚の潰瘍や下肢骨のゴム腫等を生じたことから歩行障害に陥り、以来長く臥床を余儀なくされて、直接の死因としては、梅毒第四期に見られた梅毒性脳動脈炎の破裂によって、天保十五年二月十九日脳出血を発し、七日後死去したものと判断される。

＊資料収集に当たっては佐久間達夫氏の御協力を得ました。

（すぎうら もりくに・医学博士、山形大学名誉教授）

編集部 前47号「文化十年忠敬が遭遇した二つの別れ」で取材協力者佐久間さんの敬称が脱漏していました。杉浦さん佐久間さんに深くお詫びします。

ニッポン人・脈・記 ゆっくりと⑥

クルマを捨て 歩け、歩け

「完歩」から「観歩」へ体喜ぶ

朝日新聞 4月9日から



木谷道宣さん

日本でウォーキング運動が始まったのは64年。東京オリンピックの年だった。

日本ウォーキング協会専務理事、木谷道宣きたにのりのは協会の前身「歩け歩きの会」からウォーキング運動一筋に歩んできた。

63年、早大生だった大西七郎が仲間5人でアメリカ大陸を歩いて横断する。米国ではすでに車社会への反省が起き、J・F・ケネディ大統領が「50マイル・ウォーク」を提唱していた。

木谷は早大に入って大西と知り合う。翌年10月、大西と木谷らは都内の学生に呼びかけ初の歩け歩け大会。約150人が参加した。

今日、日本ウォーキング協会関係の行事は年2500を数える。

「最初は、おもしろかったから歩いた。それから健康・スポーツのウォーキング。『完歩』から、見ながらゆっくり歩こうと『観歩』へ。スタイルも変わってきました」と、木谷は振り返る。

私も、歩くことを日常心がけるようになった。体が喜んでいる感じは、確かにある。（都丸修一記者）敬称略

久美浜に於ける伊能測量(二)

松田 昭二

第2回目の久美浜測量(文化11年の内陸測量)

第八次測量の帰り、文化11年(1814) 1月4日姫路から播磨、但馬の街道測量に入った。

湯島村で文化3年の測点に繋ぎ、続いて街道測量し、1月24日出石で大手分けて2隊にわかれている。

伊能本隊は久畑から登尾峠を越えて丹波天田郡へと街道測量に行ったので、忠敬本人は久美浜には来っていない。

永井支隊は1月25日円城寺峠を越え丹後熊野郡市野々村に入り丹後の測量である。

測量隊員

永井甚左衛門(支隊長) 小笠原備後守同心で天文方高橋景保の手附下役、文化10年坂部貞兵衛の死後は、支隊長として忠敬を補佐した。シーボルト事件で江戸払いとなる。

今泉又兵衛 幕府の同心で高橋景保の手附下役となり、第8次測量より参加した。

箱田良助 備後国箱田村の人で、忠敬に師事し測量術を学び、第7次測量に参加して以降、測量及び地図作成に従事。榎本武揚の父。

甚七 棹取(間竿を持って土地丈量する者)

測量日記から見た測量の概要

1月25日 雨後曇 五ツ頃(8時) 出立

唐川出立 30町9間円成寺峠国堺、丹後国熊野郡田口五郎左衛門御代官市野々村丹後路は雪深し、踏堅たる雪3尺ばかり、谷間は5、6尺、寒中は2丈も積もると言う、左不動堂 止宿前に打止、30町3間 街道合1里24町12間

九ツ時市野々村着 止宿庄屋兵五郎 百姓太右衛門

1月26日 雨降続く 六ツ半(7時)市野々村出立

左天満宮北谷川土橋3間、布袋野左出石道追分 畑村枝西畑河上川土橋十間畑村、金谷村まで29町48間 須田村、新庄村、品田村、友重村まで24町18間 坂井村まで6町12間 右京街道、左成相道追分打止、街道合せて1里24町18間、それより1里ばかり無測 八ツ時前 代官田口五郎左衛門陣屋 久美浜村へ着 止宿酒屋喜兵衛(注 稲葉家)

1月27日 昨夜より雪、今日も猶降る、午後まで見合わせ八ツ時前頃、丹後国熊野郡田口(代官)支配所久美浜村出立

同村にて式内神谷神社、当時いわく神谷太刀宮大明神。神主佐治長門、祭日九月午日、宝物面二、太刀一振無銘、太刀宮大神とある。

右社前より初め久美浜村町並み317軒、4町27間

ここより寅(文化3年) 8月28日と重測、左2町斗に田口五

郎左衛門陣屋、左3町斗古城跡、松平佐渡守居城

三谷川橋十間、左一向宗長命寺、右浄土宗西方寺、○久印まで2町36間。此れより海辺打出横45間寅年に繋ぐ、又○久印初土橋

3間曲がり角まで重測2町42間、重測合5町18間、

此れより新測、左30間斗引込浄土宗靈鳴山本願寺、法然上人旧跡という。栃谷村、左名水岩出の清水、字岩出峠 出石領坂井村、右側御料友重村 左坂井村枝下坂井 右京街道 左成相道追分、昨日打止○サ印に繋32町57間 此れより京街道を測る

左側坂井村右側友重村、左右出石領橋爪村 小休百姓弥五郎。
御料永富村枝茶屋 出石領谷村 田口支配所野中村字石峠打止
30町6間、街道2里48間 外横45間 惣測2里1町33間。
六ツ時後に野中村着、止宿酒屋千左衛門、百姓庄藏。

1月28日 晴天。六ツ時熊野郡田口支配野中村出立

同村字石峠昨日打止初め 左に庚申堂、右側安養寺村、左右佐
野村端郷字なし、佐野川土橋9間、左小山の上に愛宕の社あり、
佐野本村駅場、左古城跡 佐野備前守居城 今七面の社あり、
中郡鱒留村字ヒジ山峠、ヒジ山川3間、左制札前打止、街道1
里29町54間、四ツ半時鱒留村着、止宿庄屋惣左衛門、百姓和左
衛門。

以上は測量日記から見た測量の模様であるが、神谷神社保管の古文
書があるの 古文書から見た地元の対応を見てみよう。

文化一一年
書 上 大下タ
戊正月 久美浜村

(注 大下タの意味は不明)

御先触 正月二十日出石より発した 伊能勘解由外3名連記

国々測量為御用

順 路

(24日出石↓唐川↓市野々↓久美浜↓峯山↓以下京都まで)

別紙案文のとおり書上提出、村送りの案内

測量方総人数18人のうち手分 止宿等支障なきよう、星測量場
所準備

賄い方宿泊 お定めの木銭米代 有り合わせの一汁一菜
書 上 庄屋今西七郎兵衛、山本甚左衛門より前宿へ提出
(久美浜村の概要であるが、文化3年のものともあまり変わらな
いので省略)

問合覚(事前に近隣に問合)

荷物何程人足何程 長持ち人足何人かかり

賄い方、料理、酒出しの事 夜具の事 米銭 酒買い上げ相場

聞合

御休泊は別段(追触れより) 近々お先へご案内

村境 出迎ひ 庄屋 お通り筋1町毎ニ杭立て

水縄 梵天竹用意の事

当日の対応準備

永井甚左衛門、今泉又兵衛様外二内弟子2人、家来2人上

下6人 お宿はお座敷4間あれば1軒にて相勤

26日久美浜村境まで迎えの事

道筋 1丁毎の杭いれは不要 村境又へり道で紛らわし

い所

梵天竹 長さ2間 10本 杭4く5本持ち回り候事

お荷物 6さし この人足18く9人

外二測り回り人足12人 計32く3人用意

神社の義 長門様へ相尋ね候事

以上が第2回目の測量、永井支隊による久美浜内陸測量の概要であ
る。

むすびにあたり

第1回目の文化3年の測量は久美浜の海岸測量であり、伊能忠敬自

身も来ており、測量隊員も多かった。第2回目の文化11年の測量は伊能測量の支隊長永井甚左衛門による内陸測量で小規模であり、伊能忠敬本人は来ていない。

しかし伊能測量としては、この第2回目の測量を通じて日本海側の久美浜と瀬戸内海側の姫路や京都とつなぎ、地図の誤差の修正にも大きな意義があったと思う。

伊能忠敬は緯度経度からも割り出した当時としては世界的水準をいく、立派な「大日本沿岸輿地全図」「輿地実測録」を完成した。忠敬並びに隊員、関係者の学識、不屈努力に対して深い敬意を表するものです。

識者の間で伊能図が評価され、文政12年伊能図の写しを持ち出そうとして見つかり大事件になったシーボルト事件、幕末頃英国の海図測量アクテオン号が伊能図を入手し、その正確さに驚き地形測量はせずを持ち帰った、グリニッチ国立海事博物館に現存する伊能図については以前から知られていた。その後イタリアから出て来たカナ書の伊能図、フランスのペイレ家から発見された立派な伊能中図、最近では平成13年7月5日各新聞のトップ記事となった、ワシントンの米国議会図書館から発見された伊能大図（縮尺3万6千分の1）²⁰⁶枚がある。（うち140枚は日本でも未発見で複製されている）

伊能図は日本でも陸軍測量部の地図作成に使われたが、幕末から明治にかけての時期、欧米先進国が極東進出の際ひそかに入手したものと考えられる。

伊能図の評価が少し長くなったが、伊能忠敬は記録することの達人であった。17年間1日も欠かす事の無い自筆の測量日記が、佐原の伊能忠敬記念館に勿論重要文化財として残されている。

久美浜の測量は、第1回目の海岸測量も第2回の内陸測量も、伊能

測量の第5次測量以降である。第5次測量以降は、老中から御証文が出された幕府直轄事業であり、当然経費は公費で賄う事にはなっていた。出役人夫は無償提供であるが、宿泊費は木銭、米代、一汁一菜を支払うように通知されている。

久美浜では測量の経費に関する書類はまだ見つからないが、他の地方の例から考えると、実際には準備費や接待費その他の多額の経費を要していると思われる。

福知山の堀村代々庄屋記録（史談ふくち山・平成7年・照岡正巳氏）によれば、これらの経費が多額にのぼり、超過経費、札3貫780匁1分を四郷高割（南郷、豊富郷、金谷郷、夜久郷）により、6月晦日を限り賦課している。

立派な伊能図の作成の裏には、村人たちの人的な協力と多額の経費負担を見逃すことはできない。

当時、現地で測量に関係した我々の祖先である庄屋や、貧しい多くの農民漁民の、献身的な測量の協力に思いを馳せながら粗稿をとじます。

本稿をまとめるに当たり古文書提供をしていただいた佐治正胤氏、解説していただいた小田秀治氏に深く感謝致します。

了

【参考文献】

『伊能忠敬測量日記』 佐久間達夫

『伊能測量隊まかり通る』 渡辺 一郎

『忠敬と伊能図』 伊能忠敬研究会編

（まつだ しょうじ・久美浜町郷土研究会副会長）

「郷土久美濱」第10号より

小西伯照著「松江近体詩」の翻刻出版に係わる契機のひとつとして「郷土久美濱」誌上で宮園昌之氏が以下のように紹介されている。

松田昭二氏が研究中の『忠敬先生日記』の中に、忠敬が文化3年8月27日28日に伯照邸に止宿しており、日記では異例の伯照紹介の記事があることが判った。また、杵築市の久米忠臣氏から送られてきた『麻田剛立研究資料』（藤井準一 郎著、久米忠臣編）によって、忠敬は剛立の孫弟子（麻田剛立→高橋至時→伊能忠敬）に当たり、当時（安永頃）伯照には、大阪玉江橋に観水館と名づけた別邸があり、そこで京阪の文化人と広く交わっていたし、剛立も大阪本町で天文学・暦学の研究をしており、中井竹山等の伯照交友圏の文人たちとも交流があり、後年の忠敬の伯照邸止宿は既にこの頃から何がしかのつながりがあったのではないかと疑いたくなります。ちなみに剛立も篠崎小竹（伯照邸を訪れたことあり）の父も杵築の出身である。

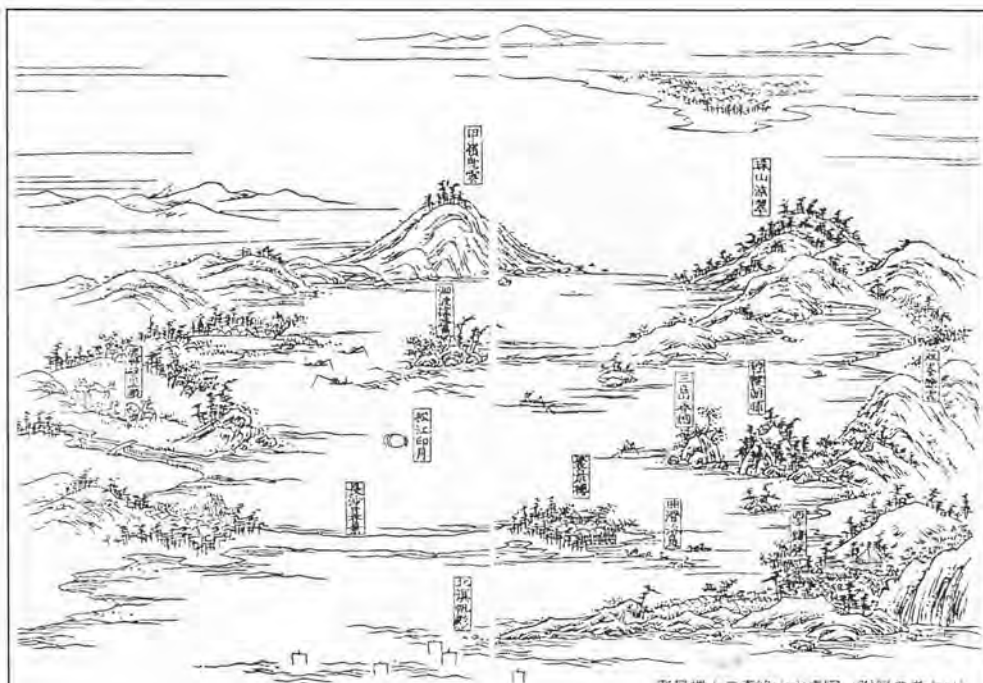
天の橋立に劣らぬ天領久美浜湾（一名松江）の絶景

丹後の国天の橋立より更に奥の、但馬の国と接するあたりに「松江近体詩」のふるさと、久美浜はある。江村北海は、伯照の楼に聚景楼と名付けた。「日間浦（久美浜湾）聚景楼十二咏記」によれば「双峰余雪」「三島春烟」「珠山涼翠」「甲嶺曳雲」「北溟帆影」「西寺鐘声」「松江印月」「長沙暮景」「泗渡棲鷺」「局湾浴鳧」「鹿野繁霜」「霞隼朝暉」の十二景に名士が詩句を贈っている。

松田さんのお便り 「拙文で恐縮ですが、一人でも多く久美浜を知っていただければ幸いです。暇を見付けてお出で下さい。丹後半島から但馬海岸（山陰海岸国立公園、若狭湾国定公園）を案内致します」

丹後湊の廻船問屋小西伯照 埋もれた名勝と忘れられた詩人が今蘇る！

日本側（湊宮）から見た久美浜湾



聚景楼十二奇絶山水真図（附録の巻より）

今井八九郎の「室蘭図」(一)

井口 利夫

はじめに

アイヌ語地名研究会会報に掲載された筆者の拙文(注①②)が本会事務局福田弘行氏のお目に止まり、本誌への転載のお勧めがあった。

今井八九郎図を本誌に紹介するとなれば、先ず作者の今井八九郎の紹介が欠かせないが、この点筆者はごく断片的な知識しか持ち合わせていない。今井八九郎については既に佐々木利和氏が研究論文をいくつも発表されていて、(注③・④など)筆者などが概説するのは誠に不適任である。このようなわけで一旦は辞退させて頂いたのだが、福田氏の懇切なお勧めもあり、僭越ながら誌面を汚すことにした。

以下、(1)については前述の佐々木利和氏の諸論文を参考にした。(2)は前述の二報を再構成したもの、(3)は別の拙報(注⑤)を執筆した際に気付いた松浦武四郎との関係についてまとめたものである。

(1)伊能忠敬の孫弟子「今井八九郎」

今井八九郎図については、東京国立博物館に礼文・利尻島図などの素晴らしい地図が所蔵されていて、先年の「伊能忠敬と日本図」にも出展されていた、と書けば、思い出される方も多いと思う。

今井八九郎(信名一のぶかたー(不山) 1790~1862・73歳)は松前藩の測量家で、間宮林蔵にその測量術を学んだとされる。

文化四年(1807)幕府の松前及び蝦夷地の上知により、松前藩は奥州伊達郡梁川に転封される。家督を継いでいた兄豊八はこの際にお

役御免となり、その後幕府の松前奉行支配同心となった。文化十年兄豊八の早逝により家督を継ぎ、今井八九郎も松前奉行支配同心となった。その後、文政四年(1821)蝦夷地が松前藩に返された後、松前藩に復している。この松前奉行支配同心時代に、松前奉行支配調役下役格として蝦夷地各地の調査・測量に従事していた間宮林蔵に師事したものだと思われる。この間の間宮林蔵の測量自体に不明な点が多く、従って今井八九郎が何年ごろ、どのようにして測量技術を習得したのかなども判っていない。しかし、伊能忠敬にとっては測量技術の孫弟子にあたることだけは確かである。

松前藩は文政四年に14年ぶりの蝦夷地復領を果たした。その後蝦夷地全体の情報を把握し直す必要に迫られ、藩命によって今井八九郎らが調査・測量に従事することになる。本稿の図もこの一環として作成されたものである。

今井八九郎の測量技術については現存の地図類でその水準の高さを実感できるが、その技量が当時の水準を抜きこんでいたことを示すエピソードも残されている。安政期のこと、幕府の樺太調査に当たって案内役として同行した今井八九郎が、幕吏の測量技術を評してトラブルになったことがある。幕吏の中に林蔵の没後その家名を継いだ間宮鉄次郎が居て、「圖ラサリキ吾力祖父ノ弟子ナルヲ知り、剩へ祖父ノ測度法一切ヲ傳習シ得タルヲ欣ビ」『今井信名経歴一班』(注④⑥)という状況に変わり、喜んでその指導を受け入れたという。結局、その技量の高さが評価されて特別の褒章に預かったという。

以下に述べる「室蘭図」(当時の呼称に従えば「エトモ図」と称すべきだが)についても、その出来ばえは時代を抜きこんでいる。断崖絶壁の続く絵鞆半島太平洋岸については、伊能忠敬ばかりでなく、間宮林蔵も「未測量」とせざるを得なかった難所である。幕末にこの地

を分領された南部藩の詳細な地図（注⑦）でも大きな誤りのみられる部分であり、その測量・調査の苦勞の程がしのばれる。今井八九郎図は現行図と比較しても狂いが少なく、また、地形描写も小岬・小浜なども詳細に描き分けられ、アイヌ語の地名も正しく把握されていたようである。当時の地図では、浜や川の地名がしばしば岬に記載されたりしているが、本図では浜や川の位置にきちんと記載されていて、アイヌ地名研究上も有力な史料になっている。

今井八九郎図に匹敵する地図は、外国船による海図以外には、明治20年代の北海道庁地理課作製の地形図まで現れなかった。

(2) 今井八九郎図の縮尺

松前蝦夷地海岸明細図

北海道大学附属図書館蔵「松前蝦夷地海岸明細図（仮称）」（推定今井八九郎編）という70枚（現存61枚）に及ぶ地図群がある。このうち室蘭部分（図1）が高倉新一郎編『北海道古地図集成』と秋月俊幸著『日本北辺の探検と地図の歴史』に掲載されているので、御存知の方が多いと思われる。後者の図（p.344）の解説は以下のようになっている。

「北海道沿岸と離島を6万分の1の縮尺で連続的に描いた70枚の海岸図。隣図との接合のため数箇所記号が付けられている。断崖は写實的に、山部は山波で描き、勤番所、運上屋、番屋、夷家などを記号で記す。」（注 以下傍線筆者）

また北海道大学附属図書館発行の『北海道関係地図・図類目録』（1981）には、

「153 松前蝦夷地海岸明細図（仮称）天保年間頃 手書彩色 61枚 1里2寸1分6厘縮図（1:6万）」〔註〕北海道全沿岸の実測切図

東蝦夷地（いゝや）、西蝦夷地（いゝき）のほか離島4枚。もと70枚のうち8枚を欠く（但しチは前原松夫氏所蔵のゼロックス）。高倉新一郎氏寄託。編者は松前藩士今井八九郎か。」とあり、これまで6万分1図であるとされてきた。

地方史調査の関連で、室蘭部分について別の地図と縮尺をそろえて比較するため、この地図の写真を拡大コピーしてみたところ、縮尺が全く合わない。止むを得ず原寸コピーを作って各地名間の距離を10箇所調べたところ、実際は1/2万7千1/3万4千位と上記縮尺の約2倍であることが判った。本図群は前出書にあるとおり、松前を起点にして東蝦夷地、西蝦夷地各々30枚程が合わせ記号で順次隣接図と重ね合わせられるようになっているので、室蘭部分1枚だけ縮尺が2倍になっていることは考えられない。

何故こんな解説の誤りが発生したのか。『目録』の元となった図書カードにも「1里2寸1分6厘（1:6万）」と明記されている。これほど具体的に縮尺が明記してあるからには、この地図群の中に縮尺を明記してある記事があるに違いない、と想像した。それも恐らく他の沿岸地図とは接続しない離島部分に違いないと考えた。気にかかることではあったが、他の地図の調査も急いでいたので、何度目かの訪問でようやく離島部分の地図を調査する機会を得た。離島部分の地図のうち、天売・焼尻の図（33（ユ）西ヤンケシリテウレ）の中に、探していた記事が見つかった。

「ヤンケシリ

一里二寸一分六厘縮図 周二里廿六町余

平原凹凸有 山ニ似タリ 木少々有

（注 ヤンケシリ＝焼尻島の説明文）

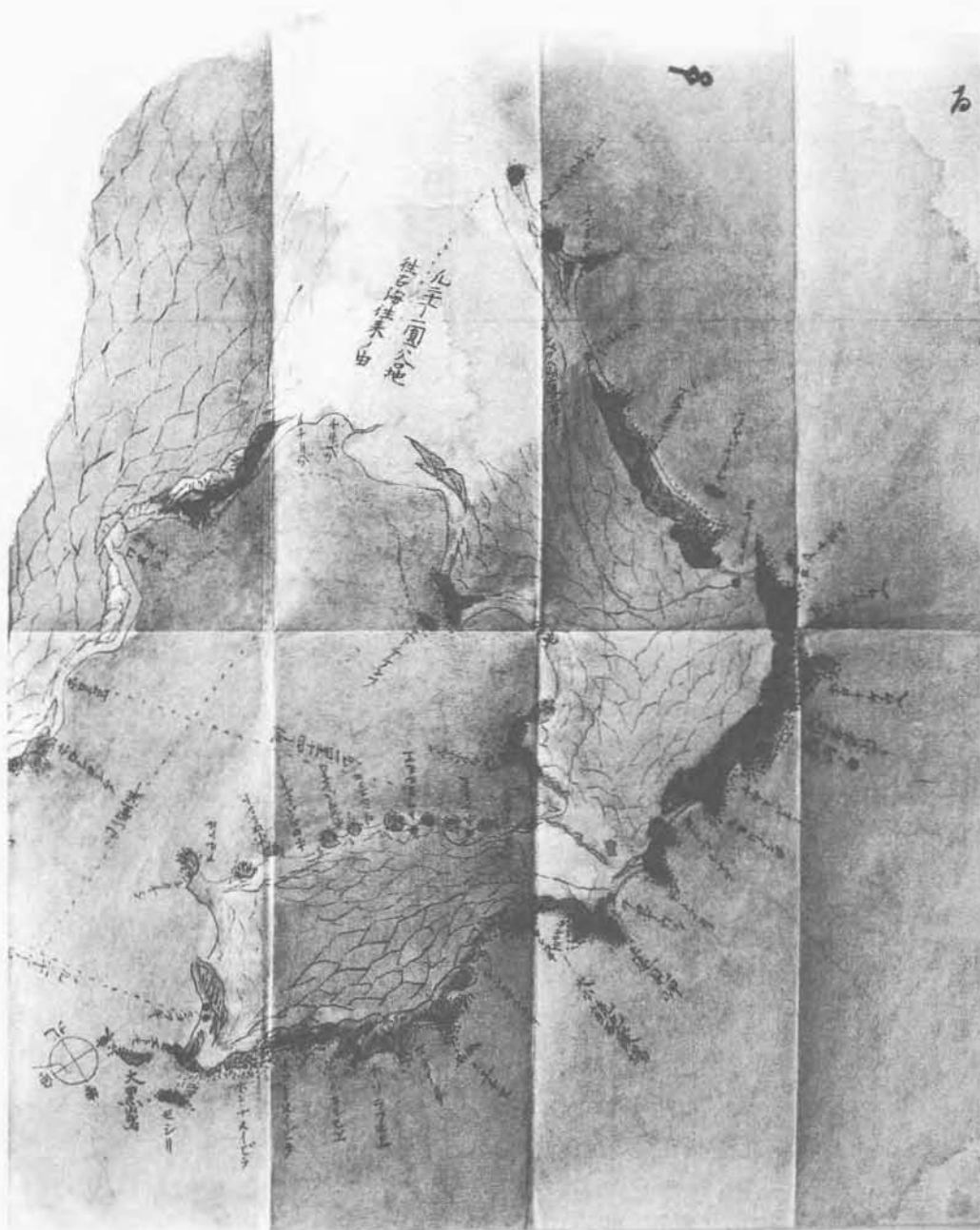
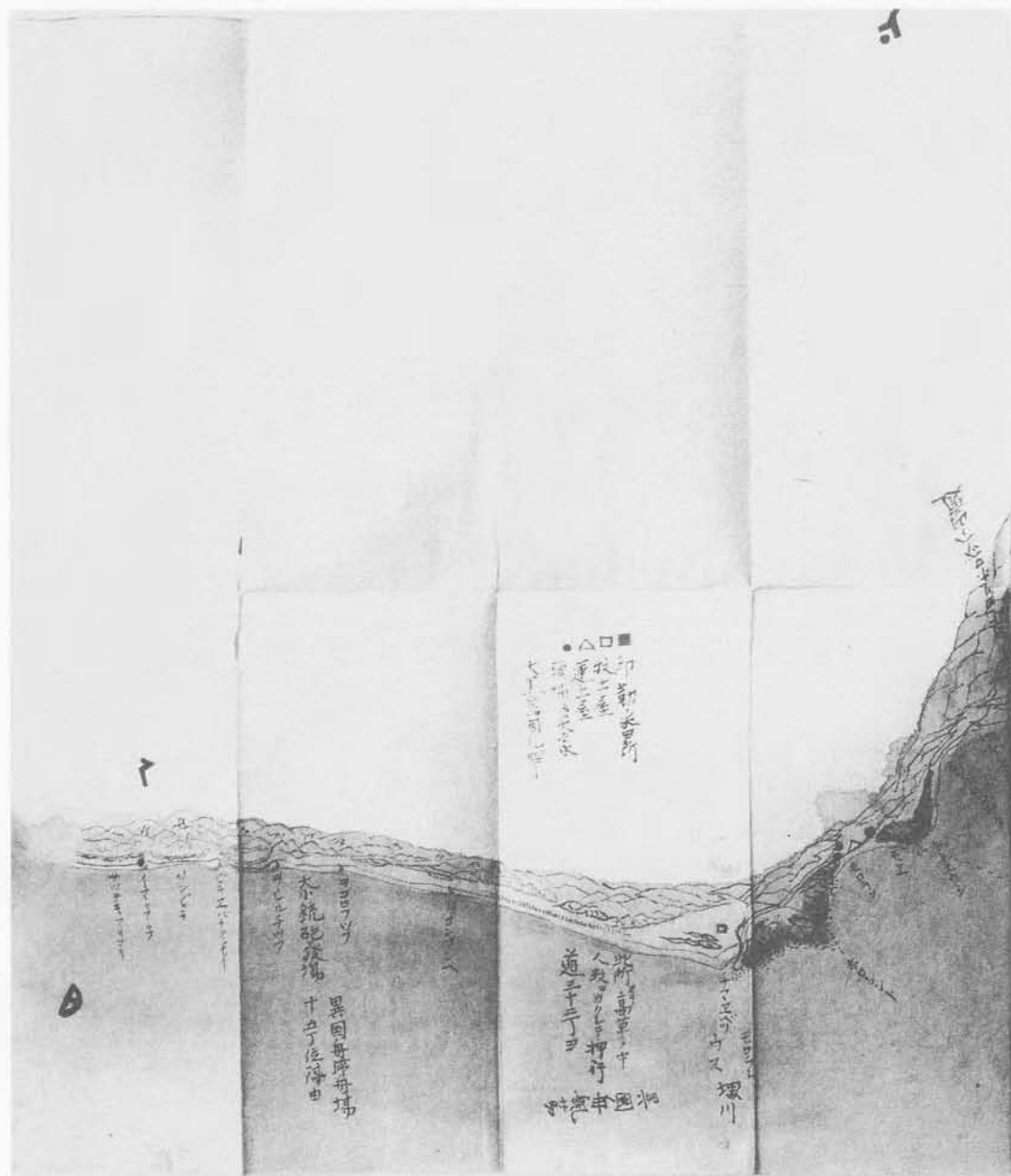


図1 『松前蝦夷地海岸明細図(仮称)』の内『る』
(北海道大学附属図書館蔵)



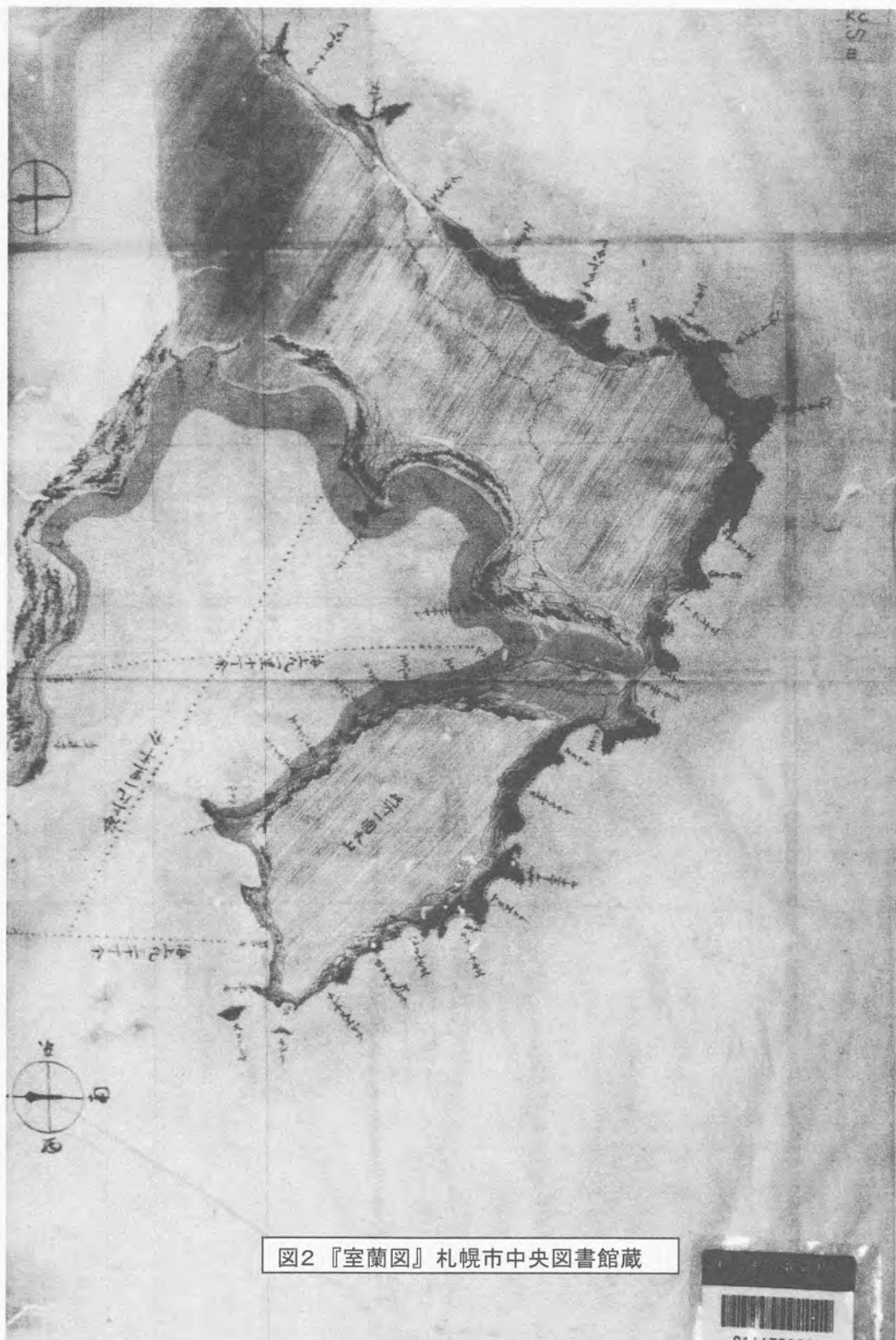
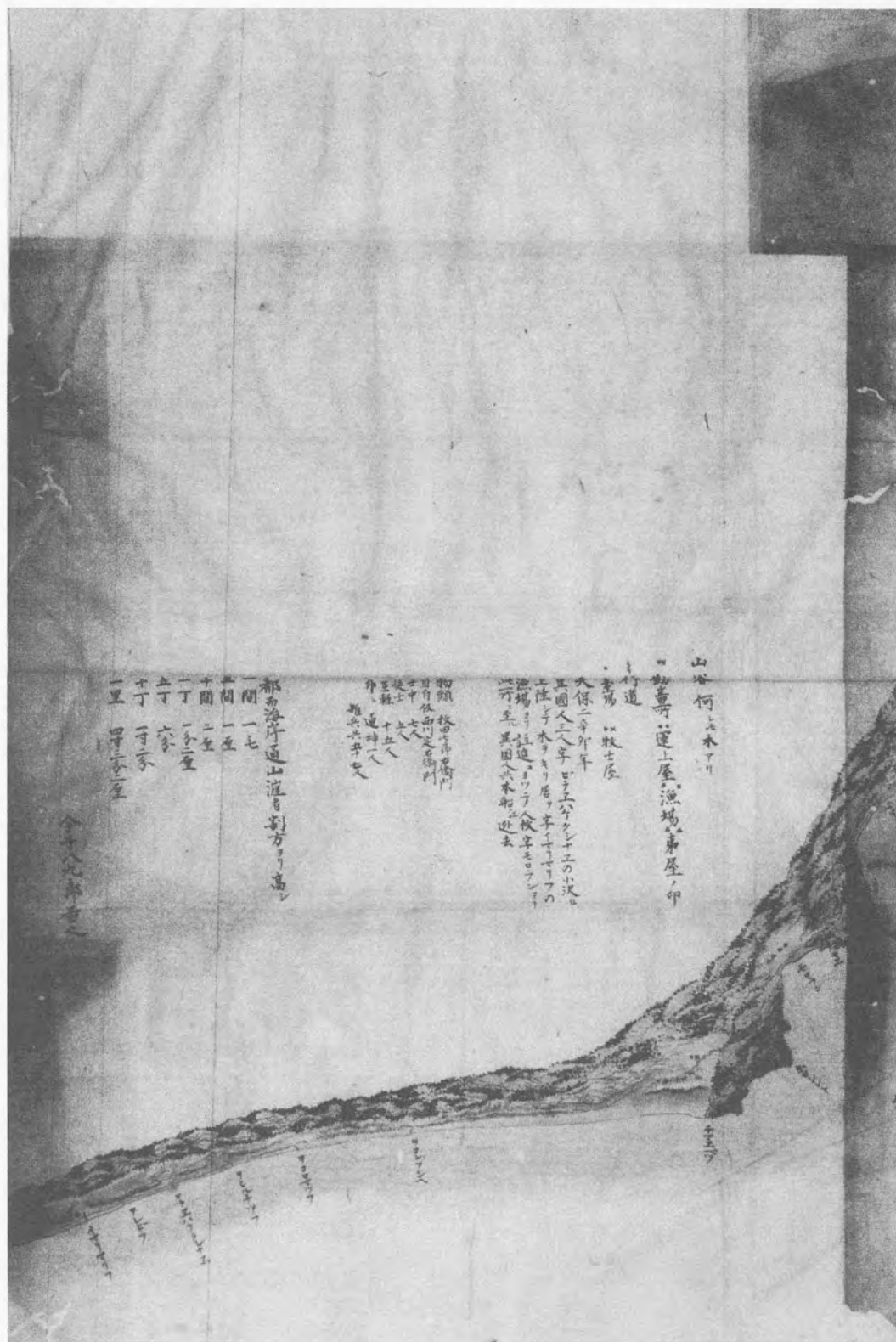


図2 『室蘭図』 札幌市中央図書館蔵



「テウレ

一里二寸一分六厘 周二里廿三町四十間余

平山木有」

(注 テウレII天売島の説明文)

他の沿岸図は勿論、他の離島図にも縮尺の記載は全く無かった。図書カードはこの記事を引いたらしい。この図にわざわざ縮尺を特記した意図は、他の沿岸図とは縮尺が異なっているからに相違ない。それでは他の沿岸図の縮尺はいくらだったと考えたら良いのか。推定の参考になるのは、同じ今井八九郎と推定される樺太図「北蝦夷図」である。北大図書館にはコピーが所蔵されているが、この図中には「一里一寸八厘」という記載がある。一方、先に紹介した図書カードの「北蝦夷図」の分には、やはり「一里二寸一分六厘(1:6万)」とあり、図中の記事と異なっている。ちなみに、こちらの『目録』の方の記載内容では、図中に1里2寸1分6厘縮図(1:6万)と1:12万図中に2種類の縮尺が混在していることを明記している。

このシリーズの中で図中に明記されていた縮尺は、

1里 2寸1分6厘(1:6万)

1里 1寸8厘(1:12万)

の2種類である。近世の地図は1里1寸とか2寸とか、こちらを整数として、縮尺の方が端数になるものがほとんどだが、このシリーズではいずれも縮尺を整数とし1里に対する寸法に端数を付けている。とすれば、この沿岸図群も1里に対する寸法に端数を付けて整数の縮尺を採用していると想定して良いのではあるまいか。先に上げた室蘭地方図の推定値1/2万7千1/3万4千から考えれば、恐らくは3万分1、1里4寸3分2厘ではなからうか。このシリーズで採用された縮尺としても、丁度12万、6万、3万と倍々の整った縮尺系列となって具合がよい。

また、この70枚に達する地図群を実際に活用することを考えると、各図の採録範囲を示した「一覧表」や「凡例」の説明などが不可欠のように思われる。恐らく、当初この地図群には文書が添えられていた筈で、それにはこの「一覧表」や全体の「縮尺」等を記した解説が含まれていたに違いない。沿岸図各図に縮尺の記載が無いことは、そうとしか説明できない。

札幌市中央図書館蔵の今井八九郎「室蘭図」

右の記事を発表した後、札幌市中央図書館蔵の今井八九郎「室蘭図」(図2以下本図)を調べる機会があつて、上記の件を裏付ける記載の有ることが判った。

本図は上記北大図書館蔵組図の中の室蘭図(以下北大図)とほぼ同じ大きさに描かれていて、縮尺も同一と考えてよいと思われる。本図の余白には、①記号の凡例 ②異人上陸とその対応記事 ③縮尺 ④署名の記載がある。縮尺については図中記事③に、

「都而海岸通山崖者割方ヨリ高シ 一間 一毛/五間 一厘/十間 二厘/一丁 一分二厘/五丁 六分/十丁 一寸二分/一里

四寸三分二厘」

との記載がある。前記で推定した通り、今井八九郎図の縮尺は「3万分1」で、また縮尺率を整数にするため「1里4寸3分2厘」と縮図寸法の方に端数を付けて作図していることが確かめられた。

なお、作者については、④に「今井八九郎図之」とある他、地名表記の幼音に「チヤ」と傍線を添える書き分け法が『東西蝦夷地大河之図』(注③⑧)の表記と一致するところから、今井八九郎の直筆かそれに近いものとしてよいのではないかと考える。北大図については、目録では今井八九郎編と推定しているが、上記の表記法は無いものの、

地形の輪郭はほぼ同一であるところからみて、妥当な推定と考えられる。

本図の作成年に関することとして、図中記事②に異人上陸の件を天保二辛卯年（1831）と明記している。この点について、『測量図取年記今井八九郎信名』（注③）には、「天保二年卯年六ヶ場所ヨリエトモ図取。即年帰」とあり、『今井信名経歴一班』（注②）にも、「同二年辛卯、東部六ヶ場所及ヒ東夷惠納沿岸ヲ測量ス。十二月測量ノ勞ヲ賞セラレ」とあつて、同年にエトモ（室蘭）の測量をしていることから、この件は測量時に得た直近情報であることが判る。天保二年には外国船はエトモ付近に何度か出現しているようだが、これは7月の事件のようである。これらの事実には矛盾はなく、従つて天保二年（1831）以降の作成になることは確かである。

北大図の作成年については、『今井信名経歴一班』の記事に、「同（天保）九年：厚岸湾口ノ大黒島等ヲ全測量ス。而シテ北境全部ノ沿岸周囲ノ測量ハ茲ニ於テ終了セリ。同十年己亥ヨリ北境全部ノ製図ニ着手シ、其十二年ニ至リ始テ全境ノ製図ヲ完成ス。」とあり、「北境全部」が樺太・千島を含む蝦夷地全体の意味にもとれるので、完成年については天保十二年（1841）まで下る可能性は考えておくべきであろう。本図については、札幌市中央図書館の目録にある「1831年作」というのは、帰着後間を置かず年内に作成されたことになるわけだが、この点はどうであろうか。

上記②に関する図中の記事について、北大図では図中注記の形で「異国舟停舟場」「此所ヨリ高草ノ中人数ヲカクシテ押行」とごく簡単に注記されているだけだが、本図では11行にわたって、地名、通報の経緯から、派遣されたエトモ在勤の武士名や人数など詳細に記載さ

れている。この事件についての情報を伝達する意図も併せもって描かれた可能性がある。

また、本図と北大図との描法を比較すると、本図の海岸地形の描写が格段に細かく丁寧であり、北大図を実用地図とすれば、本図は上呈図という位の差がある。これら記事内容、描法の二点から推定すると、本図は異国船事件に関連して何れかへ差し出す意図をもって作成されたことが考えられる。その場合は帰着後直ちに作成に着手した可能性を否定出来ないから、天保二年作ということもあり得ないことではない。提出先については、作者自署があることから、箱館奉行などの藩外は考えられず、藩内への報告用または本人の控図かと推測される。

（つづく）

【注】

①「今井八九郎図の縮尺について」・②「同一補遺」井口利夫

『アイヌ語地名研究会会報 26号・28号』06年

③「今井八九郎の事蹟」谷澤尚一・佐々木利和『北の文化』79年

④「今井八九郎作成の蝦夷地図考」佐々木利和

『MUSEUM No 352』80年

⑤「19世紀の室蘭図に見るアイヌ語地名」井口利夫

『アイヌ語地名研究』9 06年

⑥「今井信名経歴一班」今井徹 大正3年 東京国立博物館

⑦「蝦夷南海岸圖」約1/2・6万 北大図書館蔵

安政年間（1850年代後半頃）南部藩作成 極彩色 昼物 南部藩が警護を命じられた東蝦夷地の海岸図（4枚組）の一部

⑧「東西蝦夷地大河之図」今井八九郎 天保5年 東京国立博物館

（参考文献は次回に掲載）

（いぐち としお・アイヌ語地名、松浦武四郎研究家）

伊能忠敬測量隊が観測した星（一）

佐久間 達夫

伊能図が、近世を代表する広域図である国絵図、享保日本図、赤水図などを越えた精度の高い地図である要因として、天体観測による諸地点の経緯度、特に緯度を測定し、その測定値を地図作製に生かしたことがある。

伊能隊は、天体観測にあたって、どのような星（星座）を観測したかについて、忠敬自筆の「北極高度測量記」（享和二年識）、「恒星経緯表」（寛政九年）（文化七年）、「恒星表」（文化十年）、「恒星南北視高度」（享和三年）、「測量日記」「儀象考成」「臺台儀象志」などを依拠にして記してみよう。

一、北極高度測量記

「北極高度測量記」は、享和二年（一八〇二）に諸恒星の視高度を江戸深川黒江町（忠敬の江戸宅）で観測した視高度と対照して、観測地（羽越・信濃・越後などの国）のそれぞれの地点の緯度を算定した記録である。

もとは数十冊もあったらしいが、現在伊能忠敬記念館には、享和二年のものが一部残っているだけである。

資料一 北極高度測量記

・享和二壬戌歳 六月十一日

伊能忠敬記念館蔵

武州足立郡草加駅測 平行差加一分三〇秒



恒星名	視高度	原点（江戸深川宅）と観測地（草加駅）との差
離宮四	八三度一八分一五秒	一分五〇秒
離宮二	七七度四四分	八分三〇秒
羽林軍二六	三七度一九分二〇秒	九分一〇秒
北落師門	二二度三一分四〇秒	九分一〇秒
室宿二	八一度 八分	一分
室宿一	六八度一六分 五秒	一分二五秒
図	三五度五〇分	

○緯度の測定

宿泊地の十坪程度の空地に象限儀を備え付けて、一晚に五、六星から十星以上の北極出地度（方中高度）を観測し、原点とした江戸深川黒江町の伊能忠敬宅の方中高度との緯度差を求め、次に、その数値を原点の緯度に加減して観測地の緯度を求めた。この方法で、前記武蔵国草加駅の緯度を求めてみよう。

●草加駅の緯度

・江戸原点と草加駅の視高度差の平均値

(一分五〇秒十八分三〇秒十九分一〇秒十九分一〇秒十

一分十一分二五秒) ÷ 六十一〇分一〇秒

・江戸の原点の緯度 三五度四〇分三〇秒

・草加駅の緯度

三五度四〇分三〇秒十一〇分一〇秒 三五度五〇分四〇秒となる。

このように、草加駅の緯度を江戸と観測地との視高度の差の「平均値」で求めると、三五度五〇分四〇秒となる。忠敬は、地図上では三五度五〇分と記している。

二、測量日記

「測量日記」は、寛政十二年(一八〇〇)から文化十三年(一八一六)までの十次にわたる測量中の天気、来客、測量の経路などを記したもので、観測した星の名前は数えるほどしか記述されていない。しかし、日記は一日として欠落箇所はなく、恒星を観測した日は「此夜測量」「夜測量」「此夜晴天測る」などと記述されている。伊能隊の測量日数は三七五四日、天体観測日数は一四〇七日である。

資料二 測量日記

伊能忠敬記念館蔵

・第一次蝦夷地・奥州街道測量

寛政十二年七月六日

朝曇天、午中に薄曇、太陽を測量。六ツ半頃迄曇る。五ツ前より晴。此夜、勾陳、奎九(奎宿九)を測る。

・第七次九州第一回目測量

文化六年十月五日

朝晴天。先後手、六ツ前後、上松宿出立。……中略……

三、恒星経緯表 恒星表

須原宿迄測る。上松宿より三里九町、実測三里五町五十三間三尺。先手は九ツ前、後手は九ツ後に着。止宿本陣木村平左衛門。着後一同に当宿臨濟宗定勝寺へ立寄。唐画数品を一覧す。此夜晴天測量。此所暦局と北極出地およそ同度分也。

文化六年十月六日

朝晴天。地図測量に手分。地図は、我等、下河辺、文助、六ツ前須原宿出立。……中略……野尻宿迄測り九ツ前に着。

須原宿より一里三十町、実測一里二十八町十六間、止宿本陣森徳左衛門。此夜晴天測量。此所深川宅と、およそ北極出地同度也。

「恒星経緯表」「恒星表」は、康熙十三年(一六二四)にベルギー人、フェルジナンド・フェルビースト、中国名南懷仁が編纂した『臺台儀象志』と、乾隆九年(一七四四)にドイツ人で中国名載進賢が編纂した『儀象考成』のなかの「恒星表」などを参考にして、伊能忠敬が文化七年と文化十年における諸恒星の赤道緯度実測値と、『儀象考成』の数値から推算した赤道経緯度を作成したものである。

伊能忠敬記念館所蔵



○ 霊台儀象志附録諸儀象図

黄道儀 赤道儀などの図



四、伊能測量隊が観測した星名(星座名)

江戸時代迄の日本では星や星座の名前は中国のものを用いていたので忠敬の観測した星や星座の名前も中国名で書かれている。中国では天を人間社会の組織に擬して、帝王、百官、人物、事物等の名前を星座名にした。そして星座を「三垣二十八宿」に分けた。三垣とは、紫微垣、太微垣、天市垣の三つをいい、紫微垣は天帝の居所であり、太微垣は朝廷で天子が政事をとる場所である。また、天市垣は天子の直轄地(王都)である。

二十八宿とは、黄道に沿って天を一周して選ばれた二十八の星座で、中国では、天体の位置を示す基準として用いられた。二十八宿のそれぞれを代表する星を距星といい、その距星間の距離である赤道宿度、北極からの距離を示す距極度や、他の天体と距星からの距離である入宿度を用いることによって天体の位置が表わされる。

伊能隊が観測した星名(星座名)は、「北極高度測量記」「恒星南北視高度」「恒星経緯度」「恒星表」などに中国名で記述されている。しかし、現在では、多くの図書に西洋名で書かれているので、「星名一覽」では、中国星座名の次に括弧書きで西洋の星座名を記しておいた。また、個々の星についての中国と西洋の星名の同定は、研究者によって異説のあるものもあるので「星名一覽」では記述しなかった。したがって詳細については、左記の図書などを参考にしていただきたい。

『霊台儀象志』『儀象考成』

伊能忠敬記念館所蔵

『近世日本天文学史』

渡辺敏夫著

『国史・国文に現れる星の記録の検証』

斎藤国治著

『中国の星座の歴史』

大崎正次著

○ 伊能忠敬測量隊が観測した星名(星座名) 一覽

一 紫微垣

・北極五星(小熊座)

太子 帝 庶子 后宫 天枢

・勾陳六星(小熊座)

勾陳一 勾陳二 勾陳三

・天皇大帝一星

天皇大帝

・御女四星(竜座)

御女二 御女四

・尚書五星(竜座)

尚書二 尚書東増一

・華蓋七星(カシオペア座)

蓋一 蓋二 蓋三 杠九星(カシオペア座・麒麟座)

・紫微西藩(右垣牆七星)(竜座・大熊座)

右枢 少尉 上輔 少輔

・紫微東藩(左垣牆八星)(竜座・ケフェウス座)

左枢 上宰 少宰 上弼 少弼 上衛 少衛

・北斗七星(大熊座)

天枢 天璇 天璣 天權 玉衡 開陽 搖光
天枢西増一 天枢西増三 天璇西増一 天璇西増三

開陽東増一

・天槍三星(牛飼座)

天槍一 天槍二 天槍三

・玄戈一星(牛飼座)

玄戈

・太陽守一星(大熊座)

太陽守

・太尊一星(大熊座)

太尊

・天牢六星(大熊座)

天牢一

・勢四星 (小獅子座・大熊座)

勢一 勢二 勢三 勢四 勢西増四 勢西増九

・文昌六星(大熊座)

上相 次相 貴相 司祿 司命 司冠

・内階六星(大熊座)

内階一 内階三 内階四 内階五 内階西増八 内階西増九

・八穀八星(馭者座・麒麟座)

八穀一 八穀三 八穀五 八穀六 八穀東増二六 八穀西増一四

・伝舎九星(麒麟座)

伝舎一 天厨一 天厨三 天厨四 天厨六

・天格五星(竜座・ヘルクレス座)

天格一 天格二 天格三 天格四 天格五 天格内増二

二 太微垣

・五帝座五星(獅子座)

帝座一

・内屏四星(乙女座)

内屏三 内屏四

・太微右垣(右垣牆五星)(乙女座・獅子座)

右執法 西上將 西次將 西次相 西上相

・太微左垣(左垣牆五星)(乙女座・髮座)

左執法 東上相 東次相 東次將 東上將

・郎將一星(髮座)

郎將

・常陳七星(獵犬座)

常陳一

・三台六星(大熊座)

上台一 上台二 中台一 中台二 下台一 下台二

三台西増一 三台西増四

・少微四星(獅子座・小獅子座)

少微二

・靈台三星(獅子座)

靈台一

・明堂三星(獅子座)

明堂一 明堂二 明堂三

三 天市垣

・帝座一星(ヘルクレス座)

帝座

・候一星(蛇遺座)

候

・斗五星 (ヘルクレス座)

斗四

・斛四星(蛇遺座)

斛一 斛二

・列肆二星(蛇遺座)

列肆二

・宗正二星(蛇遺座)

宗正一 宗正二

・宗人四星(蛇遺座)

宗人一 宗人二 宗人三 宗人四

・宗二星 (蛇遺座)

宗一 宗二

・天市右垣(右垣牆一星)(ヘルクレス座・蛇座・蛇遺座)

河中 河間 晉 鄭 周 秦 蜀 巳 梁 楚 韓 晉西増一

・天市左垣(左垣牆一星)(ヘルクレス座・鶴座・蛇座・蛇遺座)

魏 趙 九河 中山 齋 吳越 徐 東海 燕 南海

宋 齋東増五 吳越西増一 東海西増一

・天紀九星(ヘルクレス座)

天紀二 天紀三 天紀八 天紀九 天紀北増一

・女牀三星(ヘルクレス座)

女牀一 女牀二 女牀三

・貫索九星(冠座)

貫索三 貫索四 貫索五 貫索七 貫索南増一三

・七公七星（ヘルクレス座・牛飼座）

七公二 七公三 七公六 七公七 七公東増七 七公東増一五

七公西増四 七公西増五 七公北増一

四 二十八宿

○ 東方七宿

・角宿二星（乙女座）

角宿一 角宿二

・天田二星（乙女座）

天田二

・天門二星（乙女座）

天門一 天門南増四

・庫楼十星（ケンタウルス座）

庫楼三 庫楼四 庫楼五 庫楼七

・柱十一星（ケンタウルス座・狼座）

柱一 柱三 柱五 柱六 柱九 柱一一

・亢宿四星（乙女座）

亢宿一 亢宿二 亢宿四 亢宿東増七 亢宿東増一〇

・大角一星（牛飼座）

大角 折威七 折威七星（天秤座）

・右摂提三星（牛飼座）

右摂提一 右摂提二 右摂提三 左摂提三星（牛飼座）

・氐宿四星（天秤座）

氐宿一 氐宿二 氐宿三 氐宿四 氐宿東増一四 氐宿北増二〇

・梗河三星（牛飼座）

梗河一 梗河二 招揺一星（牛飼座）

・天乳一星（蛇座）

天乳

・騎官十星（狼座）

騎官四

・房宿四星（蠍座）

房宿一 房宿二 房宿三 房宿四

・罰三星（蠍座）

罰一

・從官二星（狼座）

從官二

・尾宿九星（蠍座）

尾宿一 尾宿二 尾宿三 尾宿四 尾宿五 尾宿七

尾宿八 尾宿九

・箕宿四星（射手座）

箕宿一 箕宿二 箕宿三 箕宿四

・天幅二星（天秤座）

天幅二

・鍵閉一星（蠍座）

鍵閉

・日一星（天秤座）

日

・心宿三星（蠍座）

心宿一 心宿二 心宿三

次に中国名と西洋名の星の同定の一例を記すと、北の空に柄杓の形をした星座が「北斗七星」（大熊座）で、柄杓の底の明るい星から、

天枢 西洋名 α U M a ブーベ

天璇 β U M a ミラク

天璣 γ U M a フェクダ

天樞 δ U M a メグレス

玉衡 ε U M a アリオト

開陽 ζ U M a ミザル

揺光 η U M a アルカイド という。

（さくまたつお・伊能忠敬研究家、香取市）

「榎本武揚文書」解説余話

伊藤 栄子

昨年の十一月から、榎本隆充氏の御依頼をうけて、武揚の文書の解説を進めている。これらの文書は武揚の曾孫にあたる榎本隆充氏が、国立国会図書館から入手されたものと伺った。榎本家の西新宿の邸宅は戦災で焼失されたため、家に伝った文書は残っておらず、武揚が差し出した先での書簡を集めたものといわれる。全部で二百四通あり、簡単な書状から、細かに長々と認められた報告のような物まであって、これからの様な文書に出逢うか、大変興味深く解説をしている。

その中に釜次郎という名の時代の手紙があった。若き日の武揚である。オランダ留学から帰って間もなく、榎本は幕府の軍艦奉行となり、名も榎本和泉守武揚と改めた。和泉守というのは、神田和泉町に住んでいたからといわれ、これも榎本家特有のしやれであろう。以後釜次郎から武揚と名乗るようになる。

ここに紹介する中嶋三郎助の書を知ったのは、ある本の随筆からであった。およそ二十年くらい前、茶道のやき物にはまっていた頃、根津美術館へは時々通った。時に茶会が催され、古い道具の観賞もできる。その帰路には青山の骨董街をウインドウショッピングして楽しんだ。中嶋誠之助氏の店はこの通りにあった。当時はまだ知名度も高くなかった中嶋氏も、今や「開運なんでも鑑定団」に出演以来、お茶の間の人気者である。木鶏については氏の随筆に面白く書かれていて、木鶏氏の写真もあるので御覧頂きたい。

(以下古美術誌掲載の随筆)

三郎助公の消息

中嶋誠之助

しばらく維新の頃に遊びたい。

私はその消息(手紙)を捜しだしたのは、やっている御当人には申し訳ないが、まことにつまらぬ骨董即売会で、一流石油会社を脱サラして好きで始めた骨董屋の、その主人とは若い頃からの顔見知り、一度は義理で買物をしてやらなければと思っていた矢先に案内状を受け取り、よい潮時とばかりに出掛けていった新橋界隈の薄暗い貸画廊の二階会場であった。

ナカジマさん、あなたと同姓の人の書がありますよと壁に掛けられた小幅を指でさされて、ふと目をこらせば達筆すぎて何も読めぬが、虫喰いとシミだらけの手紙の末尾に「木鶏」とある。ぼろぼろのその軸を手にとってみれば、巻留めには中嶋三郎助公書とある。

中嶋三郎助、字は木鶏、この人こそ私が若い頃からその生きざまに傾倒し続けてきた幕末の武將で、残された僅かな文献を頼りにしてその人物像に肉迫してきたご当人なのである。

公は代々下田奉行の与力の家に生まれ、若くして蘭学を修め、天保年間に父の職を受けつぐや海防の火急なることを説いて、下田に砲台を築くのである。やがて嘉永六年、ペリーが来航して下田に投錨し、人々が異国人を恐れるなかを、小船に乗って単身訊問に往来して、その豪胆さを知られることになる。

嘉永八年に長崎にゆき、軍艦の操練法を学んで幕府海軍の軍艦頭取となるが、瘦躯病身のために退職している。人々が公の閑日を見て、この多難な時にと疑えば、病氣勝ちで激務には堪えぬが、国家急なれば豈一死に堪えざらんと答えたといわれる。

幕府の瓦解と共に二子をともなつて榎本武揚に従って函館に走ることになる。公の生きざまの光芒をはなつのはこの時のことで、

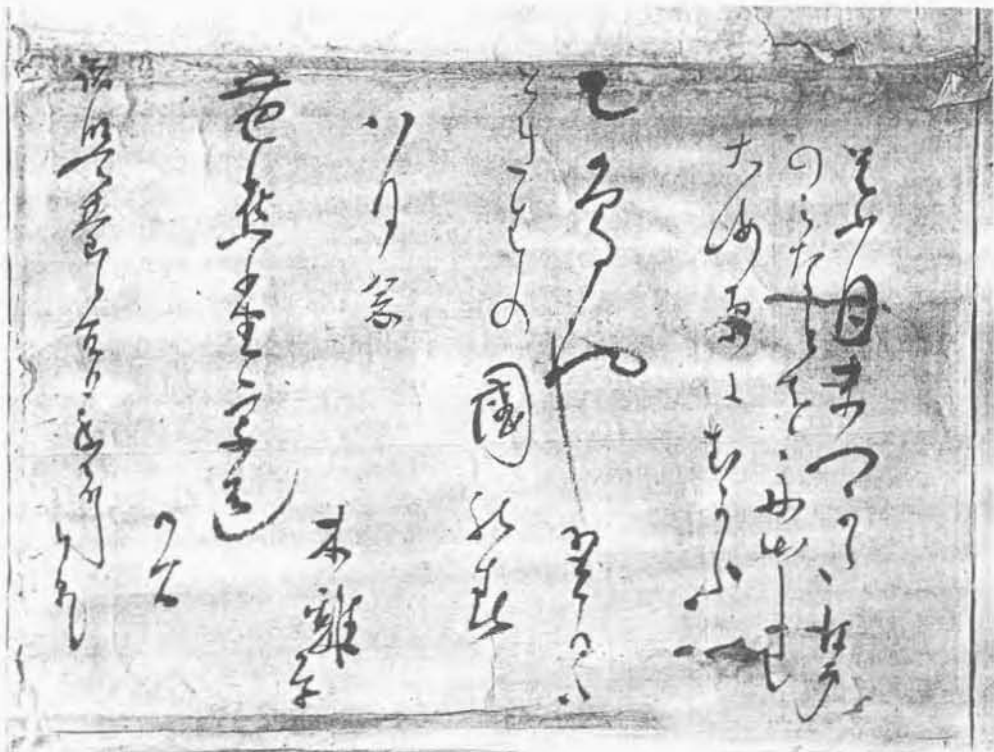
官軍の猛攻に五稜郭も開城し、榎本が降伏したあともその守備する千代ヶ岱砲台は屈せず、降伏勧告を受けるや「自分は幕臣である。仮に一死を許されても何の面目あつて人にまみえん」と答えて、長男次男と共に戦死するのである。

詩文にたくみな教養人でありながら、烈とした気骨を持っている公が、私の心に深い感銘を呼ぶのである。今の函館市には公を偲んで中島町の名前が付けられた一郭があり、その地を訪れた私はタクシーを捨てて、しばし佇んだものであった。

貸画廊の二階で脱サラ軒の主人に分けてもらった三郎助公の消息ほど、うれしい買物は近年にない。商売にもならず、他人が見たら何の価値もないオンボロ掛軸が、私にとっては熊野懷紙よりもありがたいのである。まこと趣味とは独善的なものであり、それゆえに尚更その道に走るのである。

思えば四年前、伊那の古九谷から始まったこの連載も、函館の消息文でひとまず小休止をしようと思う。読者の方々の声援に感謝しつつ、またもや気もそぞろの旅を、今度はひとりで続けていこう。

(骨董屋からくさ 店主)



中嶋三郎助の書状解読文

葉月^{はづきすえ}末つかた、江戸

のミなどを舟出して
大海原にむかふ

乙鳥^{よくひ}や翌日ハ

ときはの国の春

八月念

芭蕉、小生写送

候間

諸盟台へ宜（よろしく）御致声^{ちせい}

奉願候

*致声（伝言）

*乙鳥（いつちよう…つばめ）

*ときは（常磐）

*念（念または念日という、二十日のこと）

木鶏奉

この手紙の宛名はない。芭蕉の句を借りて、それとなく自分の気持ちを伝えているのではないか。何の変哲もないこの手紙も、三郎助の最後を知って読みなおしてみると次のような私の解釈となった。

「八月の末に、江戸の港を船出して、これから大海原を渡っていく。燕なら翌日は暖かい南国へ行くのだが：私は北の国の戦（いくさ）に旅立つ：皆さんに宜しく御伝えください。」（別れの挨拶）

わざわざ芭蕉の句を入れた意味を、大きな覚悟と私は受けとった。一見して穏やかな句の裏の意味を探ってみたのである。終りの一行は、

手紙には誰もが使う言葉だけれど、惜別の挨拶と考えたのは、感ぐり過ぎであろうか。もう一つの決め手は念という日付けであった。

戊辰戦争が始まり、徳川幕府の地位も揺ぎはじめていた頃、薩長と岩倉具視らの面々が、王政復古のクーデターを起し、徳川慶喜は官位を剥奪され、領地の没収が決まった。それまで四百万石だった將軍家の碌は七十万石に減封されて、駿河に移った。これでは家臣達の生活どころではない。この時徳川艦隊の司令官であった榎本武揚は、徳川の家臣達の生活の手段として、蝦夷の島の開拓の許可を新政府に嘆願する。しかし拒絶されたことで、武揚は奥、羽、越の列藩同盟と合流すべく開陽、回天、蟠竜、千代田等八艘の軍艦を率いて品川沖から脱走した。時に慶応四年（明治元年）八月十九日であった。

中嶋三郎助は浦賀奉行与力であった二人の息子、恒太郎と英次郎^{やす}を開陽丸に呼び、脱走に参加させた。妻のすずと生れたばかりの末子、与曾八は駿河に残った。こうした経緯から考えると、上掲の書状は出帆してすぐの八月二十日に開陽丸の船中で書かれたのではなからうか。文言からみても余計な言葉は何もない。出先で書く手紙には簡潔な文が多い。三郎助には常々ぜんそくの持病があったらしく、写真の様子からも瘦身で決して頑健には見えない。自身で漕出して船遊びをするとも考えられず、やはり武揚と行動を共にした時の書状ではないか。武揚達の脱走船団は品川を出てその夜は館山に碇泊し、これから先の軍議をはかった。武揚もこの船中から勝安房へ手紙を出している。船出してからの行手を見ていると、ここでのひと時が、彼らにとつては最後の静かな時間となった。翌二十日、船団は房総半島を廻り、犬吠岬へさしかかった頃、風雨が強く開陽丸は舵を失い檣を折り、ある船

は坐礁したり鹿島灘に入ってから更に災難が続く。その上仙台湾へ入る頃は、合流する筈の奥羽越列藩同盟は、次々に帰順、降伏して同盟軍は瓦解した。幸先のあまり良くない船出であった。武揚の率いる船団は天災による災害で戦う前に殆んど船が被害をうけ、予想外の損失をこうむった。海陽丸には四百人以上が乗っていたという。

周知の通り函館戦争の終りには、戦も激しくなり守備の堅固な五稜郭へ、兵を引揚げることを決めたが、「ここを墳墓の地に定め候」と中嶋は断った。間もなく京都政権軍が千代ガ岡陣屋に猛攻撃をかけ、中嶋父子は、壮絶な戦死をする。三郎助49才、長男22才、次男は19才であった。時に明治二年五月十六日。あくまでも、幕臣として殉じたのである。武揚は切腹を差し止められ、残る部下達の命と引替えに降伏した。彼らは常に幕臣としての気概を失うことはなかったのである。

ここで、釜次郎から三郎助に宛てた心あたたまる一紙を載せる。

解説文

其後は意外の御無音

申上候処、皆様御かわりも

のふ被為入候哉、一寸相伺申候

手前事も急ニエゾ地

へ罷越候間、当冬迄は

御便り不申上候まゝ随分

御喜見（機嫌）よふ被為入候様

御ねんじ申上候 さては甚軽

微ながら此金子、御子息様

御玩物御とゝのへ被下候ハバ

其後は意外の御無音
申上候処、皆様御かわりも
のふ被為入候哉、一寸相伺申候
手前事も急ニエゾ地
へ罷越候間、当冬迄は
御便り不申上候まゝ随分
御喜見（機嫌）よふ被為入候様
御ねんじ申上候 さては甚軽
微ながら此金子、御子息様
御玩物御とゝのへ被下候ハバ

本懐の至二候 将、四十八君
御生長ヲ待上候 御生長の上は
乍不及、学問其外御世話
可申上候間、必ズ、御心配
無之様存候 当時はやり
のはしかは如何二候や
御あんじ申上候 まづは
出立前、乱筆早々

已上

六月廿九日

榎本釜次郎

中嶋御隠居様

現代文

その後は、思いもよらず御無沙汰を申し上げました。

皆様お変わりございませんか、お伺い致します。

私も急に蝦夷地に來まして、この冬までは御便りも致さずに居りましたが、お健やにお過しのこと存じます。

さて、大へん些少な金額ですが、御子様のオモチャを御ととのえ下されば、嬉しいです。また四十八君の御成長を楽しみに致しております。御成長の上は学問その他御世話申し上げますから、必ず御心配なきよう存じます。

此節流行のはしかは大丈夫ですか。御案じ申し上げます。
先ずは出立前、乱筆早々

本懐の至二候 将、四十八君
御生長ヲ待上候 御生長の上は
乍不及、学問其外御世話
可申上候間、必ズ、御心配
無之様存候 当時はやり
のはしかは如何二候や
御あんじ申上候 まづは
出立前、乱筆早々
已上
六月廿九日
榎本釜次郎
中嶋御隠居様

中嶋三郎助は下田奉行与力から、のち浦賀奉行の属となった。名は永胤、号を抱質庵木鶏（とく）という。漢学、国学、和歌、俳句、書道に至るまで造詣の深い人であったが、彼の得意とする技術は、造船術と西洋兵学であった。その頃、長州の桂小五郎（木戸孝允）が弟子入りしている。彼はここで船大工二人をつれて西洋式造船を学んだ。推薦者は吉田松陰であった。

幕府が海軍創設に着手した頃、オランダはその為の教育に手を貸すことを申し出ていて、実習船（蒸気船）と教官も提供しようというのである。幕府はこれを受けて、長崎に海軍伝習所を設立した。教課は造船術、航海術、蒸気機関学、砲術、兵学一般である。そこで伝習生の人選が進められた。浦賀奉行所には与力二人、同心十人を送るよう指示がきた。そこで中嶋はもう一人の与力、佐々倉桐太郎と他の者をつれ、長崎海軍伝習所一期生となった。ちなみに同期に入学した勝麟太郎（のちの海舟）は落第して、二期に入学の榎本武揚と同期生となる。武揚は一期から、伊沢謹吾の付き人として入っていたが、オランダ人の教官に勉学態度を高く評価されて、二期には正式の伝習生となった。また三郎助は、更に高度な技術修得のため、もう一期伝習所に留まることを申し渡された。さきに落第した勝麟太郎の方は、成績不良で将来の艦長、教官としての必要な知識、技術を身につけられず、もう一期同じ課目の履修を求められていた。長崎伝習所が閉鎖され新たに築地に軍艦操練所が設けられ、二人とも教授方となり、中嶋は教頭で迎えられている。時に三郎助は35才で、武揚は三郎助より凡そ15才の年下である。いっぽう威臨丸の艦長としてアメリカから帰国した勝麟太郎は、艦長不資格で軍艦操練所をお役御免となった。とにかく三郎助と武揚は技術者であり、勝は根っからの政治家であった。

長崎へ行く前、釜次郎は昌平黉在学中から江川太郎左衛門にオランダ語を、江川の江戸屋敷にいた中浜万次郎について英語を学んでいた。十七才の嘉永五年、箱館奉行の堀織部正の小姓として、北海道から樺太探検に出かけた。堀は江川の部下で品川台場築造の現場責任者をしていて、堀に蝦夷地巡察が命じられた時、江川英龍が武揚を従者として推薦したのであろうといわれる。当時の日本にとって大きな問題であった北辺防備や、外国事情について鎖国とはいえ、心ある人々は深い関心を持ちはじめていた。エゾ地というから、この時代の手紙であろう。武揚は中嶋とは江川の蘭学塾で知りあったのではなからうか。「手前ことも急にエゾ地へ罷越候間、当冬迄は御便りも申し上げず」文面から考えるとエゾ地に滞在し、ここを出立直前に書かれたものか、とにかくまだ二十才前の若者の手紙としては、人の子に対する気配りがゆき届いている。そのころ流行していた麻疹は大丈夫だったか、ポケットマネーから玩具代を送るなどは、とても教えごとで出来るものではない。武揚は生涯を通して、人に対する配慮を欠かさない人であった。二人の交わりがよく分かる手紙である。

武揚はこの他にもう一通、木鷄盟兄苑として手紙を残している。釜次郎にとって、漢学と蘭学という二人の共通の学問、また海外事情への関心等、三郎助は常に頼れる先輩であったことが分かる。

その後の中嶋家

三郎助父子が戦死したあと妻のすずは子等をつれ、暫く清水の妙慶寺に隠棲していて、ここでは清水の次郎長の保護を受けていたという。三郎助には三男の他にお順とお鑑という二女がいた。戦死の前夜、彼の遺言書は三男への形見の小刀と共に、小者の鶴吉がひそかに闇をついて持ち出していたのである。その後家族は東京へ移り、本郷の富士

前町で生活していたがくらし向きは苦しかった。それを知った木戸孝允は子供達を引き取り、世話をしていた。間もなく木戸が他界したため、そのあと榎本武揚が受け継いで家族の面倒を見たという。

三男与曾八は成人したのち海軍への道を進み、英国のグラスゴー大学へ留学し、のち海軍中將となった。また参考文献の「義烈中嶋三郎助父子」の編者田口由三氏は次女お鑑の夫である。

参考文献

＊幕臣たちと技術立国

（江川英龍・中嶋三郎助・榎本武揚が追った夢）集英社新書

＊義烈中嶋三郎助父子 田口由三編

同方会誌三六

＊古美術月刊誌「目の眼」平成四年二月号

里文出版

＊榎本武揚 加茂儀一著

中央公論社



若き日の武揚
（明治の若き群像、
森有礼旧蔵アルバムより）

○今年には榎本武揚没後九十九年目に当たります。（仏式ではこの年を百回忌という）榎本家では、この十月二十日（土）に文京区の吉祥寺で法要を営まれるそうです。時間等の詳細は次号会報でお知らせします。：命日は明治四十一年十月二十七日：（いとう えいこ・古文書研究家）

編集余話

能登半島地震では「能登さいはて資料館」の被害が気になりましたが、河崎さんのお便りで被害軽微と聞いてほっとしました。「群青の人」から本会報が新聞報道されました。「群青の人」は能美龍一郎氏の作。別冊「かざりや清次」の著者は剣町柳一郎氏。どちらも「ゆういちろう」さんで同一人物。本名は早瀬徹さんです。次回作品のヒントを72頁に頂戴しました。群蔵の明日、発表が待たれます。

「かざりや清次」にありました。「頑固なだけでは得るものはない。愚痴を口にしては心が狭くなる。怒りと葛藤、後悔と失望を踏みつけて、人は足もとを固めなければならぬ」

「群青の人」の会話から。「二手に分かれて能登半島を測量し、松波の海辺で忠敬一行は郡蔵たちと再会する。」

「勘解由様、お久しぶりでございます。お体はいかがでしたでしょうか」

「おお、郡蔵。思ったより早かったのう」「さぞ、たいそうな思いをしたことだろう。久しぶりに今夜はいつしよに天測しようぞ」

早瀬さんが史実から足元を語る。（四千万歩の男）を越えた新しい忠敬像や周辺の人々の姿です。世間に感性の豊かさが存在していました。

「さりげなく有徳の士」は県立佐原高校同窓会報。三回生匿名氏より同校へ「伊能大図総覧」を寄贈。さすがここにも賢人あり。今号では受賞祝辞、新事実、研究成果に、皆様からのお便りをたくさん頂戴しました。厚く御礼です。次号にも新事実が予定されています。新伊能ウォークは？「ふるさとを歩こう。わたしのふるさと あなたのふるさと」全国の皆さんを訪ねる日本一周ウォークに期待が膨らみます。ご存知永代橋、忠敬さんから代は換わり、大正十五年に出来た今の橋は一八五呎。このたび重要文化財に指定されました。（福田弘行）

忠敬談話室だより

お便り特集

たくさんのご支援に感謝です。

浅井京子さん 日野市

ご存知の記事かもしれませんが、忠敬さんのお手本とありますのでお届けします。今春は五月の連休明けに、早大の會津八一博物館で永青文庫から白隠を拝借しての展覧会。六月には八王子の夢美術館で旧富岡美術館の東洋陶器の展覧会をいたします。

東京新聞 07年1月26日 美の流儀

作家 なだいなださん

『老いて『きざ』に生きる』から抄録
『老いの美学を実践した理想の人として江戸時代に最初に日本地図を作った伊能忠敬を挙げる。忠敬は五十歳を過ぎてから日本列島を歩き、地図を作る大きな仕事をした。当時、五十歳といえは、今の七十歳ぐらい。年を取ってもやりたいという意思があれば、偉業も成し遂げられる。老人のかがみです。だから、複製ですけど、忠敬の地図を一番の宝物にしています。面相筆を使い、地名や地形が精密に書かれた日本列島は実に美しい。人生の有終の美を飾った忠敬の生きざまと重なりますよ』

編集部・八王子夢美術館へ是非一度お越しを。

5・20まで「クレパス画名作展」

岡本太郎、熊谷守一など近現代画家の作品

☎042・6221・6777

朝岡洋子さん 千葉市

白子の道添いの河津桜が満開で、思いがけずうれいお花見が出来ました。(三月四日)

安藤政彦さん 横浜市

昔小学六年生の時には今と同じ机に向かっていた時がありました。今は各地区にありますシルバー人材センターの会員になり、センターの仲介で植木の仕事をしております。

石橋輝樹さん 新潟市

現在の職場は三月退職の予定です。今秋の佐渡旅行を楽しみにしております。

井上靖子さん 所沢市

忠敬研究47号が届きました。海上保安庁の大図の見つかったこと、豊富な「話題」、内容豊かな支部だよりなど73頁にぎゅつりつまつていて、老眼鏡を拭き直しゆつくり拝見させて頂きます。有難うございます。

岩城 元さん 中国・桂林市

私は昨春秋、五年間いたハルビン理工大学から桂林の広西師範大学に移りました。相変わらずボランティアで日本語を教えております。余談ながら、クラスの中で男の子は一人か二人ですから、女子大学にいるようなものです。桂林はご承知とは存じますが、風光明媚な所です。「景色は最高、人間は最低」(けちな人が目立つという意味でしょうか)と揶揄する中国人もいます

が、何とも面白がる性分のせいとか、楽しくやっております。

編集部・貴重な現代中国の一面を伝えてきた岩城さんのAICコラム「桂林発なんのこっちゃ」は三月で終了になりました。

長い間、情報発信のご苦勞に感謝します。

植田浩一さん 東京都大田区

気になっていることがあります。江ノ島(神奈川県藤沢市)に岩本院という江戸時代からの古い家があります。歌舞伎の『白浪五人男』にも「岩本院の稚児上がり……」と言及されている古いお籠り所^{いり}で、現在は一般旅館並みの営業をしているようです。この家に、たまたみ二疊敷きくらいの大きな江ノ島測量図の前に見たことがあります。当時は、伊能図はそんなに騒がれておらず、伊能測量隊も江ノ島に泊ったが岩本院には宿泊しなかったらしいが、この江ノ島測量図は後で見えた伊豆大島測量図(伊能図)と似た美麗な地図だったと思います。調べてほしいと思います。

追伸 二十年前くらい前のことで、壁にかけられるように装丁されていて、端に年号(多分、測量した日付?)が附記されていたと思います。その後、伊能隊の大島測量図を見て、類似に驚いた記憶があります。

江口俊子さん 千葉県山武市

47号36頁絵の中で犬をつれた女性にもう一冊

の本を渡ししました。春の景色などそのうちに：

大沼 晃さん 藤沢市

昨秋、手術後の傷も少し癒えたので、神奈川県立歴史博物館に出かけ「富士山大噴火―宝永の「砂降り」―特別展を見ました。出品のなかに伊能景利の宝永四年の日記と伊能忠敬記念館所蔵の火山灰九点が出ておりました。いまだ記念館を訪れても気づかなかった物なので、こんな物まで採取し整理整頓し代々引き継がれ、大事にしていたことに驚いたしだいです。何故、火山灰のようなものまで保存したのか興味しんしんです。

岡部孝子さん

東京都足立区

日経新聞に会員

の芳賀啓さんが

江戸初期の地図

を復刻出版された記事がありました。



小滝規子さん 東京都渋谷区

本会の研究活動とは、ほど遠くに居るものですが、会報を拝見して、少しずつ刺激を受けております。

垣見壮一さん 新潟市

雛祭りを過ぎて雪となりました。舞い降りて来る雪に何か落ち着いた感じがします。佐渡旅行はこれから準備をすすめてまいります。私は昨

年の病気を機会に退

職、地域の仕事とポ

ランティアでひっそ

りと過しています。

皆様にお会いできる

日を楽しみにしてい

ます。

日曜日は快晴マンサ

ク満開、写真は福寿

草です。



河西 浩さん 甲府市

今年度転任して新任校へ。久しぶりに教務主任

より六年の担任へ。算数で歩測と平均（東京書

籍、伊能忠敬を江戸後期の文化（教育出版）で

普通に教科書が扱っているところに、伊能忠敬

さんのすごさが感じられた一年でした。

加藤巷児さん 狭山市

先日、昔勤めていた仲間に銀座へ誘われました。

その若い娘さんが珍しく地図が好きだという

伊能忠敬研究会の話をしたら入りたいと云って

いたので、いろいろ資料を送ってあげたことが

ありました。四月には同窓会の埼玉支部総会が

ありますので、希望者に伊能測量隊の県下にお

ける資料を配布することになっています。

神戸利行さん 兵庫県加東市

一度、旅行などに参加したいのですが時期が合いません。会員の皆さんと一度出合い、忠敬に

ついてたくさん話をしてみたいと思っています。

小島一仁さん 香取市

古文書学会で伊能景利日記を読んでいます。

伊能家のことを調べるには大へん貴重な史料で

すが、これまで読んだ人はほとんどなかったよ

うです。

斉藤サタさん 函館市

昨夏、渡辺一郎ご夫妻に、ご来函戴きました。

主人斉藤重則共々感激の二日間でした。有難う

御座いました。

佐久間達夫さん 香取市

庭の馬酔木の花が満開です。旧宅の中庭の発掘

も用水堀の橋を渡ったむこう側は終り、元通り

に土で覆いました。現在は元の記念館の脇（氏

神様の前）の発掘をしています。私もとときどき

見に行っています。（三月十二日）

座間喜美さん 東京都中野区

いつも研究会誌を楽しく拝見しております。

白根貞夫さん 横須賀市

本会の隆盛を祈ります。いつも会誌を楽しく読

ませて頂いています。

武川芳男さん 宮城県大崎市

新しい忠敬地図発見のテレビ見えています。今年は何かと忙しくなりそうです。

以下同封の記念広報情報。今年の八月二十五日は、川柳発祥二五〇年記念日です。

川柳が 芽吹いて江戸が 江戸になる

「川柳」という文芸の名称は、明治以降に固定したのですが、その元となったのが、柄井八右衛門という人の俳名「川柳」で、その名が世に現れてから、今年でちょうど二五〇年になります。この八右衛門という人は、江戸は浅草新堀端（現台東区蔵前）に現存する天台宗龍宝寺門前の名主で、宝暦七年（一七五七）四〇歳の折に、前句附という附合文芸の師匠となり、号を「川柳」と称し、八月二十五日に、はじめて万句合の第一回開キを開始したそうです。

天からの 便りのままの 雪がいい 影法師

田中精夫さん 鳥取市

津ノ井小学校に転動しました。

塚本倫正さん 成田市

機関誌、素晴らしいと皆さんほめています。

津島健治さん 香取市

毎号愉しみにしております。「忠敬古文書（原文・釈文・解説）」の記事がもう少し有ると嬉しいです。例えば忠敬の写した阿蘭陀風説書等。只今、古文書勉強中です。

辻本元博さん 堺市

ご激励のお陰で段々と予定が決まってきました。日本地球惑星連合学会07年大会で発表します。

「伊能忠敬の山島方位記に基づく19世紀初頭の日本の地磁気偏角の解析」5月21日募張メッセ。伊能研究は伊能図と日記に山島方位記を加え、更に深くその内容を探れば、未知の活用要素が発掘できる再出発点に來たといえます。

直江泰子さん 茨城県筑西市

「第47号」頂戴しました。丁度、紫峰さんの梅のお軸を例年かけておりますので、「芳名録」で潮来の祖母（ます）と紫峰大叔父のお名を拝見、なつかしうございました。

西川 治さん 多摩市

伊能洋様へご受賞おめでとうございます。「研究誌」毎号充実、新鮮で関係者のご尽力に感謝、敬意を表します。

馬場良平さん 佐賀県武雄市

「塚崎・唐津往還を歩く会」を主宰して丸五年。肥前地方の旧往還は伊能測量隊の足跡をたどる道でもあります。これからも歴史道探訪を行ってゆきたい。

藤岡健夫さん 横浜市

暖かすぎると思っていましたらこのところ寒くなり開花も戸惑っているようです。編集にご苦勞のあとがしのべれます。先般転居しました。引越先に従来の書籍を入れる場所が少なく、集めた忠敬関係の一般書物をどのように生かしたらよいか思案しております。（三月十八日）

堀江敏夫さん 苫小牧市

今年は雪が少なく、近くのゴルフ場が三月十日にオープンするそうです。三月一日に苫小牧三田会、富山県人会とダブルの懇親会があり、かなり酒を飲みました。今年は一泊で総会・懇親会に出席したいと思います。（三月三日）

前田幸子さん 東京都稲城市

「井上ひさし展」

「忠敬ブームの原点を訪ねて」



四月一日、柏木理事のお誘いで「市川の文化人展 井上ひさし展」を見学しました。

井上氏は小説『四千万歩の男』で「伊能忠敬ブーム」の火付け役となった作家。会場に再現された書齋（圧巻！）の膨大な蔵書の中には忠敬関連本も見えました。

史跡と文学の町・市川は校も文化も爛漫でした。

詩歌ゆかりの地・市川真間の文学散歩を
楽しみました。

満開の桜と陽光の下、史跡・文学碑めぐ
りで市川の春を満喫しました。

松田昭二さん 京丹後市

本年は丹後でも異常気象。暖冬のあとの春。桜
の花に雪を見たのは八十年の生涯のうち初めて
の様な気がします。

宮内 敏さん 銚子市

47号会誌の「E・Pauer教授会見記」にび
つくりしました。三年程前になりますが教授か
ら突然手紙を頂き、少誌「伊能忠敬翁」を送つ
てほしいとのことでした。小誌の資料提供者の
一人であった徳山大学の富吉様を介して出版前
の小誌の情報が届いていたからでした。その後、
完成したところ、先生は日本にこられていたこ
とを知りました。直接手渡したいと思い、ド
イツにメールをいれ、日本で連絡がとれること
を期待したのですが、結局、行き違いになりド
イツに郵送しました。昨年正月、マールブルグ
のカレンダーに添えて、大学を退官したが、ド
イツ政府援助による日本研究については当面続
けるむねの手紙を頂いていたからです。

八木 勲さん さいたま市

伊能忠敬研究会に入会し、伊能忠敬の偉大さを
更に深めることができました。研究会のみなき
まに感謝しております。

安川義巳さん 旭川市

第47号の日本海文学大賞の記事から作品集を
中日新聞より残部僅少の処を無理に分けていた
できました。日本全国に伊能測量の足跡が刻ま
れており、うらやましく思っています。私の住
む北海道北部だけは残念ながら縁が無かった様
です。過日、富岡八幡宮で伊能像に初めて接し
て感激でした。研究会はじめ皆さんのご努力に
感激しています。

矢能 彰さん さいたま市

社員研修のほか、地域市民講師活動に軸足を移
しつつあります。「五五歳から本当に生きた伊能
忠敬」の題で、数回県内公民館のシニア講座で
お呼びがかりました。

山浦佐智代さん 三条市

新潟はお酒がおいしいと評判ですが、そのせい
か新潟支部の集まりは必ず飲み会です。私は飲
めませんので、食べるだけで参加しております。
九州支部ははじめに勉強会があるようです。

山口善市さん 茨城県守谷市

いつも素晴らしい会誌をありがとうございます。

山本公之さん 小平市

昨日、上野の国立博物館に友の会で参加。今度
新規開館する「日本館」で忠敬も使ったであろ
う「遠眼鏡」が展示され説明がありました。

『望遠鏡は1608年に発明され、早くから日

本に渡来し、渋川春海も銀河が微光の星の集まり
であると確認しているが、観測機器として用
いられるようになったのは宝暦改暦のときから
である。このとき長崎の遠メガネ製作者森仁左
衛門の望遠鏡が日食の観測などに使われた。し
かし、本格的に天文観測に用いられ始めたのは、
十八世紀末の寛政年間ごろから麻田剛立とそ
の門下生たちによって象限儀や子午儀に使われ
ていた。大阪の岩橋善兵衛の望遠鏡は江戸の天
文台にも納められ、伊能忠敬が測量に使用した
望遠鏡もそのひとつである。善兵衛は太陽黒点
や月、惑星などを観測し、その著作「平天儀図
解」にスケッチを載せている。望遠鏡製作メモ
は「サイツクリ帳」に現存。大谷亮吉著「伊
能忠敬」で、精密簡便な測器を製出した戸田東
三郎、大野弥三郎等に望遠鏡の鏡玉は和泉国貝
塚の人岩崎善兵衛のものを使用せりとある。『
日本館一階 天を知る―天球儀・天文から
明治より遠い江戸の天近し

横川淳一郎さん 兵庫県丹波市

会報いつも楽しく読んでいます。有難うござい
ます。伊能測量に係る古文書を捜している
のですが出て来ません。

渡辺楨子さん 東京都練馬区

昨年より体をこわし介護老人保健施設に来てお
りまして一人での外出が出来ず残念に思ってい
ます。一日も早く直り絵を見せて頂く事の出来
ますのを念じております。御盛会を祈ります。

日々の話題

■協役にスポットライトを 早瀬徹さん(作家)

関連情報 10 頁 67 頁

「群青の人」、私自身今ひとつ納得のいかぬ仕上げになりました。フィクションより、歴史の事実が出てきているためでしょう。読まれる前から、こう申し上げては失礼なことと思いますが。昔も今も、人のやること、思うことは同じです。

これからは協役を見つめて参りたいと願っています。そして、今一度、忠敬さんが加州に入る前、加州大聖寺に來た時の話をまとめたいと考えております。彼はその地で面白い人物に会ったと仮定して……物語がはじまる予定です。忠敬さん、そして平山郡蔵さんにもいろいろスポットライトをお当てあげて下さいませ。

■受贈地図(写本) 武田威さんから 14 鋪

草苔堂武田蔵書に追加

- ・行基大日本國圖 時期不詳
- ・道中圖 元禄 4 年 相模屋太兵衛
- ・大日本行程大繪圖 安政 4 年 京都書林②
- ・日本國大畧武鑑之圖写 白枺子書写
- ・大日本海陸全圖 文久 4 年 東都書肆
- ・道中圖 明治 12 年 春田篤次
- ・大日本道中細見圖 明治 14 年 平野傳吉
- ・大日本鉄道線路全圖 明治 24 年 鉄道廳 他
- ・武田さん しばらく体調すぐれず、所謂フラフラ病に悩まされました。ボケ防止の脳トレのよい方法を、ご存じでしたら是非ご教示ねがいます。

■『地球人の地図思考』 西川 治著

ー世界地図博物館創設を願ってー

昭和 19 年秋、地理学科入門以来今日までに、著者は学習・研究・社会的貢献面などで、どのように地図と関わってきたか、その長い多方面に亘る経験を踏まえて、地図の思想・本質論、地図史の国土観・世界観的意義等を省察して、地図研究・教育の強化、高度情報時代の国立地図学博物館・地理情報学研究センターの創設運動を展開しながら発表してきた論文・エッセイなどをまとめたユニークな著作である。

前著『日本観と自然環境』につづき、人間環境学の学際的フォーラム作りをめざす学術上の還暦記念書。 ¥4,725

晩印書館 ☎03・3814・0853

あかつきいんしゃん

お知らせ

お願い・同封ハガキをポストへ

■秋の佐渡旅行

「正式募集は 8 月ですが、見込みを同封ハガキでお知らせ下さい」

10 月 14 日(日) ～ 15 日(月)

佐渡の伊能図見学、ゆかりの地探訪など追加オプション 16 日(火)は新潟観光
柴田収蔵情報の公開捜査です。幕末に佐渡が生んだ異色の地理学者。資料が少ないため情報を広く探しています。(山浦さんか事務局へ)

■祝賀会・総会 6 月 24 日(日)

第一部 東京・江東区 富岡八幡宮婚儀殿
午後 1・30 ～ 3・20

・「大図総覧」報告講演 渡辺、星埜、鈴木各氏
・07 年度総会、NPO 法人化推進ほか
第二部 午後 3・30 ～ 5・00

・伊能ご夫妻紺綬褒章受章祝賀会
・安藤さん目録制作顕彰会・懇親会
□費用・五千元(当日徴収)

□事前申込要 同封ハガキでお願いします。

なお、欠席の方は総会議案へ委任状をお願い致します。提案議題は別紙をご覧ください。

□照会先 ☎042・424・4568 福田

■新入会員です。どうぞよろしく。

宮地 滋さん 伊万里市

伊万里湾に面する旧漁村で昭和六年十月三日を生とし、二六年に就職、六一歳で退職して、何をする目的もなく平凡に暮らしていましたが、テレビの日本史番組「伊能測量隊一行が伊万里地方に來たのはいつか」から私の歴史に興味の始まりです。平成十三年秋、佐原の伊能記念館を見学しました。

■「談話室」開催模様と次回予定

第一回 3 月 15 日 荻原さん「江戸天文台図発見」伊藤さん「榎本武揚その後」ほか。
第二回 4 月 19 日 星埜さん「正月不知」山本さん「国立科学博物館の遠眼鏡」ほか。

5 月、6 月は総会準備で休会します。

第三回 予定 7 月 25 日(水) 議題・会報 48 号

■「芳名録」は誌面都合により休載します。

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

ー予定ー

第49号締切 6月末 発行 8月

②例会・見学会の開催

第50号締切 9月末 発行 11月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第51号締切 12月末 発行 2月

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万元を左記にお送り下さい。
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

④ (04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転)

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax

03-3466-9752

事務局メール fuku-inh@gj9.so-net.ne.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。
話題、各種情報、近況などお便りをお待ちしています。

伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページは秋葉武晃さんの担当です。

<http://inh-tadataka.org/>

速報充実 時代は動く

史料情報は、「資料室」として坂本幹事です。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など御覧いただけます。大図画像に情報補充

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

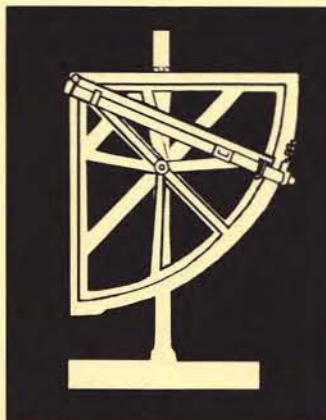
編集後記 六月は富岡八幡宮！ 忠敬銅像に年輪の輝き！

二月の南国土佐はやぶ椿が満開のへんろ道。♪「鯨釣ったと人の云う」♪ 鯨に出会えました。定置網に掛かった鯨を地元の皆さんが平等におすそ分けの場面。今日は三好で小さい。肉の塊は人数分にさばかれしました。夕飯はごちそう「すき焼き」だそうです。黒潮が接岸すること地に共生の原点が見えました◇地図は天から地面を見下ろす神の目だとも言われています。前号で河崎さん「自分が熟知している地域を見てこそ伊能図の真価が実感出来る感動体験」とは仏の目ですね◇「日本資本主義の父」渋沢栄一の『論語とそばん』に注目。ビジネスはルールや倫理に背かないこと。栄一は論語を引き、人と人の交わりの根本は思いやる心、すなわち「恕(じよ)」を説く◇江戸しぐさの越川さん。老人は人生の先輩として凛としたものを持ち、若い人を笑わせ引き立て良いものを伝えていくことを目標に。後進の役に立つよう自分自身の心を豊かに、元気に暮らすことから始めたと◇四月十三日は旧暦忠敬忌。異質の出会いは源空寺の隣人谷文晁さん。「江戸の動物展」には「亀と蝶図」「駱駝図」。上からも下からも同音歌(回文)あり。(永き世のとおのねふりの皆めさめ 浪のり舟の音のよきかな) 文晁(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.48 2007



TOPICS

Mr.and Mrs.Inoh Got Dark-blue Ribbon Medal
 Congratulates on Mr.and Mrs.Inoh's Decorations
 Mr.Inoh's Congratulates on Decorations
 Mr.and Mrs.Inoh's Medals for their Long-standing
 A Detailed Plan of Asakusa Observatory has been Discovered
 "The Inoh Tadataka Journal" Introduced "Gunjo no hito"

Sankei Shimbun 1
 Kanakubo Toshitomo 2
 Ueda Kouichi 3
 Nishikawa Osamu 4
 Ogiwara Tetuo 6
 Hokuriku
 Cyunichi Shimbun 10

Report of the Investigation about "The Copy of Large-Scale
 Inoh Map" in the Japan Coast
 Place Names and Landscapes in "Inoh Daizu Soran" (2)
 Inoh Tadanori : An Incomplete Astronomer
 I Looked up Southern Starlit Sky in Bali Island at Night
 From Harvard University for the first woman president
 Kitani Michinobu's Healthy Walking

Suzuki Junko 11
 Hoshino Yoshihisa 16
 Sakuma Tatsuo 21
 Ueda Katsutoshi 26
 Editorial Department 30
 Asahi Shimbun 41

ARTICLES

Inoh Tadataka as a Pioneer of Culture (5)
 The Hamataku Miyauchi Family Documents (2)
 Mamiya Rinzo's Condition of Disease and Cause of Death
 The Stars Measured by Inoh Survey Team (1)
 Anecdotes about Decoding Works on "Enomoto Takeaki"

Miyauchi Satoshi 31
 Miyauchi Satoshi 34
 Sugiura Morikuni 36
 Sakuma Tatsuo 54
 Itoh Eiko 61

REGIONAL MATERIALS

Inoh's Survey in Kumihama (2)
 Imai Hachikuro's "Map of Muroran" (1)

Matsuda Syoji 42
 Iguchi Toshio 46

MEETING ROOM

FEATURE ARTICLES: Letters from Members
 Daily Topics and Informations

68
 Editorial Department 72

Edited and Published
 by
 THE INOH TADATAKA SOCIETY